



くまもとまちづくり
シンポジウム
報 告 書

熊本県

くまもとアートポリス シンポジウム

〈テーマ〉

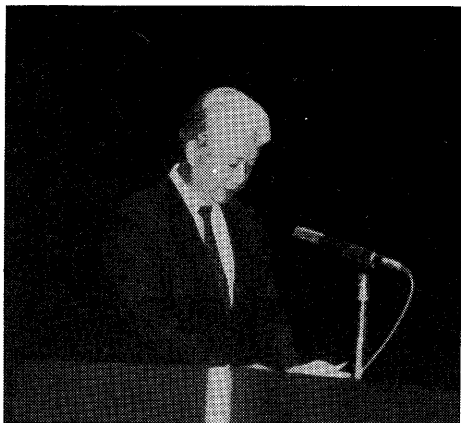
—都市にデザインを、田園にアイデアを—

- 日 時 昭和63年11月1日（火） 10:00～12:30
- 会 場 熊本県立劇場演劇ホール
- 主 催 熊本県
- 後 援 建設省・熊本市・熊本県市長会・熊本県町村会
(社)熊本県建築士会・(社)熊本県建築士事務所協会・(社)熊本県建設業協会
日本建築学会九州支部熊本支所・熊本まちづくり協議会
熊本日日新聞社
NHK 熊本放送局・熊本放送・テレビ熊本・熊本県民テレビ・
エフエム中九州
- 参加者 約 1,100 名

目次

●主催者挨拶.....	5
大谷隆俊（熊本県土木部次長）	
●来賓挨拶.....	7
山中保教（建設省防災対策室）	
●くまもとアートポリス概要.....	8
石島和光（熊本県土木部首席建築 審議員兼建築課長）	
●個別プロジェクト及び建築家紹介.....	13
八束はじめ（くまもとアートポリス コミッショナー事務局、建築家）	
●個別プロジェクト構想	
(1) 熊本北警察署	19
篠原一男（建築家）	
(2) 県営保田窪第一団地.....	23
山本理顕（建築家）	
(3) 三角港旅客上屋.....	29
葉 祥栄（建築家）	
●討論会	33
司 会	
八束はじめ（建築家）	
出席者	
磯崎 新	
（くまもとアートポリスコミッショナー）	
堀内清治	
（くまもとアートポリスアドバイザー）	
篠原一男（建築家）	
山本理顕（建築家）	
葉 祥栄（建築家）	
石島和光（熊本県土木部首席建築 審議員兼建築課長）	

主催者挨拶



熊本県土木部次長 大谷 隆俊

ご挨拶を申し上げます。

本日は現在県で推進をしております、「くまもとアートポリス」のシンポジウムを開催いたしましたところ、県内はもとより、全国から参加をいただきありがとうございました。

又、建設省の山中室長さんをはじめ、講師の先生方にはお忙しい中にもかかわりませず、遠路御出席いただき心よりお礼申し上げます。

さて、本県におきましては、熊本らしい田園文化圏の創造を目標に掲げ、恵まれた自然環境の中で、創造的な活動のできる地域づくりを目指しています。

その基本は、行政として後世に残せるものは文化しかないということであり、まちづくりにおいても、歴史の風雪に耐え、後世の評価に耐え得るような文化的資産を残していこうというものであります。

既に皆様も御承知のように、昨年、景観条例を施行いたしましたし、屋外広告物条例、くまもと景観賞の制定など、各種のまちづくりを施策推進しているところであり、「くまもとアートポリス」もまちづくり施策の一環として、本年度から実施をしていくものでございます。

「くまもとアートポリス」は、建物や橋などの建設に当り、今までのような機能中心の画一的なものをつくるのではなく、世界の英知を熊本に結集して後世に文化的資産として残しうるようないいものを建設し、又、知的でエキサイティングな環境づくりをし

ていこうというものであります。

この企画・運営に当っては、コミッショナーを建築家の磯崎新氏にお願いし、アドバイザーを、熊本大学の堀内清治教授にお願いしております。

現在、熊本北警察署などいくつかのプロジェクトが進んでおりますが、今後建物だけでなく、橋や面的な整備というようなものも取り上げていきたいと考えています。

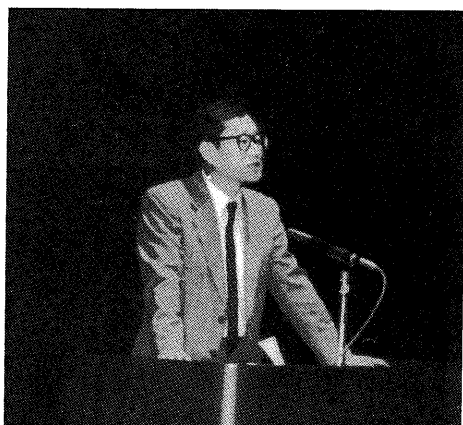
四年後の1992年には、4年間の成果を国の内外に発表するため、「くまもとアートポリス'92」として国際建築展を開催します。

この建築展は、パビリオンをつくって人を集めるというのではなく、アートポリス作品を視察コースとして結び、皆さんに見ていただこうと考えておりますので、1992年には、是非熊本へおいでいただきたいと思います。

本日のシンポジウムは「くまもとアートポリス」について、講師の方々はもとより、会場にお見えの皆様方の御意見もお聞きし、今後の参考にさせていただきたいと考えております。

本日のシンポジウムが実りあるものとなりますことを祈念致しましてご挨拶といたします。

来賓挨拶



建設省防災対策室長 山中 保教

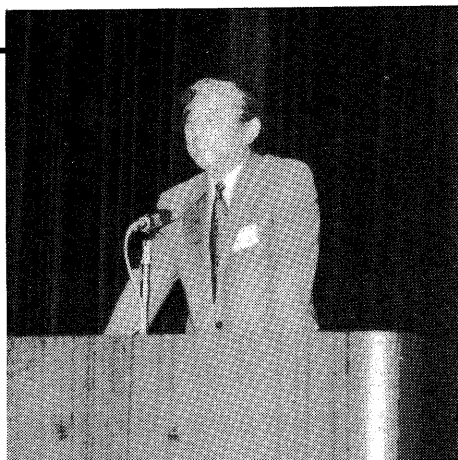
おはようございます。司会の方から御案内がございましたが、指導課長もたいへん楽しみにしていたのでございますが、リクルートではないんですけれども国会の問題がございまして、昨日の最終便の飛行機の直前まで何とかやり繰りして、この場所にこれないかということで頑張っておりましたけれども、残念ながら来ることができませんで、私が急拠代理に参った次第でございます。鈴木課長が当初用意しておりましたメモがございますので、これに基づきまして御挨拶をさせていただきたいというふうに思います。

この度、くまもとアートポリスシンポジウムが開催されるにあたり、一言御挨拶を申し上げます。本シンポジウムは、熊本県が推進されているくまもとアートポリス構想を関係業界はもとより一般の方々にも広く周知し、よりよい町づくりに寄与することを目的とするものであります。今後、熊本県下に建設される建物や住宅団地、橋などについて歴史の風雪に耐えうる質の高いものを建設し、後世に文化的資産として残していくというこの構想は本県独自のものでございまして、他県の模範となるものとして高い評価を得ていると伺っておりますが、関係各位の御努力に対しまして深く敬意を表する次第でございます。今日我が国における建築投資額は約37兆円、GNPの約一割を占めるにいたっておりますが、この活発な建築投資を適切に誘導し、個々の建築物の質の向上をはかり良好な建築ストックの形成に努めることが、我が国の建築及び都市の行政の重要な課題となっております。このような時期に、熊本県がくまもとアートポリス構想を推進され、その一貫として本シンポジウムを開催されますことは誠に意義深いものであり、これを契機にこのような良好な建築ストックを作り出していこうという動きが、熊本県土はもとより全国に広がっていくことが期待されます。最後に本構想及びシンポジウムが日本の建築文化の発展に寄与することを祈念いたしまして、私の御挨拶とさせていただきます。本日は、どうもおめでとうございます。

くまもとアートポリス

概要

熊本県土木部首席建築審議員兼建築課長
石島 和光



概要はこのパンフレットをもとに御説明申し上げます。偶然ではございますけれども、昨年のちょうど今頃、本県の細川知事は西ドイツにおりまして、ちょうど開かれておりました建築展を視察しておりました。帰られまして早速、その西ドイツの建築展に似たものは熊本ではできないか、というようなことの検討が命じられました。さっそく関係者で検討いたしました結果、西ドイツでの建築展のアイデアのひとつであります。世界的な建築家の作品をひとつでも熊本に残しながら、それを国の内外の方々に見ていただくという方針を立てまして、実はこのパンフレットの1ページ目にございますように、あるいは今までのお話にもありましたような大綱を決めたわけでございます。目的といたしまして、新しい田園文化圏の創造ということでございました。地域の環境をデザインして後世に残しうる文化的資産を創造しようということが目的でございます。方法といたしましては先ほど御挨拶がございましたように、磯崎先生をコミッショナーに企画運営、設計者の推薦をお願いする。堀内先生にはいろんな意味でのアドバイスをいただく。そしてその結果として、1992年には建築展を他のイベントと共に開こうというのが大意、その大きな流れでございます。

次にくまもとアートポリス宣言という形で、細川知事のコメントが載っておりますけ

れども、これは今まで申しましたことをより詳しく述べてあるわけで、何故こういうことを企画したかということについては、上から3分の1のところの説明してあるわけですが、ここに書いてありますようなことは知事が多くの講演会、シンポジウムでいつも話しておりましたこととございます。後世に残せるものは文化しかないというかたちでの取り組みでございます。

つづきまして磯崎先生の国際的評価を受ける環境へということで、どうしてお忙しいなかにくまもとアートポリスに参加協力していただけることになったか、ということが書いてございますのですが、ひとつは本県がこれまでの官公庁の設計の発注と変わって、ひとつの目的をもった設計の発注をするということと、推薦を受けた設計者がそれなりに能力を発揮するような下地が、熊本にはあるように思われるということでお引受けした、というようなことが述べられております。そして3枚目はくまもとアートポリスと熊本の町づくり、先ほどの堀内先生でございますが、先生にはこの県立劇場の企画のときから、直接にいろんな意味で御指導を受けておりますけれども、先生の口癖はいい建物を我々は作りましょうということでございまして、それはそれまで我々がやりました建物の作り方に対するお叱りも含めました御注意、あるいはアドバイスでございまして、今度のこのアートポリスも知事と磯崎先生、堀内先生、この3人によって成立っている。そういう事業でございます。

それから最後のページでございますが、それではどういうかたちで進行するのか、ということのご説明を申し上げますと、この中段に対象プロジェクトという丸がございます。どういふいかなる建物でも対象にするかということ、そうではございませんで、ここにあります黒マルの5つ、環境に特に配慮が必要なものと、観光地とかリゾート地がよく目につくものとかいうようなことにしておりますけれども、実際に今度は具体的に、どういう流れで設計者の決定がなされていったかということを御説明いたしますと、八代市の博物館をひとつ例にとりますと、この場合県が市にまいてアートポリスへの参加を申入れたわけでございます。市ではそれを検討されたうえ、参加しますというかたちで、磯崎事務所へ県の事務局と共に、県の事務局と申しますのは建築課に置いてございますが、同じく県の土木部に住宅課がございまして住宅課の主な方たちと建築課でプロジェクトを組んでおりまして、そこで実際の作業はやっておりますがその材料を持ちまして、磯崎事務所にまいてお願いしたわけでございます。ちょうど知事も堀内先生もその後御上京の機会がございまして、磯崎事務所で4、5人の候補者についての御説明がございました。しばらくしてその中の時期的にも設計ができるという、あ

るいはいろんな意味での御検討をいただいたわけですが、伊東豊雄さんを御推薦になりました。それはまだ打診でございましたけれども、それを八代市に伝えまして市では資料をもとに検討し、実際の建物を名古屋市に見に行かれ、また何故伊東さんを推薦したかという直接の理由を磯崎先生から市の当局者が聞きまして、それを持ち帰りまして市長共々検討し、関係機関とも諮ってお受けしますということで、八代市の博物館の設計が成立したわけですが。実は八東さんのお話のように、今年から始まりまして決まりました6件も、そういうかたちで進んだかと申しますとそうではなくて、その他の6件は既に今年度中に着工とか完工というものもございまして、そのいくつかの工程をはしおってきましてけれども、今後はできるだけそういうふうな行き方で進めたいと思っております。

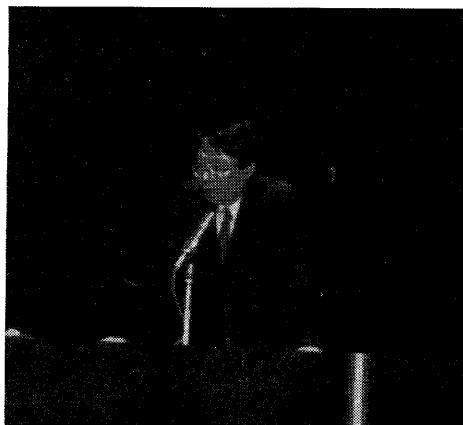
これまでの経過を申しますと、このアートポリスもこの約7ヶ月で順調に進んできたかということでございますが、ほんとうはけっしてそうでもございません。いくつかの問題点もございました。それは3つの大きな点にわけみますと、ひとつは建築の予算がやはりオーバーしがちでございます。後世に残すという意味では、ある程度の単価のアップというのは、一応我々は10%というところをひとつの目安としておりましたのですが、なかなかそれでは収まらない傾向にございます。特に公営住宅等で国の建設基準があるような場合は、もっと厳しいことになるのではないかと考えております。設計料につきましては、国から御指導いただいております告示1206号を使っておりまして、その方は特に問題はございません。

2番目の問題点は、それではそのようにわりと高くつくならば県は何らかの補助か何かをやったらどうかという御質問が、各方面から寄せられております。ごもっともな話で県が推薦する場合、事業を推薦する場合、あるいは民間への参加を呼びかける場合には、たしかに何らかの補助金をお上げするということがいいかわかりませんが、最近の県の行政の財政の苦しさからは到底、現在のところ考えられないわけでございます。

3つ目の問題点でございますけれども、それは官公庁が今まで持っておりました建物に対する頑固なイメージと、今後選ばれて来られます設計者との新しい創作意欲とのギャップでございます。どうしても官公庁の場合には、それなりに不特定多数のあるいは平均的な方たちを対象にそれまで設計してまいりましたし、予算的なもので維持管理上の問題がございまして、あるいは点検しやすいということもございまして、いくつかの条件はどうしても出てまいるわけでございます。そういうものと新しいものを生みだそうとする方たちとのやはりギャップが出まして、時間がかかるものもあります。

以上がこれまでの動きでございますが、熊本県といたしましては、街づくりというかたちでいくつかの施策をしておりました。最初大谷次長の御挨拶でも申しましたように、街づくりとしましては景観条例を作りまして調和のある街づくり、あるいは緑の3倍増計画では緑豊かな街づくり、あるいは秩序あるけばけしい街をつくらないためにも、広告物条例の大規模な改正等その他ソフト面でもいくつかの施策をしておりますけれども、そういう街づくりの中でのアートポリスは、ひとつの心にひとつの実験と私たちは考えておまして、そういうものの総合によって街づくりを行っていくというふうに考えておりますけれども、何せ今後一般コンペあるいは海外の設計者の方にも来ていただくということになりますと、予想しないいくつかの問題が出てくるかと思っております。それでもいい建物をひとつずつ残すというこのアートポリスの精神に基づきまして、今後とも努力してまいりたいと思います。この後具体的な建物のどういう対象が、どういうふうに動くというのは八束さんから御説明がございます。なお最後でございますけれども、熊本市の方で2の団地、あるいは2つの公園の公衆トイレ等での積極的な御参加をいただいております、今後共そういうかたちで皆様の盛上げをいただきましてこの事業ができますことを、あるいは御臨席の皆様方の御支援をいただきまして、進行いたしますことを心からお願い申し上げまして、概要の説明といたします。

個別プロジェクト及び建築家紹介



八束はじめ（やつか はじめ）

建築家。UPM建築計画室主宰。

主な作品：アンジェロ・タルラッチ・

ハウス、狛江の家 など。

主な著書：逃走するバベル、ル・コル

ビュジェ、批評としての建築。

現在までくまもとアートポリスに上がっておりますプロジェクトをいくつか説明させていただきます。その前にコミッショナー事務局として、今回のアートポリスの設計者選定にあたっていくつかの方針といいますかそれを出しておりますので、それについて御紹介させていただきます。

ひとつは磯崎コミッショナーから先程ございましたけれども、このくまもとアートポリスは熊本を世界と結ぶということ。今幸いにも日本の建築家は、大変世界的に見て高いレベルにあるというふうに思われますけれども、そういう日本の熊本の舞台で日本の建築家、熊本在住の建築家を含めた日本の建築家、それから海外の一流の建築家がデザインの上で競い合うというようなことを目的にしております。

それからもうひとつは、できればいわば公共の建物というのはどうしても定型化した定まったイメージに固まりがちでございます。それに対して新しいアイデア、イメージを投入するような方を選びたいと。ですから幾分従来の方向からすれば、一種のチャレンジングな方向を選びたいというふうに考えております。

3番目にこのような方針から考えますと、できるだけ若い建築家にチャンスを与えたい。これは海外の定評のある有名な建築家を招へいするということも、もちろん大きな刺激になるわけでございますけれども、日本国内、東京あるいは九州、特に熊本在住の若い建築家の方々には未来というものがあるわけで、その未来に対して新しい可能性を呈示したいと、そういうことで若い建築家が世界にはばたけるような舞台を作っていきたい、というふうに考えております。このような選択の基準に沿いまして、何人かのデザイナーの方たちに既にお仕事をお願いしております。その何件かを今のところまで契約にはばこぎつけたというプロジェクトを御紹介いたしたいと思います。既に先ほど3人の建築家の方々には壇上から御紹介していただきましたけれども、その3つがまず動き出したプロジェクトでございます。改めて御紹介いたしますと熊本県警の北署、これが第1号プロジェクトでございます。先ほど壇上に現れました篠原一男先生をお願いしております。篠原先生は今申し上げた趣旨から言うと、けっして若い建築家というふうには申せませんけれども、建築家会員の中では逆に年をとっている建築家として有名でございます。新作が発表されればされるほど、若々しい作品が出てくるということで有名でございます。そういうわけでこの第1号の作品には、大変適した人選ではなかったかというふうに考えております。プロジェクトの詳細に関しては、後ほどご自身から御紹介していただくので改めて申し上げますが、この計画に際しては、既に建っております南署を手掛けられました地元の太宏設計さんに、篠原事務所と組んで主に実

施設設計の作業をやっていただいております。このプロジェクトは現在ほぼ基本設計を終了して、実施設計の部分に移行しつつあるというふうに聞いております。今年度中には杭の工事が行なわれて、来年度から本格的な工事が始まる予定です。

それから2番目に、先ほど登場した順番からいきますと山本理顕さんに、県営の保田窪第一団地という住宅団地の、これは建替えの事業でございますが、100戸ちょっと団地をお願いしております。山本さんは住宅あるいは集合住宅の設計計画に、特に定評のある建築家でございますが、公営の集合住宅は初めて手掛けられますけれども、後にこれも見ていただけるように、たいへん新しい画期的な集合住宅ができて上がるのではないかと、というふうに希望しております。

それから3番目に葉祥栄さん。葉さんは、今は福岡に事務所をお構えですけれども、皆様よくご存じのとおり、地元熊本の生んだ世界的な建築家でございます。三角港の旅客の上屋というのは、要するに船の発着場でございますけれども、たいへんユニークな造型が展開しておりますが、これも基本設計がほぼ終了の段階までできている、というふうに伺っております。

この3つのプロジェクトが一番進んだ段階にありまして、その詳細に関しましては設計者御自身の口から、これから説明があると思います。

次に、その3人の方以外のプロジェクトを御紹介させていただきます。まず熊本市で公共の公園に建つトイレをいくつか事業化したいというお話がございまして、本年度はそのうち2つを行います。ひとつはお城の近く、交通センターの前でございすけれども、花畑公園に、これは熊本の在住の建築家でございますけれども大塚豊一さん、本日大塚さんは、来ていらっしゃいますけど、大塚さんに設計をお願いしております。

それともうひとつは多少遠くなりますけれども、水前寺江津湖の公園。ここにはやはり熊本の出身で葉さんの事務所を経て、今福岡で独立していらっしゃいます日田兆さんをお願いしております。このお二方とも、今のところ基本設計の最後の段階まで来ている、というふうに伺っております。

次に、先ほど石島課長から多少お話がありました、八代市の博物館とっておりますが、資料館のような趣もあるような施設。これは城跡公園のそばにある敷地ですが、このほぼ1000坪ちょっとの建物を伊東豊雄さんをお願いをしておりますが、これはまだ契約が済んで間もないものですから、具体的なイメージが出てきてる、というふうに伺っておりますが、伊東さんは東京で事務所を構えていらっしゃいますけれども、風の建築というようなことをキーワードにして、最近ではフランクフルトの消失したオペラハウ

スの、これは天井だけの再建のコンペティションに勝たれまして、それと一緒にフルンフルトで幼稚園の設計をなさる、というようなことも伺っております。これから世界的に活躍の期待されている日本の代表的な中堅建築家であります。これも伊東さんにとっては初めての公共建築のお仕事になるはずで、その成果がたいへん期待されています。

それから熊本市ですが、市の北の方にあります新地団地という団地も、これも同じように建替えの事業計画が上がっております。これは契約が昨日、今日というような段階でございますけれども、これは建替えの総戸数が1000戸ちょっと越えているたいへん大規模な団地ですが、来年度から建設が始まりまして、5年度に分かれて建設が行なわれます。したがってアートポリスの一応の区切りになっております92年には、未だ完成をしていないという状態になるかと思いますが、この5年に渡っての大事業を、基本的には五人の建築家をお願いをしたいというふうに考えております。その5人の御紹介をいたしますと、これは東京から2人、それから福岡から1人、最後に地元から2人の建築家、という5人のチーム構成でございます。東京からは早川邦彦さん、それから富永譲さんをお願いしております。それから福岡ですが、西岡 弘さんをお願いしております。最後に地元の熊本ですが、今日来ておられます緒方理一郎さん、ちょっとお立ちいただけますか。緒方さんともうお一方、お隣に座ってらっしゃいます上田憲二郎さん。緒方さん、上田さんは、先ほどの大塚さん、日田さんよりちょっと上の世代に属すると思いますけれども、ほぼ5人の方とも40代の方ばかりで、今ちょうど脂の乗りきった中堅の建築家の共同作業として、この新地団地をまとめていくことになっておりまして、一応5人もいますとなかなかそのまとめがたいへんなものですから、私どもコミッショナー事務局の方でマスタープランのまとめのお手伝いをしております。したがって一応私ども含めて6社というかたちで作業を今進めておりまして、6社でアイデアを持ち寄ってマスタープランをどうやろうか、というふうにつつき回しているような状態でございまして、これは本年度いっぱい基本設計を完了し、来年の9月までに第1期分の実施設計を終了して、暮れには着工をするというような段階になっております。

それからこれはちょっと異色の事業ですけれども、人吉から宮崎の方に抜けていきます国道221号線に加久藤トンネルというかなり長いトンネルがございまして、もう建ってからずいぶん時間が経っておりますけれども、最近交通量が増えて空気の状態がたいへん悪いということで、これに換気設備を付けようという計画が進行しておりまして、熊本側と宮崎側にひとつずつ入口のすぐ脇ですが、排気のためのモーターとそれから新鮮空気の入入れ口の付いた設備をデザインをしております。これはふつうの場合でいい

ますと、たいへん不格好なただのコンクリートの大きな固まりがくるだけですけれども、それとは違うようなデザインを考えてみよう、というようなことでアートポリスに上がってきました、これのデザインを日大を出られまして今デアプランという事務所を主宰をしています小山 明さんをお願いしております。この方は先ほど石島課長のお話に出ました、このくまもとアートポリスのヒントになったベルリンのIBAという国際建築展の引越し公演が、今年の春にあったわけですが、その日本側の受入れの最高責任者でした。その小山さんがこれは自主設計にあたる、こういうような業種のものとしては定評のある大きな組織ですけれども、パシフィックコンサルタンツと組みながら設計をやっておりまして、これは実施設計がほぼ終わって、おそらく遠からず着工の運びになるというふうに考えています。

それからこれは、5月の上旬だったかと思いますが、細川知事の方からくまもとアートポリスが公に発表されましたときに、既に名前が出ている方ですけれども先ほど申し上げたように、国際的な建築家をどんどん登用していきたいというポリシーからして、外国人の名前が出てこないといけないわけですが、その第1号としてオーストリアのハンスホラインさんに、これは篠原さんをお願いをしている北署のすぐ隣接した敷地ですが、福祉センターをお願いしようという話が最初から出ておりまして、これは多少プログラムが流動的になりまして伸び伸びになっておりますけれども、来年にはお願いができるのではないか、というふうなところまで来ております。

それからこれはまだ契約まで行きついておりませんので、具体的なお名前は申し上げられませんが、ほぼ内定をしているプロジェクトはいくつかございまして、その御紹介をさせていただきます。

まず先程熊本市の新地団地の話をしましたが、その東の方に託麻団地というのがございまして、これの同じ建替え事業が来年からスタートをするということになっておりまして、新地よりは1年遅れのスケジュールですが、これは戸数がほぼ370戸強ですので3年間で建設します。したがって始まるのは1年遅いけれどもでき上がるのは1年早い、というスケジュールにおおそくならないと思ひまして、これも同じように3人の建築家の共同作業というふうなかたちで行うことが決まっております、その3人のメンバーも具体的にほぼ固められております。いずれも東京在住の建築家です。

それから熊本市内で、白川に10本ほどの橋が架かっておりますけれども、このうちの4本が県道橋でございましてこの県道橋のお化粧直しをしたいと、いわば景観整備という格好の事業が上がってまいりまして、そのうちでお城からまっすぐ来たところですが、

一番大きな大甲橋を来年すぐこれを事業化したいというようなお話をいただいております、これも今年度は基本方針を出すための調査ということですが、調査をお願いする事務所も、これは熊本の事務所ですが、だいたい決まっております、それと来年の大甲橋をお願いするデザイナーもほぼ、これは世界的にたいへん有名な建築家ではありませんが、デザイナーの方にだいたい内定しております。

それとこれは建築ではありませんが、県北の山鹿市から光の町づくりという、山鹿市はご存じのとおり山鹿灯籠でたいへん有名な町ですが、その灯籠をずっと作ってきたという伝統を現代にどう生かしていったらいいのか、という町づくりです。

これは実際にいろいろな機器、その他照明計画等々の実施に落ちていくことを前提の話ですが、おそらく今年度からその基本構想が動き出すことになるというふうに思っております。

だいたい以上が、今アートポリス事業で申し込みが行なわれている事業の全てでございます、このほかにいくつかかなり大規模な橋をやりたい、あるいはこれは具体的にはまだちょっと早いと思いますが、たぶん国際的なコンペティションが行なわれるようなかなり大きい施設、あるいはある博物館のような施設、あるいは小学校であるとか、それから今度はダムができるのだけれども、その回り、ダムを含めて何か回りで事業ができないだろうかというようなことを、これはまだ打診あるいはご相談のレベルでございますけれどもいくつかお話はいただいております、全て動くかどうかはわかりませんがそのうちのいくつかは、これからアートポリスの事業にのっていくであろうというふうに考えられております。

以上、簡単でございますけれども、アートポリスの現在まで上がっている事業の概要をご紹介します。

個別プロジェクト構想



1. 熊本北警察署

篠原 一男（しのはら かずお）

建築家。東京工業大学名誉教授。

篠原一男アトリエ主宰。

主な作品：ハウスインヨコハマ、
東京工業大学百周年記念館、
日本浮世絵博物館 など。

1972年 日本建築学会賞受賞。

この計画の中で警察をという話がありましたときに、実はこれはちょっとびっくりいたしました。私に限らず警察署の設計というのは、建築家のレパトリーの中に一般的には入っておりませんで、刑務所とか消防署はあるのですけれども資料がないのです。特に私のように住宅を専攻していた建築家にとって、警察署というのはいったいどういう意味かちょっと反問したのですけれども、たぶん住みにくい家ばかり作っているからちょうどいいのではなかろうか、というようなことを冗談に思ったくらいなのです。でもこれは非常にメカニックなるファンクショナルな建物であるということで、完全にゲームのようにして解いてみたいというふうに考えました。明快な機能を、私これから現在やっております自分自身の建築のコンセプトと、どうつなげていくかという課題は残りますけれども、徹底的にゲームとして解くことを決めました。それでもプランの中で、例えば刑事の仮眠室というのがありますと、その仮眠室はつい住宅の中のといいますか、私自身の感じで廊下から離れた方がいいというようなことで、隅の方の静かな所に持ってくるのですが、それは案が出ますと警察署から打てば響くように、まったく明快に廊下の側に、簡単にいいますと、汽車の寝台車のように廊下にパッパッパッと豆腐を切ったような仮眠室が並ぶのです。もしそれがよければそれでいいというふうにして組入れていきますと、プランは極めて明快に予想したものを越えてどんどん明快になってまいりました。そして警察の機能というものは、それでいいのだと思うのです。それでもいろいろ、この内部に関しては極めてファンクションがあるものですから、十分私たちはフォローはできませんけれども大宏設計の協力も得、通訳があったものですから、スムーズに機能を押さえることができたように思います。それにしてもその提案に対しての県及び県警側の反応の敏速さ、その機動力にはたいへん敬服しました。時にはあまりにも反応が早くて、そして大きかったものですから、全部ひっくり返るのではないかと思うくらいの危機もございましたけれども、すぐにそれは明快にそして理解のある対応でまとめることができました。最初に出しました輪郭はまったく変えることなく、内部の機能性、明快性の方だけが、どんどんと進行してまいりました。今回のアトポリス全体のイメージをどう受け取って作るか、全体像があってやるわけではなくてイメージがありますけれども、いわゆるマスタープランというものがあってやるわけはありませんので、今の段階では個々の建築家がこの熊本的环境に対するイメージを自由に出して、そしてそれがやがて点から線へ結んでいったときにそのまま全部いくかどうかわかりませんが、全工程がそういくかわかりませんが、あるところまでは個々の計画がそれぞれ提案する都市環境をいずれどこかで結びつけ合せられて、や

がて今度はそれが新たな構造となってこのアートポリスの全体像が決まるのではないだろうかというように考えます。

(スライドによって説明)

現状の北警察署です。

敷地は国道3号に対して、間口が狭く、奥行きがひじょうに長い170メートルの奥行きなのです。それで特にまた途中で奥の方でくびれているというこの条件を使って、正面には、いわゆる私の言葉でいうと正面性を持つ輪郭を作り、北側にはその対象軸線上で細い矩形を設定をして、全体をひとつの対象形としました。

これは500分の1模型のプランです。左側の国道側は、市民の人たちが自由に入れるようなロビーです。そして上に子供たちの武道の訓練をする武道館というものが主な目的で、それから左の県側の建物の方には交通課が置かれている。その対象形のところ、こちら側は森林公園なる側には、車、公用車がどんどん地下に入るものがシンメトリーになって、地下に入ってまいります。

ひとつの特徴は、国道側に対して正面を作ろうということでした。これはいわばソフトな社交的な部分の顔です。その後ろ側細長い部分というのは、警察本来の機動的なファンクションを導入してあります。

これは2階で交通課がありロビーがあるところです。その後ろ、構造が違いますがそこに亀裂が入っておりまして、それは空間の性質の違いと同時に構造の違いのつなぎ目として、渡り廊下が設けられています。

これが3階の部分です。一番スレンダーに出てくると思います。

武道館もあり、留置場棟もあります。

武道館の上であり、上層部です。

国道側に関しては、このような形での立面が現われます。逆ピラミットを採用いたしました。これが都市に対する北警察署の直接的な顔であり、表情であるというふうに考えています。

上の方に、約直径5.5メートルのシリンダーがあります。これは屋上を完全に開放するために空調機器をこの中に全部収めてあります。異様な形としてモデルの中に出てきたはずなのです。

黒いシリンダーが、空調機器の収納部分です。

これは公園側。森林公園なる側からの南面です。

この模型を出しましたときに、よく県のそれから県警の皆さんが受入れていただいた

というふうに今思います。かなり異様なロケットの補助燃料タンクのような、かなりの抵抗もあったのではないかと思いますのですけれども、ちょっと想像されるよりもたぶんメカニカルで、そしてちょっとユーモラスで、けっして御迷惑をかけることはないというふうに考えます。この下をプロムナードとして設定してあります。

白川側のサイドからの眺めです。右側の道路ぞいにプロムナードができ上がります。

もう一度ここで都市エレメンターの直接な提案をしてみたいと思います。それはこのプログラムの中の、全体のプログラムの中のひとつのエレメンターだと思います。ここにちょっとグリーンの色が出ていますが、じつはこれはグリーンではなくてグリーンベルトに対して、ウォーターベルトというような直接なエレメントを、都市エレメントをここで導入しました。水なのです。特にこちらは波型を持った水の流れを作っています。白川のイメージでもあり白川と国道をつなぎ、そして斜め右の方に熊本城は見えるという設定の中で、ウォーターベルトを設定いたしました。水を浄化し流れを作るという維持費がかかりますので、今のところうまくいくかどうかわかりませんが、県警の予算を超えた範囲でどうぞ実現していただきたいと思います。

国道側正面です。

県及び県警側はこの計画に対して、このいわばちょっと異様な形を持つ計画に対して、ひじょうに寛大に対応していただきました、理解をいただいて今進められています。先月、ついちょっと前ですけれども基本設計が終わり、大宏の設計の方に実施設計が移って、これから共同して更に技術的な問題を煮詰めていきたいと思っています。何とか皆様の寛容な御理解を更にいただいて、1年後にこれを実施したいと思っています。ただ途中に工費の見積りという最大の危機を迎えますので、それも何とか通り抜けて実現したいと思っています。どうぞ、よろしくお願いいたします。

個別プロジェクト構想



2. 県営保田窪第一団地

山本 理顕（やまもと りけん）

建築家。山本理顕設計工場主宰。

主な作品：ガゼボ、ロトンダ
ハムレット など。

1988年 日本建築学会賞受賞。

県営の保田窪第一団地というのは、ちょうど熊本の中心地から3キロほど離れた第2種住居専用地区です。帯山西小学校というのですか、その学校のすぐ裏にある住居地域としては中心地も近いし、ほぼ理想的な場所ではないかと思います。ですから逆にいいますと、そのスプロールが始まりそうな感じでもあるわけですね。ほっとくと東京のあの酷さをそのまま背負いこむようなスプロールが始まっていくような感じでもあるわけです。あの近くに民間のマンションもいくつか建ち始めていそうな感じもありまして。ですからこの保田窪第一団地の私どもといえますか、我々の役割というのは、その地域全体に対してどういう核に成り得るか、ということがひとつあるのだと思います。それと集合住宅というのでしょうか、みんなと一緒に住むというときのモデルが、今ほんとうにないと思うのですね。ですからそういうモデルをちょっと大袈裟な話をしますと、少しでも近づけるようなそういうプロジェクトが仕組めたら、というふうに思っています。例えば、一般的に団地といえますと、4時間日照というのがあるわけですね、県営住宅だと。その4時間日照を確保するために、その隣棟間隔がだいたい決まってきました、西側に向かって、例えば3階か4階建ての建物だと4階としますね、そうすると17メートルほどの隣棟間隔で四角い羊かん形の箱が南に向かって並んでいくわけです。それが一般的な団地の形になっているわけですね。それはこの熊本だけではなくて日本中全部そうになっているわけですね。4時間日照を確保するための隣棟間隔で、団地の配置計画が全部決まっているわけです。やっぱおかしいと思うのですね。太陽が要するに隣棟間隔を決めているわけです。そうするとどういうことが起きるかといえますと、例えば箱型がふたつあるとしますね。間17メートルあいていますけれども、片一方はアプローチのための庭になっているわけですね。片一方はその南側に向いているわけですから、自分で南に向く庭になっているわけです。それを両方に使うわけです。だから例えば芝生を植えたり木を植えたりしたって、どんなふうに使っていいのかまったくわからないわけですね、その住んでいる人たちは。だからアクティビティーというか、そこでの行為がまったくイメージできないのではないかと思うのです。ですからいくら木を植えたり芝生を植えたりしてやっても、そこを使えるものにはなかなかならないというのが現状じゃないのかと思うのです。ですから今我々の方で考えていますのは、みんながせっかく住むのだから、例えば当然煩わしいわけですね。これ110戸あります。110戸の人たちが一緒に住むのは煩わしいからということで、ほんとうにただ和集合というのでしょうかね、個々の住宅がただ積重なってればいいと、なるべく縁がない方がむしろいいという考え方も一方であると思うのです。あんまり干渉し合わない。ただもう一方で、

その干渉し合わないときには干渉し合わない方がいいだろうけれども、110戸が一緒に住んだ方がいい、というようなプロジェクトも有り得ると思うのです。そういうモデルが今ないんじゃないのかと思うのです。我々が今考えていますのは、今隣棟間隔が17メートルあると申し上げましたけれども、その庭というのをもうちょっと有効に活用できないだろうかというのが、今度のプロジェクトの中心的な部分です。その庭というのは、その110戸の人々が共に使うような庭であると同時に、その周辺の人たちにとっても有効な庭であるような、そういうことが実際可能かどうかという、可能だと思うのですけれども、そのへんを見ていただけるとありがたいと思います。

(スライドで説明)

これが全体の配置計画です。5階建てです。一番低い建物で3階建て、高いもので5階建ての建物になっています。紫色になっている部分が中庭になっています。ここは車もいっさい入れないようになっておりまして、周辺黄色い部分ですね、それが周辺を巡る道路です。駐車場が全部周辺にとってあります。ですから車は全部周辺をズーと巡るようにループ状になっています。ですから各自の入口に近いところに、車を止められるようになるわけですね。中に関しては、車は全部シャットアウトしています。それでそのもうひとつ、その中の、このよく囲み型の団地の計画ってありますね、日本だけではなくて外国にも。問題はこれが通過道になってはいけないと思うのです。周辺の人から入ってきて向うに抜けちゃうというようなことになると具合が悪いと思うのです。この場合は、右側の下のところですね、ちょっと薄い青いところがあります。あれが集会室なのです。集会室がゲートになっています。この紫色のところの中に中に入るための。ですから中庭というのは、わりにちょっとこの団地の人たちのための閉鎖的な場所になっているわけですね。それでもうひとつ、このひとつの住棟、3つ住棟があるわけですね。方位としては右下に出ておりますけれども、ほぼ南北軸に乗っていると考えてみますと、東側と西側、南側、3つにわかれています。3つが中庭を囲むようになっています。その各住棟なのですが、紫色にちょっと濃く書いてあるところがありますね。あそこが家族室ゾーンなのです。それでその裏側のちょっと濃い緑色になっている部分が、個室ゾーンになっています。ですから各住居は全部、昔の寝食分離じゃないですけども、個室ゾーンとその家族室ゾーンにわかれています。個室ゾーンはわりに閉鎖的なコンクリートの壁ぱっくできています。家族室ゾーンというのは、わりにガラスが多く使っておりまして開放的にできています。ですから日照を確保しなければいけないのは、むしろ家族室ゾーンの方とわりに割切って作っています。逆に家族室ゾーンの方は、

中庭に向かってわりに開放的にできています。外に向かっている緑のところは、わりに外側に対して閉鎖的にできています。ですから家族室ゾーンから中庭が丸見えになるわけです。逆にいいますと、中庭から各家族室が丸見えになります。ただ左右の住居に関しては、支点が交差しないようになっています。ただ距離が20〜30メートル離れておりますものですから、我々の実験だとほとんど人の顔はわからないのですね。煩わしければブラインドをしめたりすればいいのしょうけれども、中庭に対してはわりに開放的にできているという意味です。ですからその中庭というのは、例えば子供たちが遊んでいれば上から監視できるし、老人たちがいても上から監視できるし、お互いに中庭と自分の家族室とわりに流通ができるような場所になっています。個人的な意見なのですが、飯食うんだったら表で食えるような家でなくてはダメだと思うのですね。それでその中庭に面している場所に全部テラスが付いてまして、そこでは食事ができるぐらいの大きいテラスが付いています。それが割に開放的な家族室ゾーン、片一方の方に個室ゾーンが付いています。そういうふたつの分割された住居だ、というふうに考えていただければいいと思います。そうするとどういうことが起きるかといいますと、中庭が割に閉鎖的だということと、今あそこにゲート的な集会室があると言いましたけれども、あれはこの人たちだけではなくて周辺の皆さんが使うことになると思うのです。ですから周辺の皆さんがここを使うときには、あのゲートを通して中庭に入ってくるわけですね。ですから中庭というのは、ここの保田窪第一団地の人たちとその周辺の人々との何か交流の場所みたいな感じにもなると思うのです。ですから勝手なイメージを、僕はふくらませちゃうのですけれども、例えば今のあそこの集会室が2メートルほど高くなっています。中庭よりも。あそこをステージにして人が集ってくると、その各住居はちょうど、オペラハウスの貴賓席みたいな感じになるわけですね。要するに高い位置ですね、ここでは言え。そういう位置に観覧席みたいになるわけです。あるいはここで何かお祭をやったりということも、僕はどうしてもイメージするのですけれども、お祭をやるとそのゲートからいろいろ人が入ってきて、何かここでお御輿があったりいろいろ動き回るようなアクティビティーというのでしょうか、そういうイメージがどうしても頭の中に出てくるわけですね。ですから常にここが完全に開放された場所じゃなくて、どこが閉鎖的、閉鎖的の言い過ぎですけども、保田窪第一団地の人たちが管理すべき場所というようなイメージですね。そういう場所としてこの中庭を活用、もしできたらというふうに思っています。この後模型があるので、ちょっと模型を見てください。

これが上から見た絵ですね。まわりがズーとわりにコンクリートとブロックの建物、

中庭に面したところにガラス的な軽い建物がある。それをブリッジで伝えてるというような構成です。1階あるいは2階に中庭のある住棟がでてくるわけです。右側がゲートであり集会室になっています。

これは南西から見た写真ですね。右側が集会室です。

周辺に対して閉鎖的になると一番具合が悪いと思うのです、一方ではですね。ですから周辺に対しても何か表現というのでしょうか、表情があるようなもの……。階段と1階、2階の部分がセットバックしていますので、そのへんを使って周辺となるべく、何か閉鎖的にならないようなデザインを心掛けたいと思っています。北側の方から南を見ている写真なのですが、北の一番端のところに集会室があります。

反対側から集会室の方を見ている写真です。ですから各住居から庭の方には出られる階段が、全部付いています。それから当然2方向避難をこういう場合しなければならないので、階段はふたつ作るのですけれども、片一方は中庭側にあって、片一方は道路側にある。アプローチの道路は、全部道路側を使うということになると思います。

これは中庭部分ですね。集会室側から見た写真です。

逆に集会室の方を見た写真です。ちょうどあれがステージのように、広場の中心にあるような位置にあります。さっき、ちょっとイメージした、ちょうど舞台があるとする、観客席が回りにあるというのは、この写真はちょっとわかるんじゃないかと思うのですけれども。

これが各住居の部分模型です。1階に中庭のあるプランと2階に中庭のあるプランがありまして、これは2階に中庭があるプランです。3, 4, 5, がブリッジのある住居になっています。それぞれに階段が付いているという形です。この部分ですね、これというと右側の2階部分……。ちょうど洗濯物を干したりする場所になっています。7戸で、左側だけ入っています。右側には6戸入っています。

中庭の部分とその洗濯、何というのでしょうか、共同の物干し場がこれでわかると思います。それで後ろ側の個室ゾーンからその中庭が見えるので、そこの目隠しが一応デザインのもうひとつのやりがいになっております。

これがちょっとわかりにくいのですけれども、これは2階プランです。前の方にLDKがあって、後ろに個室があります。

これが上の方の階です。ブリッジがある部分です。前方に中庭側にガラスの多く使ったある家族室というのでしょうかLDKがあって、この場合ですと後ろにふたつ寝室をとってあります。個室というのでしょうか。

これが2階プランです。中庭タイプ、南側と一番左側ですね。それと向こうの東側ですか、東側は2階にその中庭タイプの住居がきています。

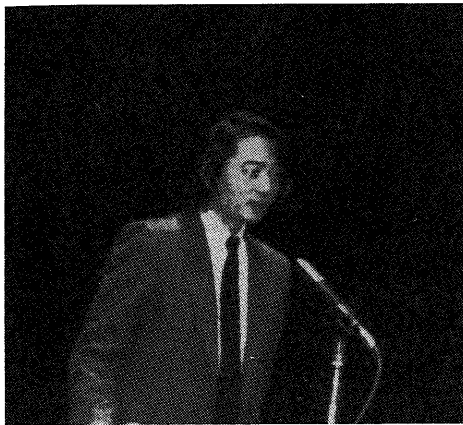
これが1階プランです。西側にこれは中庭タイプがきていまして、東側と南側はちょっと違う形をしています。通り庭タイプと呼んでいるのですけれども。通り庭があって、そこに個室と家族室がズルズル連続しているような構成です。ちょっと詳しくはわからないので、パッテンが付いているところがありますね、東側、南側。左側と上側です。あれは光り庭です。ですから周辺全部光が入るように仕組んであります。

これは1番上の階です。これもブリッジタイプです。

これがブリッジタイプと中庭タイプをそれぞれ書いてみたんですけれども、右側がブリッジタイプです。あれが標準的な住居なんですが、前方にガラスの箱とその大きいテラスのある家族室ゾーンですね。後ろの方に個室のある個室ゾーン、その典型的なプランです。左側は中庭、紫の部分が中庭ですけれども、中庭と中庭を挟んで前の方に家族室。これはちょっと部屋の関係上、前の方にも個室が一つでてきていますけれども、ふたつ、2LDKですか、2DKのタイプです。左右に水場があるというようなかたちになっています。ですからあらゆる部屋が全部テラスに面しているというふうに考えていただければいいんじゃないかと思います。

だいたい以上が、計画の概要です。細かいデザインに関しては、まだもうちょっと変わると思います。それといろいろやっぱり今のお金の問題がまだ絡んでおりまして、特に目隠し部分のデザインをどうするかで、お金が大幅に違ってくるのですね。それをこれから県の方と詰めなくてはならないという作業が、最大難関が残っていますけれども、基本的には今の構成でいけるのではないかというふうに考えております。どうもありがとうございました。

個別プロジェクト構想



3. 三角港旅客上屋

葉 祥栄 (よう しょうえい)

建築家。葉デザイン事務所主宰。

主な作品： 木下クリニック、アスペクタ、
日時計の家、
小国町体育館 など。

1983年 毎日デザイン賞、
日本建築家協会新人賞受賞。

私どもの三角の旅客上屋についてのご説明をいたしますが、これについてはフェリーが岸壁に着くわけですが、そのフェリーの旅客のための上屋、建築では使わない言葉ですけれども、港では上屋と呼ぶのだそうです。いわばターミナルといいたいでしょうか、あの小国でいいますとバスセンター、交通センターと呼んでいますが、それと同じような役割を果たすわけですが、機能的には非常に単純です。1000平米ほどの建物で、そこで切符を買うあるいは待つ。そしてそれから乗り込むという、乗り込むためにはブリッジを通ります。というのは海岸といいますか、有明海はご存じのように、たいへん潮位差が大きいところでして4メートルほど上下しなければいけないということもあって、そのブリッジにどうやって乗り込むかという、あるいはそのブリッジがどのような役割を果たすかというのが、ひとつのテーマにもなるわけです。私どもが考えたのは、やはりどうしてもこの海と陸の接点をどうデザインするか、つまりお互いにそれがランドマークといいますか、ランドマークというと陸の話ですが。海から見ますとシーマークというのでしょうか。いわば燈台のような役割を果たす、そこに船を着けるんだという。あるいは船に乗ってきたが、ああ、三角に着いたなあ、と思われるようなランドマークにしたい。卑近な例でいいますと、ニューヨークですと自由の女神が立っていますが、それと同じような役割を果たせたいと思ったわけですが、果せるかな、高い建物を建てる必然性はあまりないわけです。遠くから見えるようにしようと思ってもその必然性がないから、タワーを建てることには意味がないし、どうすべきかというのがたいへん大きな悩みでした。それと私どもとしては木を使った建物を作ることによって、この土地柄といいますか、それを表わそうという考えもありましたのですけれども、こちらで竹を使ってはどうかとかいろいろ考えてみたんですけれども、何分時間に追われたこともありましてそういう作る側の論理ではなくて、旅行者側。そこを歩き過ぎるであろう旅人の気持ちになって何か作ってみよう、ということで考えたのが、やはり海とそれから陸、お互いをシンボライズするようなものとして、あるいは共通の認識といいますか、形態的な認識として貝殻。海の貝殻のようなものを何か作れないだろうか、ということ考えたわけです。一種のこのランドマークとして貝殻のようなものを考えたときに、形態が下の方が大きくて上が小さいというものを想像できるわけですが、結果的にそのランドマークが1回、つまり船の乗降客の便宜だけのためにであれば高い必要はない。それに対してその屋根面がたいへん大きいといいますか、背が高いといったふうな形態を考えたときに、その根拠はたいへんあいまいといいますか、あまり意味のない建物になる可能性がある。しかしよくよく考えると、それぞれ人々は高いところに上りたがっ

て遠くを見るという習性があります。例えば、最近ですとポートルネッサンスとかポートピアとか、あらゆるところでウォーターフロントの開発が行なわれていますが、千葉をはじめ福岡もそうですけれども、高い塔を建てるのがはやっております。高い塔を建てるということについて、私どもたいした根拠はなしにそれを作ることはできないので、そうじゃないものを作ろうと。つまりエレベーターで上がるのではなくて歩いて上がれるようなものを作って、上ったところで視野が開ける、見るビスタが変わる。景観が変わると、そういったものを考えようということで、まるでDNAの遺伝子の、DNAというのは、二重螺旋でできているわけですが、二重螺旋の建物を考えたわけです。二重螺旋の建物といいますと、いろんなことが想像されるわけですが、例えば、昔から仙台にはさざえ塔というのがあります。やっぱり二重螺旋になってまして、あるところで螺旋が繋がっている。そこだけで出入りができるというようなものがあるし、それからこれは螺旋ではありませんけれども、浅草の12階とか、あるいは銀座ですとソニービルといった、たいした目的がなくてもそれを見に行く建物というのがあります。歴史上の引用というか連想をするものとして、例えば、バベルの塔だとかあるいはピラミッドだとか。最近のものですとニューヨークにありますフランク・ロイド・ライトが建てたゲッケンハイム美術館もそうですが、そこも螺旋状になっています。それをまた引用したとか、リチャード・マイヤーがアトランタで美術館を作っておりますが、そのようなものを想定できるような建物になっているわけです。スライドをお願いいたします。

(スライドにより説明)

この二重螺旋が左回りの内スロープと右回りの外スロープがありまして、それが中間でお互いに繋るといふか、途中で所々で出会うわけです。

これは空から見たところですが、この模型はたいへんわかりにくいといひますか、図面に書いてもほとんど絵にならないといひますか役に立たないので、模型を作ることに徹しているわけですが。

これは真上から見たところで、左側が岸壁になります。高さが30メートル足らずの二重螺旋の建物です。

これは屋根のてっぺんのコーンといひますか、円錐を撮ったところですが、これが最上階のレベルで、部屋うちを回ってきたスロープは12分の1以下の勾配になっているわけですが、車イスでも一応上がれるというようなスロープですけれども、それを5回ぐらい回るとてっぺんに上がるわけです。中を上ってきた人たちが外の通路に出る機会が途中で5、6ヶ所ありますが、最上階まで来ますと、このように外に出ることができ

る。外に出た人がまた下りていくのですが、途中で内側を通ることもできるわけです。勾配は同じにしてありますので、どこで出会うかというのはあんまり規則的ではないのです。二重螺旋になっているこの構造体の模型でして、これは今床の面を書いてあるわけです。床の面が表面に現れていて、外壁の手摺だとか中に壁があるのですが、それは表現されていません。

これが少しわかりやすい絵ですけれども、構造的には純粋な柱梁でできていまして、その柱が下から上まで伸びているわけですが、それからキャンチレバーで床が部屋の内側と部屋の外側に出ているという、そういう形態をしているわけです。この螺旋状のスロープ、これを外側から上がるわけですが、一般の人たちがいつでも入れるという形にはしないで、いちおう中のフェリーの発着場といいますかターミナルに入って、それから上がるようにしています。右下にその入口があるわけですが、これはキャフェテラスが海に向かって開いている1階の横を抜けますと、そこから外周を上がれるようになっているわけです。つまり船で着いて人がそのターミナルに一旦入って、その後外に出るとテラスがあり、そのテラスからずっと回るということになるわけです。それから室内はギャラリーになるわけですが、それも中で回ることができるわけですが、斜めになった壁、それに対して手摺も斜めになっていますけれども、その全てが同じ方向にグルグル回っていると。逆方向に回っているためにお互いに行き来ができるという、そういうことです。

これが最もわかりやすいのでしょうか、そうでもないですね。これもちょっとわかりにくいですが、左側の方からアプローチしまして、そのスロープの下から建物に入ります。そして1.5メートルほどの高さにブリッジが設定してありまして、そこまで歩いて上がって、キャフェテラスでお茶を飲みながら船が来るのを待つ。船が来るのを見ることができるものですから、船が着いたあとで立ち上がって船に乗る。その出入口としてこのブリッジが使われるわけです。4メートルの潮位差に対してこのスロープが3メートルほど上下するという、そんなかたちで船の乗降をするというのが、この計画の概要です。全体的には規模があまり大きくないこともありますが、埋立て地であるために、杭だとかあるいは合併処理のための設備費だとか、非常に設備的なことあるいは構造的なことに費用面での割合が大きいものですから、かなり予算的にはこれからの問題の詰めがあるのではないかと思います。おそらくアートポリス計画の中では一番早い完成になると思いますが、来年の夏ごろには出来れば完成させたいと、そういうふうな計画になっております。どうも、たいへんありがとうございました。

● 出席者 ●

磯崎 新 (いそざき あらた)

建築家。磯崎新アトリエ主宰。

主な作品：大分県立図書館、群馬県立近代美術館、
つくばセンタービル、ロサンゼルス現代美術館 など。
1967・1975年 日本建築学会賞、1983年 毎日芸術賞、
1986年 英国王立建築家協会ゴールドメダル、
1988年 朝日賞ほか受賞。

堀内 清治 (ほりうち きよはる)

工学博士 熊本大学工学部教授。前熊本大学工学部長。

主な著書：地中海建築 3巻。

1982年 日本建築学会賞受賞。



篠原 一男 (しのはら かずお) 建 築 家。

山本 理顕 (やまもと りけん) 建 築 家。

葉 祥栄 (よう しょうえい) 建 築 家。

石島 和光 (いしじま かずみつ)

熊本県土木部首席建築審議員兼建築課長。

● 司 会 ●

八束はじめ (やつか はじめ) 建 築 家。



八束はじめ ただ今から12時半まで、一応討論会の時間がとってございます。途中ないし最後に会場の方から、いろいろご質問、ご意見その他あればお受けしたいと思います。この討論会では今ご三方の作品を見せていただいたわけですが、そのそれぞれに関してどうこうという、いわゆる建築家同志の集まりでよくありそうな議論をするよりは、今日午後にもまたもうひとつのシンポジウムが予定されておりますけれども、このくまもとアートポリス全体の意義であるとか、率直に申し上げては我々まだいろいろ解かなければならない問題点、課題があると思いますけれども、そのあたりの議論をしていきたいというふうに思っております。

まず最初に磯崎さんと堀内先生。お二方まだ自己紹介以外はお話いただいていませんので、お二人とも特に磯崎さんは午後にかなり長いレクチャーを抱えていらっしゃいますので、この討論会であまりしゃべり過ぎてしまうとタネがなくなってしまうかもしれないので、そのへんエコノミーを考えながら結構ですけれども、ひとまず今のプロジェクトを見た感想あたりからお二方出発していただいて、その後アートポリス自体のことの討議に移りたいというふうに思いますけれども、最初に磯崎さん、お願いできますか。

磯崎 新 今それぞれの第1号の案が出たわけですが、この案がこれからこのイメージで実現されていったときにどういうふうになるかということが、もちろんこれから後の議論になると思うのですが、その前に僕の経験をちょっと申し上げますと、さっきのこのくまもとアートポリスの発想の出発点になった西ベルリンのIBAという世界建築展。この展覧会の企画とそれに私参加をして仕事を向こうでしたわけで、その経験と向こうでそれがどういう形で受取られたか。これからそれに対してこのくまもとアートポリスというものは、どういうふうに位置付けて考えていったらいいかと、そういう点についてのちょっと最初のきっかけのお話をむしろしたいと思います。

この西ベルリンのIBAという展覧会は、もうおそらくかなりの方はご存じだと思います。この春過ぎには東京にその展覧会も来ましたし、それに関しての資料もかなり出版されています。この計画はベルリンに建つ公共住宅を中心に、それも古い町が壊されていますので古い建物を改造するという計画と、それから新たに住宅団地を作ることと、つごう1万5千戸ぐらいですかね、それくらいのスケールのものを建設して、それをひとつの世界の建築の博覧会という呼び方をして、今行くと実際に見れるようになっています。実際にその目的の年は87年、つまり昨年でした。その準備を始めたのがその8年前、79年ごろですね。そうして8年間かけてそれだけの戸数のもの、それに

関連した公共施設の若干のものというものが実際に建設されたわけで、それに拘った建築家の数というのは、全世界から150人ぐらいかな、たしかそれぐらいの数。それからドイツの建築家ももっと数は増え、それぐらいの人たちがさまざまな形で手分けをして、自分の案を作ったというものです。それに比べれば現在計画しているもの、ほんのスタートですから、どれぐらいの密度で上がっていくかというのは、むしろわからない。むしろこれからあととどンドン広がっていく可能性の方があつたし、町の規模から考えてみると、もしかするとそのベルリンを上回るような規模になるのかもしれない、というぐらいにも感じます。

ベルリンの場合に一番の問題であつたのは、この計画をやるにあたって新たに今までの都市計画、つまり戦後の都市計画といったらいいでしょうか、この都市計画は、失敗をしたという共通の認識があります。それは全世界、つまり戦争で破壊された町が再建されてきたときに、都市計画、都市を作るという考え方に間違いがあつたのではないかな。つまり近代都市計画の手法が間違つたのではないかな、という共通認識がそこにはありました。それならばいかなる対抗案があるのかと、それを見せようというのが、このベルリンの非常に大きい意図でした。この何故間違つたかということは、これは日本もまったく同じ状態で実際にはあるわけで、先ほど、山本理顕さんのお話の中で隣棟間隔が日照条件から決まて、それか機械的に団地を作つてきたと。それと同じことは実は日本だけの問題ではなくて、全世界にあつたわけです。それを組立て直すことというのが大きい目標でした。そのために様々な全世界からのコンペを通じて案を求めて、その案のひとつひとつの成果を踏まえながら、それをまた更に建築家が分担して作業したというのが、あのベルリンのやり方であつたわけです。そのときに、一番彼等の考えたことというのは、かつて中世、近世以来のヨーロッパの都市というのは、町の中にギューと人間が固まつて住んでいて、それをだから場合によっては非常に不健康、不健全な環境条件というものが生まれたけれども、これはあながちマイナスとはいえない。むしろ人が顔と顔を付合せてもっと高密度に街の中に住めるという、住んでいてという、その事実をもっと再確認すべきではないかな。

現在の町というものの、あるいは住宅団地というものは、ほんとうに個人個人の住居がバラバラになつていて、それをお互いにそっぽを向いて、但し太陽の日照だけは4時間を確保しているという、そういう住み方になつていて。それをもういっぺんヨーロッパで持っていた伝統的な考え方に戻してみよう、というやり方だつたと思います。それを実際に実現をした。それと同時に、それに拘る、つまりいわば戦後に出てきた建築家の

新しいジェネレーション。その人たちがどういうデザインをどういうふうに示してきたかということ、ひとつの記念碑というかモニュメントというか、そういうふうなもので町中に埋めたいと、そういう考え方がこの企画でして、あらゆる意味で、成功したか失敗したかということについては議論がわかれておりまして、けっしていい結果が生まれたとはみんな言うておりません。但しこのこういう企画をやったということは大成功であった、という点では一致しています。これがおそらく現在の大まかな評価であろうと思います。それを見に細川知事が行かれて、それで考えられて、熊本に新しいタイプのこういうアートポリス構想を考えようというのが、この企画の始まりだというふうに私は受取っているわけですが、そのときに、じゃあベルリンと同じことを我々はやらいいのかどうかということについて、けっして僕はそうは思えないし、また思う必要もない。というのは、やっぱりもともとヨーロッパの都市の構成と、それから日本の都市の構成というのは、本質的に違う部分がある。違う部分がどこにあるのかということについては、また後ほど、少ししゃべらしていただきたいと思いますけれども、やはり違った解決を結論としては取るべであらう。日本の町の持っている特性、それからとりわけこの熊本という町の持っているこの特性。それはいみじくもタイトルにあるように、都市にデザインを田園にアイデアをと。要するに田園文化都市という構想ですね。これはやっぱりある意味でいうと、ベルリンで町に鼻突き合せてもっと高密度に住もうといったものの対して、いやそうではなくて、この町は田園というものがこれだけ回りに広がってるし町の中に緑もあるんだから、それを徹底して活かして、新しい町づくりを考えようというところが、基本的に違うところだろうと思います。ですから建築家もそれからあるいは建築家をお願いして考えてほしいということも、けっしてヨーロッパ的な街並みという固定観念にとらわれる必要はない、むしろもっと自由に日本の、あるいは熊本の特定の場所を見て、その中から発想されたフレッシュなアイデアというのが、一番この場合に適切ではないだろうか。そうするとあとは、そういう個別の解決というものが重なっていったときに、ほんとうにいい街ができるかどうかは、その次の問題になるわけですが、これは私の考えでは、日本というのは日本の街の作り方というのが、点できて、それが点で繋って、それからネットワークができていくという、ちょっとヨーロッパでの街は上からわり算で外区ができて、外区をまた建築、ユニットに割って、その中に住居をまた張付けるとい、そういう上からのわり算の考え方に対して、むしろ日本の街というのは、むしろ点がずっと増殖していくような形で逆に組立てられてきた、この仮定があって、それと緑、田園というふうなものとの繋りの中から、案が生まれて

くるのが一番いいと思います。そういう意味で、それぞれ先ほどの3つの案を拝見していると、僕はそういうユニークさをそれぞれの場所で引出そうとしているという点で、非常に面白い計画に将来成りうるんじゃないだろうか、というように思いました。

堀内 清治 アートポリスの目的。何のためにアートポリスをやるのか、というふうな
ことについては、先ほどから石島課長さんも、それから今の磯崎さんのお話の中にも触
れられていました。それ自体としてはたいへんけっこうなお話で、そういうお話を伺っ
たときに、これは熊本のためにはきっといいことに違いないということで、私もできる
限りお手伝いをさせていただきたい、というふうに考えたわけであります。ただアート
ポリスという言葉が、はなはだわかったようでわからない名前であります。アートとい
う言葉とポリスという言葉にくっつけているわけですから、いかなうな解釈もできる、
そういう名前であります。ポリス、つまり街づくりの基礎をアート、つまり芸術なりあ
るいは文化なりに置こう。そしてそれによって街を活性化させていこうという、そうい
う考え方が基本にはあるのだらうと思いますが、しかし実際に仕事が始まってみますと、
そういうことよりはむしろ名建築家にいろいろなアイデアを出してもらったり、立派な
建築を作っていくことになる。現在、熊本で進行しているアートポリスというのは、
そちら側の方にどうも重点が移っていつているような気がいたします。これは始まった
ばかりですから、そのへんのところに重点が置かれていくということはやむをえないと
いう面がありますが、アートポリスというのは、はたしてその有名建築家にいい建物を
作ってもらって、そういう物珍しい立派な建物があちらこちらに散在している、そうい
う状態にすればいいのかということでありますが、私はそうではないだらう。今度の事
業にアートポリスという名前を冠したということは、やはりそういう文化をもとにした
街づくり、地域づくり。これは県がおやりになるわけですから、熊本市だけの話だけで
はもちろんありませんで、熊本県下全体にそういう文化を基調としたその活性化をはか
りたいという、そういう気持ちが込められているに違いないと思うわけであります。

アートポリスの話が、一番最初はアートポリスとは言っておりませんで、建築展とい
うふうに単純に言っていたと思うのですが、『そのときからそういう立派な建築ができ
ました、そして4年後にあるイベントをやりました。それでたいへん結構でした』とい
う、それだけで終わってしまうのならあまり意味のない話で、それを熊本でやったとい
うことについて地元は何があるのだらうか、そこのところが一番大事な問題。熊本に住
んでいる人間からみると一番大事な問題だ、というふうにお話をしてまいりました。

それでいろいろな建築家が、それぞれお考えになって立派な提案をなさる。先ほど、お三方の現在のプロジェクトの進行状況についてご説明がありました。たいへんそれにすばらしい計画だと思います。しかし、そういうことで我々地元に住んでいる人間は、立派な建築家に頼んでおけば立派なものができると、それを待っていればいいというふうな状態になってしまうということは、熊本にとっていいことだとは思わないわけであります。熊本県あるいは熊本市の人たちは、これまで街づくりについていろいろやってみりました。アートポリスが始まったために、我々の仕事がすっかりそういう有名建築家に移行してしまって、この事業が終わるまで我々はお手並拝見ということに待っていればと、そういうふうになるとすれば、熊本にとってはむしろ悪い結果が残るということになりかねないと思っています。そういうふうに熊本の人たちが考えてしまうと、アートポリスそのものもうまういなくなってくるのではなからうか。

それでIBAの場合には、街の都心部に再び住めるようにするというふうな、かなり明確な目的がありました。IBAの目標というのは、ドイツという国にとってみればこれは、歴史的伝統に基づいて、その中から自然に出てきたひとつの発想だというふうに思います。

熊本の場合には、はたしてそういう予定調和的に立派なものを作っていけば、やがていい街になるのだということでやっていけるのかどうか。これに対して熊本市民としては、あるいは県民としてそれなりの取り組み方をすべきではないか、というふうに考えていて、今、じゃあ地元では何をどういうふうに対処していくべきだろうか、ということが大きな問題であろうと思っています。

それからいきなりここで、別にアートポリスにケチをつけるつもりは毛頭ないのです。そういうつもりで申し上げているわけではありませんが、国際的ということが、また国籍喪失ということにつらなっていくのか。将来国籍不明の街並みが造られていったいいいのかという、そこのところは私はよくわかりません。たぶんこれは20世紀の冒したひとつの失敗。先ほど、都市計画は失敗だとおっしゃいましたが、そのひとつの失敗が国際化ということを言い過ぎたためではないかという気もしております、このへんについてはまたいろいろと議論をしていただきたいと思います。とりあえず・・・

八束はじめ 様々な問題が提起されたような気がします。これに関してはみなさんのご意見を頂戴しなければいけないかと思いますが、それにもうひとつ付加えるような意味で、ひとつご紹介をさせていただきたいと思いますが、日経アーキテクチャーという雑

誌がございまして、この雑誌に一月ぐらい前でしょうか、細川知事がこのアートポリスに関してのインタビューを載せられております。これはたいへんある面で過激なインタビューでして、運営している我々もびっくりするようなことを知事がぼんぼんおっしゃったわけですが、それに対して最新号、つい最近きたばかりの最近号の中に二つほど投書がございまして、ふたつともアートポリスは全体として、たいへん有意義なことだからぜひ成功してほしい、ということを一応踏まえながら、だけれどもこのアートポリス事業が、これは今堀内先生がおっしゃったこととたいへん似ているお話だと思えますが、有名建築家の実験、単なる実験に終わってしまうのではないだろうか、それでは困るのではないか、というようなご趣旨の投書があったように思います。こういったことに対して当然我々事務局、あるいは実際のその当の有名建築家でいらっしゃる篠原さん以下、何らかのお答を用意していただきたいというふうに思うのですが、1人ずつ、磯崎さん、まずはコミッショナーの立場から今のお考え、要するにひとつひとつ単独にいい建築が出来ていくというだけに止どまるのかどうかという点について、お話いただきたいと思います。

それから篠原さんには、今の有名建築家の実験、これは似たようなことが行なわれるとその度に出てくる形容ではないかというふうに思うのですが、そういうことに関してどうお考えになっているのか。

山本さんに関しては、それが特に住宅という市民の日常生活に最も密接な建物に関して、どういうふうにお考えになるか。

それから葉さんに対しては、葉さんお1人、地元出身の建築家でいらっしゃいます。今最後に堀内先生がおっしゃったその地域性ということ、あるいは地元にとってこのアートポリスがどういう意味があるか、というようなことを含めて、ちょっとコメントをいただきたいと思います。

最後に石島さんには、その行政側から今の問題どういうふうに考えていらっしゃるのか。

それぞれあまり、あと30分ぐらいしか時間がありませんので、長くならないようにコメントをいただければありがたいと思いますが。順番からいってどうでしょうか。一番端の方からいきましょうか。葉さん、いかがでしょう。

葉 祥 栄 実は今最後だと思っていたんですけれども、地域とその地域のデザインの関係についてご質問だと思うのですが、私どもどうしても建物、物を作るしか能がないといえますか、たんへん卑近な例で、昨年アスペクタという野外劇場を作りましたとき

に、駐車場の必要性、それから道路の整備の必要性については、設計、基本設計以前からの段階でたいへん強調したわけですが、その予算化がされなくて結果的に申し上げると、昨年できた時点では駐車場が不十分、それから道路も整備が不十分であるというような状態で、規模の大きな建物を作ったことがあったのですね。ですから磯崎さんの日本の都市づくりと同じことなのですから、日本では建売り住宅がまずポツンとできて、その後道路ができて、その後電気を引張ってくる、水道を引張ってくる、ガスを引張ってくるというのが習わしです。ヨーロッパ、特にイギリスだとかですと再開発計画にしてもそうですが、回りを一応きれいにクリアランスしておいて、それから始めます。これに対して、私たちのやり方というのはちょうど反対の町づくりの仕方をしている。つまりアスペクタにそれだけ人が、何万人という人が集ったものですから非難轟々で、ちょっと穴があったら入りたいぐらいの状態になったわけです。地域との関係がどうか分かりませんが、ある物ができたことによってそれが波及するといいますが、例えば、はやり言葉でいいますとアスペクタ現象だったり、何とか現象と呼びますが、それが引き起こす現象がその存在を認めることになり、しかもその存在を活かすことになる。逆に言えば漢方療法という、どこかつぼがありまして、足の裏か何かをどこか押すと頭がよくなるとか、どこかを押すと体の具合の悪いところがよくなると言ったことがあるのではないかと思います。僕としてその部分、部分のその建物が光れば、それが何らかのリアクションを起こしてそれが最終的には取り込んだり、あるいは廃除したり、あるいは大事に扱うようになったり、あるいはぞんざいに扱うようになったりするとかたちで、異物に対しての抵抗といいますが免疫というか、そういったものが出てきたり、あるいは歓迎したりというようなそんなふうな異物での療法といいますが、いわゆる町を変えていくやり方として、上の方から大きく道路を引張ったり何かをするというやり方と違うやり方。それが街の人たちのどのような関心を引き起こすか、ということに全てがかかっているように思います。

八束はじめ 今のお話は、一種の点でもって回りに刺激を及ぼす。つまり単体の建物が、ひとつだけいいものができてそれで完結ではなくて、それがいろんなレベルで回りに様々な波及の仕方をする。それが一種の地域づくりのに繋がっていくのではないかと、というようなお話だと思うのですが、もうひとつ、たぶん、これは我々外部の人間からいうと、たいへん言いにくい、作りにくいお話ですが、熊本のスタイル、地域的なスタイルというものが実際あるのかどうか。それはとうぜん外部の人間がそういうものを作る

というのは、たいへん難しいことなわけですが、逆に地元の人が、地元なりに熊本のスタイルというもののだけを作りうるのか、あるいは作るべきなのか、あるいは作ることが可能なのかというような問題に関しては、いかがお考えですか。

葉 祥 栄 スタイルについてはたいへん難しい問題がありまして、ごく最近ではこの近くですけれども、慈愛園という60数年前に、アメリカの東部から移植されたマーサーゼネのたいへんかわいい家のある福祉施設があります。その60年前の建物と共存させるために私どもが作る建物をどうすべきか、ということで悩んだことがありまして、いわばコンテキストというのですか、その土地の持つ歴史とか文脈に対して、自分たちがどう立向うかということについて、熊本らしさみたいなもの、というのは我々意識したことがないのでわからないのですけれども、少なくともスタイルという点からいきますと熊本らしさといったものは、やっぱり阿蘇だとか天草だとか、あるいは熊本城の城郭であるとか、そんなふうなところで日頃生活している者としての相対として、結果的に現れるということで、どっちかというとな骨だったり、男っばいとかあるいはぞんざいだったり、身勝手だったりするのかもしれません、肥後もっこすといひまして、たいへん頑固なんですね。ですから保守的かというとは決してそうではなしに、保守的なために一番それをアンチテーゼとして、非常に革新的なものを求めるというか新しいものが好きで、わさもん好きと、熊本弁でいいますが。頑固者の肥後もっこすとわさもん好きが同居しているのです。そういう意味では非常に二律背反といひますか、同時にその保守的な部分と革新的な部分が内面にあります、それがその糾える縄のごとくに現れてくるというように考えております。

八束はじめ あまり葉さんの建物は、無骨な感じとは違うような気も受けますけれども、山本さん先ほどのお話で多少、住そのものに対する実験。たぶん実験というふう、先ほどのような投書の文脈でいわれますと、これは要は1人、建築家それぞれの思い込みで勝手なことをやっている、つまり住民であるとか回りの人にいっさい関係のない話ではないか、というニュアンスが入っていると思うのです。そのへんに関して、先ほどちょっともう既にコメントが出ているような気がしますけれども、もうちょっと補足してお話していただけますか。

山本理顕 ちょっと全体な話からしていきますとですね、今回のアートポリスみたいな実験と呼んでいいのかもしれませんが、一方に投書された方もそうなのですから、ほんとうは都市なんか誰も見ちゃいないのですね。建築なんかほんとうは誰も見ていないと思う、いなかったと思うのです。つまり他人の建物は自分にとって邪魔でなきゃいいと。自分の建物は自分に役に立ちゃいい。そういうふうにしかな建築も都市も見えていないから、問題が起きたわけですね。都市に来てこの都市はとか、この建築はいいなあなんて、こういう目で都市を見たり建築を眺めたりする人が、ほんとうにいるのかどうかですね。特にそういう投書をなさられる方たちは、どういうふうに建築を今まで見てらして、都市を見ていたかを逆に私は聞きたいと思うのですけれども。逆にいいですと、個人で作る建築も都市に対して責任があると思うのです。そういう視線がぜんぜんないから、たぶんとんでもないことになっているのだと思うのです。アートポリスのこの実験と呼んでもいいと思いますが、やっぱり見るに耐える建築、見るに耐える都市という視線は、どうしても僕ははずせないと思います。そういう視線で都市を見たり建築を見たりして、その行政側も含めて、そういう視点が初めて出たと思うのですね。1988年頃になって、日本にはほんとうに近代以降、そういう都市を見る、ほんとうに見るといふ、そういう視点が決定的に欠けていたと思うのです。見るというのは、私が建物を見るのであって。それが他人の建物でも全部見るわけですね。そういう視線が初めて僕は出て来たと思うのです。やっぱりそれはたいへん貴重なことだし、先ほど、画期的だといったのはそういう意味だと思うのですね。見るに耐える都市であり、見るに耐える建築というのは、やっぱり今までの自分にとって邪魔にならなきゃいい。自分にとって役に立ちゃいいという都市なり建築なりという視点とは、まったく違うものだと思います。見るということを手掛かりにして他人というか、ほかの人たちと拘らざるをえないと思うのですね。特に住宅の場合はそれがもっと顕著でして、自分にとって役に立てばよくって人のやることは邪魔にならなきゃいいというふうに、みんな住んでいこうとしているわけですね。都市計画にしろ住宅の計画にしろ、団地の計画にしろ、何かそこが全部起点になっているような気がするわけです。やっぱり人が一緒に住むということも、住むということの何か利点というのをずっと忘れてきていたような気がするのですね。そういうことを一方で言わない限り、その実験と言おうと何と言おうと構わないと思うのですが、少なくとも他人、この私の場合の110戸の住宅なのですから、110戸の人たちが一緒に住むというのは、ほんとうは何かこうそれなりの出来事があって、僕はしるべきだと思うのです。それに対して、他人は自分の邪魔にならなきゃいいという住

み方をするのだとしたら、そういう団地に本来住む資格が、僕はないのだと思うのですね。それだったら個人で住みなさい。それはそれでやっぱり可能性がある住み方があると思うのです。やはり団地という110戸の人たちが共に住むのだとしたら、他人は邪魔にならなきゃいいという住み方とは違う住み方が、やはりあるべきだと思います。それを言うことがもし実験で、それが何か建築家の満足できる単なる実験だと言われるのだとしたら、逆にその1人で住んだ方がいい家族なら、1戸建ての住宅に住んだ方がいいという、もののよさを逆に示さなければ一方ではいけないと思うのです。そういうモデルが一方でまったくないのでですね。一緒に住んだ方がいいという、言えるようなモデル。それを作るのは建築家の僕は責任だと思います。実験とか何とかいう以上に建築家がそれをやらないと、どこでもそれは実現しえないのだと思うのです。最低限、僕はそれが建築家の責任だと思って、むしろ責任だと思ってやっているという感じです。

篠原 一男 まず第1に、有名建築家の一人という前提にたって、今しばらくお話いたします。有名建築家の実験の場になっては困るという、一般論としてよくわかるのですけれども、もし有名建築家が実験的に造らなかったらどうなんだろうかと、いう方を心配します。そうするならば普通の建物が、見慣れた建物ができるだけではなかろうか、という感じがするのです。そうするとともにの方に戻って、実験的な建物ができた。そこから出てくる様々、時には危険なものが付纏うかもしれない。危険とは構造的な問題、そんなことはありません。比較的に非常に乱暴で、あるいは相当変わっていて、周囲の環境を壊すという意味での危険性があるかもしれない。という部分については、今個々の人たちが発言できる状態ではなくて、でき上がった状態で周辺との関係の中で、それがどう生き伸びていくかということで、批判の中でたぶんチェックされるだろうと思うのです。この部分に関しては、この今有名建築家が例えば、それぞれここへ来て造るということに関して、避けるわけにはいかない批判であり、我々も避けること、それをその批判を簡単に避けて、ほかのことをすることはできないというふうに考えます。

それからそうしてでき上がった個々の建物、いま途中でもお話しましたがけれども、いま点として存在するだけで。たまたまこの3人離れているので障害ないですけども、これはすぐワンブロック隣にハンスホラインがやるとすると、距離は近くて思想がまったく遠いというような建築家と、世代もわりに近い方ですけども、ぶつかり合うだけで、そのとき何が起こるかということに関しては、私は先にやっちゃったから責任がない。向こうはあとから来たから責任がない。たぶん勝手なことをやるに違いない。いま

ここでもこの間には関連がなく進行するわけで、原則的にはマスタープランを持っても難しい問題を、マスタープランを持たずにやるわけですから、とうぜん点の全体として都市をいま、ある意味で据めていくわけですから、全体マスタープランを磯崎さんたちが作らないという非常に聡明な方法を、これは選んだと思うのです。どこかでそれはランダムな状態に行くのではないだろうかということを目測します。これはちょっとランダムノイズとかプログレスアナーキーとか、私一連の考え方をかなり前から発表していますので、これを出すとちょっと長くなりますので省略しますが、都市というのは、現代都市はある意味ではランダム性を持たなければ、活性できないのではないだろうか。磯崎さんが、モダニズムの都市が失敗をしたということの中に、20世紀モダニズムのひとつの理論は、ランダムなカオスのものを廃除して、全て統一的なシステムに持っていくという理念があったので、その部分がそうとう何かつまらなくした部分がある。でも例外的に例えば、サンパウロの私の好きなスーパウリスト通り、50年代、60年代にできたモダニズムだけでじつに見事なパースペクティブを持ったところがありますし、全てというわけにはいかないのですけれども、ひとつモダニズムがあまりにも何か計測的な、さっき距離いくら、棟間距離いくらというようなことだけでもやってしまった。ある意味での型式主義、物理主義。それから逃げる方法。例えば東京とかがいま遭遇している状態。かなりランダムです。モダニズムがまったく遠いランダム差ですけれども、何か外国人の旅行者で、一番おもしろいところは渋谷だというような、アンケートがくるような状態に今来ているということ。そのようなファッションブルなことに乗るのではなくて、いま私がお話ししているのは、いまここでいくつかできるものでランダム性が生まれるかもしれない、熊本の都市に。それをどう吸収していくか、というのが第2段階だろうというふうに感ずるのです。

もうひとつ、そこで出てくるのは堀内先生がご心配されたように、たぶん無国籍な状態にしばらくいくのではないかと、という感じがします。だけれどもそのようなだけであって、まぎれもなく日本だと思います。でき上がってくるものは。日本の風土と気候と条件との中で、ぜったいフリーになるはずがないというふうに考えます。ただもうひとつ問題は、熊本市の問題とか、熊本の地域性、まさに伝統的なもの、風土的なもの、それとどうからむかという、もっと具体的な重要な問題は、それから先起こるのではないかと思います。そのときに、では熊本というものの本質は、風土性の本質は何かという条件が、掴まえない限り関連的に城、白川云々というだけでは、我々が参加してやっていくであろうこの計画に対しても、あるいはそうではなくて一般的に進んでい

る土地開発に対しても、たぶん十分な対策が、戦い方ができないのではないだろうかというふうに思います。

八束はじめ 磯崎さん、いくつかのポイントが出たと思いますので、ひとつには点だけで点在していくということと、マスタープランの不在であるということ。これは磯崎さん先ほどヨーロッパの都市と日本の都市の違いをちょっとおっしゃいましたけれど、そのへんに掘めてどうであるかということ。それからこれは行政側の課題でもありますけれども、いわゆる景観、熊本市は、先ほど石島さんのお話にありましたけれども、景観の問題に関してたいへん熱心でいらっしゃる。いわゆる景観ないし街並みとの調和という問題と、葉さんにも出たし、篠原さんにも出た、いわば点が異物として存在するということをどういうふうに折合わせるか。おそらくこれは予め言ってしまうとへんなことですけれども、我々のプロジェクトは進行していくと、この建物は街並みに合わないのではないかという批判は、まず確実に出てくるだろうと私は想像していますけれども、そのあたりに関してコミッショナーは、どうお考えかというのが2点目。それと3点目は、そのやっぱり地域性の問題と国際性の問題。世界と熊本を結んだときに、どのような形が出てくるか。その3点、コミッショナーとしてのコメントをお願いします。

磯崎 新 お答する順序がいまの順序に合うかどうかかわからないし、いまちょっとまざっちゃうかもしれませんが、一番最初に一言申し上げておきたいのは、例えば、これでくまもとアートポリスという計画ができた。いま進行しはじめたというふうになったとしても、建設される量とか、新たな補助金加わるとか新たな建設ブームがこれで起こるとか、そういうことはまったく無関係なことだということを、最初にはっきりしておいていただきたいと思うのです。結局今まで例えば、この熊本という街が、県が順々に毎年建設を進めている、建て替えが行なわれているという、そういう定常状態というものを、それは別に変えるという力をこれが持つというふうには、僕は思いません。ですからこういう計画がなくても、来年になればこれこれという建物が建つし、それからいくつかの団地が建て替えがなされるというプロセスは、あんまり変わらなかったんだろうと思うのです。そうするとそこで何がやれるかとするならば、同じ条件の中で建物のデザイン、あるいは質、つまり量ではなくてクォリティー、量ではなくて質を部分的に変えることには、このアートポリスの計画というのは役に立つ可能性はあるだろうと、そういうふうに思うわけです。ということは例えば、ある計画の中に別に全然思

想的にもデザインの的にも関心がなくて、ただビジネスだけで建物を設計している建築事務所が、やるかもしれないものをたまたまある外国の建築家がやることになったと、それだけの違いであろうと思います。そのときに、これを有名建築家のスターシステムを単純にここに導入しているに過ぎないではないか、というような批判というのがもしあった場合には、じゃあ、スターというのは何か。質を少しでも良くしようとしているときに、それをどういう方法をやったら一番いい結果が生まれるのかという、その手段に対する考え方、その問題におそらく行きつくのではないだろうか、どのように僕は思うのです。それで結局コミッショナーがやれるであろう、やるべきことというのは、そのよりいい建築家がより適切な場所で腕をふるえるという条件が少しでもできればいいな、というのがひとつの目標であるということを、先ほども申し上げたのですけれども、もういっぺん繰返したいと思います。そしてそういうふうにしてやっていった建物が、マスタープランなしでバラバラに建つ傾向にあるではないか、というその次の問題があります。これは都市というものが、都市計画というのがある。それから都市計画の中に、マスタープランというのがある。それをどういうふうに今後とらえておいたらいいだろうか、という問題があります。そうした場合に非常にヨーロッパの場合ですと、マスタープランというものを優先させて、アーバンデザインの上で、建物の輪郭線や配置に至るまである地区は全部予め計画をされて、それを順々に建築家はその枠の中で埋めていくという、そういう仕事の仕方をします。これはどういうことかと言うと、昔からいい建築家が全部が全部やるわけにはいかないと、ふつうの仕事もその中に入れないといけない。だけどふつうの仕事をあんまり勝手にバラバラにやると困るから、予め計画を立ててその枠の中で仕事をしてもらおうという、そういうやり方でそういうプランがヨーロッパの場合にはでき上がってきています。ただし日本にはこのシステムは行政サイドからいっても、計画サイドからいってもありません。ですから日本はそういうヨーロッパがこれまで持ってきたような都市景観を、計画的に計画するマスタープランの方法というのは、日本にはあんまり役に立たないというか、作業してもしょうがない。そういう考え方なのだろうと思います。そうするとあと日本で、じゃあやれるマスタープランの考え方は何かというと、むしろそういうひとつひとつのポイントを押さえて、それを繋いでネットワークを徐々に作っていく。つまり一寸先の計画というのはわからないけれども、一個一個の評価を積重ねて総体が最後に見えてくるという。最初に総体があって目標値があってそれからわり算でいくのではなくて、むしろプラス、1個1個の点を足していくというやり方。それこそが新しいタイプのマスタープランというふうに

いっていいのではないかと。それをなぜそういうことに、僕は考えていいのかといえますと、これは例えばひとつの例ですが、庭の造り方。ヨーロッパと日本の違いというのを考えて見てもいいと思うのです。日本の庭というのは、ここから見るとこういう景色がある。一步変わると別の景色が生まれる。順々にそういう違った光景をじゅず繋ぎにしていって、例えば回遊式の庭園というのが生まれてくる。都市の景観というのは実際に我々が体験するときには、そういうふうに歩いていながら違った光景を順々に体験していくという。ある種の回遊性、回遊式の体験というのが日本の町の基本だろうというように思います。ヨーロッパの場合というのは、そういう考え方ではなくて、もっとスパッと大きい割付けされたものをガチッと組み立てていくという、そういうまさに計画という言葉が固まってしまったような、そういう進め方を一般的にはします。その方がラシュナルなロジカルだ、というような呼び方になっているわけですが、そこはむしろ逆の方法を僕は取るべきではないだろうか、というような考えがあるわけです。それでマスタープランというものに対しての考え方の違いというのは、そういう点です。

それともうひとつ、地域性という問題があります。地域性という問題に関して考えてみると、それはある意味でいうと歴史性というふうに考えてもいいかもしれません。じゃあ、日本で、日本の独特手法を持った町というものがある、それが今でもそのまま生きているかどうか、ということになってくるとたいへんいま、実は問題が複雑になってきます。というのは過去100年あまりの間に日本は近代化の波をかぶって、日本中がそういう、つまり連続性、歴史的な連続性を断ち切られてしまった、そういうあげくの果てにいま我々は生きているという、そういう状態にあるのだと思います。そうするとその不連続になってしまった歴史というものが、地域の中に残ってるのかどうか。それをいま探そうというような形、それをレトロ風にノスタルジックに探そうというそういう動き、しかもそれがあある意味でファッション性を持つという、そういうことももちろんあります。例えば、煉瓦造というものに対する憧れであるとか、ノスタルジーとか、そういうものももちろんあります。だけどそれは考えてみれば50年前か80年前に、たまたま造ったそのとき最も新しい斬新なヨーロッパのもので、それがたまたま日本にいま現在残っていたために、むしろ逆にノスタルジックにこう思われているという、そういうことだと思います。そうすると僕は地域というものは様式で、あるいはそこにある手法で地域性というものを定義して、それをみんなで右へならいでやっていけるというような、そういう手のものではないと思います。

葉さんが先ほど言われたように、やはりむしろその背後にある思想というか共通の感覚というか、いうふうなものではないだろうかというふうに思います。例えば、僕自身いろんなところで仕事をする経験がありますけれども、例えば、雪国でやると、実は非常にいつも戸惑います。というのは、僕はこの隣の県の生まれで育って、そこである程度の時期まで仕事をしたわけですが、この九州の中で考えてみると、やはり無意識に九州の太陽の光、あるいは角度それから影ですね、そういうふうなものを図面の上でこれはどういうふうに見えるだろうか、ということはどこか頭で入れながらいつも判断しているように思います。ところが北国で仕事をする雪の中で、どんよりした状態ではほとんどがグレー1色になってしまう、白1色になってしまうというようなところで建築はどう見えるか、というような判断を直感的に出来なくて、実はそれは生まれた体質なのだろうと思います。それをもういっぺん僕自身が別な目で見ながら判断するという、そういうもうひとつ別な見方をせざるをえません。これは建物が風土性、建築家がそれぞれ町にきて町の光景を見ながら考えていった、発想していったものというのは、そういうものと直感的にそういう地域の持っている特徴というものが、どこかににじみ出てくるものだと思います。そういうセンシビリティのある感性のある建築家というのがほんとうは一番優れた建築家で、そういう人たちがやっぱりいい仕事をするので、順々にやっぱりその建築家としてここで選ばれていけるのだと思いますので、そうするとそういう人たちの仕事というのは、どこかやはりその地域というものを間接的に反映する仕事で、その中から生まれてくるというはずだというふうに、僕は思います。そういうのはかにスローガンや方法で、手法で地域性といっても、これは悪くいうとキッチュですね。妙なディズニーランドの最も通俗的な低俗な部分というものを、その地域に作り上げるにすぎなくなってしまう、というようにも考えます。

八束はじめ もう実は時間が、たいへん人数が多いものですから、十分な議論を尽くせないまま時間になってしまったのですが、石島さん、正直いって行政側から実はかなり答えにくい問題であろうかと思うのですが、特に景観の問題などを中心にコメントをいただきたいのですが。

石島 和光 概要を説明しましたときにこのアートポリスというものが、知事と磯崎さんと堀内先生で成り立っているというような、私説明いたしましたのですが、そういう意味では私は知事の立場で考え方を述べたいと思うわけでございますが、知事が

日頃申しておりますことは、何か前進的な可能性があるならば心配せずにやりましょう、ということをしゅっちゅうおっしゃるわけでございます。また一方、建築というのがそういう時代、時代の精神を反映して誕生してくるとすれば、現在細川知事が全国的にもある程度注目を浴びているというのは、やはりその時代を表わしているのではないかなあ、というふうに思うわけでございまして、このアートポリスの功罪、私どうなるか実はわからないわけでございますが、少なくとも県に入りまして30年代、40年代造ってまいりました建物が、いまどんどん壊されている。そういう中で、アートポリスで出来ていきます建物は少なくとも長く残るのではないか、というふうに信じまして、今からのアートポリスの行政を進めようという考えでおります。

八束はじめ 時間がもう過ぎてしまったのですけれども、最初にお約束した時間がとれなくてたいへん申しわけありませんが、会場にいくつかマイクが置いてありますので、ご質問なりご意見ありましたら最後にお聞きしたいと思います。

もし特にありませんでしたら、アートポリスは今日で終了ではなくて、これから立ち上がり始まっていくわけです。少なくとも92年に一定の成果をあげると。それに対していろいろな審判、ご批判を頂戴すると思います。おそらくこういう機会は今後も度々設けられると思いますし、来年はぜひ国際的なシンポジウムを持ちたい、というふうにも考えておりますので、今日意を尽くせなかった議論に関してはまたその日に改めてお話し上げるということで、今日の討論は一応これまでとさせていただきますと思います。ありがとうございました。

潤いのあるまちづくり シンポジウム

〈テーマ〉

—行って、見て、住んでみたいまちづくり—

- 日 時 昭和63年11月1日（火） 13:30～17:00
- 会 場 熊本県立劇場演劇ホール
- 主 催 自治省・熊本県・（財）自治総合センター
- 後 援 熊本市・熊本県市長会・熊本県町村会
熊本まちづくり協議会
熊本日日新聞社
NHK熊本放送局・熊本放送・テレビ熊本・熊本県民テレビ・
エフエム中九州
- 参加者 1,100名

この事業は、宝くじの助成を受けて実施するものです。

目次

• 主催者挨拶

板倉 敏和

(自治省 自治大臣官房企画官) 55

大谷 隆俊

(熊本県 土木部 次長) 57

• 基調講演 59

磯崎 新

(建築家)

• パネルディスカッション 79

• コーディネーター

堀内 清治

(熊本まちづくり協議会会長、
熊本大学工学部教授)

• パネリスト

有田 義啓

((有) 有田 代表取締役)

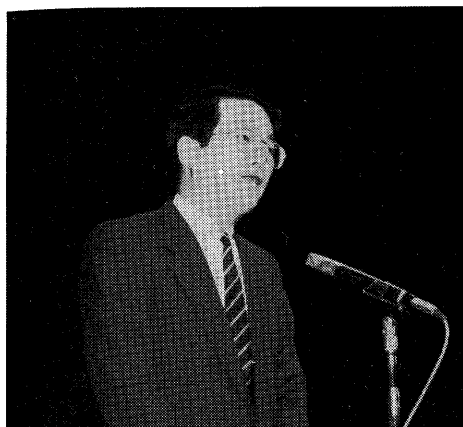
パトリック フランシス

(熊本マリスト学園校長)

安永 落子

(歌人、書家、県教育委員長)

挨拶



自治省自治大臣官房企画官
板倉 敏和

御紹介頂きました、自治省の板倉でございます。本日は「潤いのあるまちづくりシンポジウム」を開催致しましたところ、お忙しい中このようにたくさんの皆様にお集まりをいただきまして、盛大にシンポジウムを開催することが出来ました事を主催者の1人と致しまして心から御礼を申し上げます。

さて我が国は高度経済成長を達成致しまして、物やお金の面での豊かさというものがかなり達成をされました。生活も便利になってまいりましたが、しかしながら半面、街の姿ですとか国民生活というような面では画一化とか平均化というものが過ぎたきらいがあるのではないかというような反省が出てきております。言い換えますと、地域の長い伝統に支えられた文化や地域特有の景観との調和そういったものが失われたり、或は少なくなってきたというような問題であろうかと思えます。このような反省から地域文化、地域における街づくりなどこれらに対する関心が高まってまいりまして、多くの地方公共団体で行政の文化化とか個性のある街づくりといったことが強く言われるようになっておるわけでございます。

自治省では昭和57年から自治大臣の諮問機関といたしまして地方行政と文化の関わりに関する懇談会というものを設けまして有識者の方々にお集まりをいただき、いろいろと議論をしていただきました。この懇談会から生活に密着した生活文化や地域文化の振興にもっと力をいれるべきであるという旨の提言をいただきました。その中には各地域

で文化に関するシンポジウムを開催してはどうかとか、潤いのある街づくりに熱心な地方公共団体を表彰してはどうかというような具体的な提案もございまして、昭和58年度から各地でこのようなシンポジウムを開催するとともに、潤いのある街づくり優良地方公共団体自治大臣表彰というものを行ってきておるところでございます。

御案内の通り御当地の熊本県におかれましては、新しい田園文化圏の創造を大きな目標に掲げられ、建物や橋などの建設に当たりましてその設計を国際的な建築家やデザイナーに依頼をし、後世に残し得る文化的遺産として街づくりに寄与することを目的としまして熊本アートポリス構想を推進するなど地域の特性を生かした魅力と活力あふれる新しい街づくりを精力的に進められているところでございます。この「潤いあるまちづくりシンポジウム」の開催地として誠に所を得たものと考えておる次第でございます。

どうか参加の皆様におかれましては、このシンポジウムの成果を十分に生かされ、更に潤いと活力のある街づくりの推進の為に一層ご尽力をされますようお願い致します。自治省といたしましても、今後とも潤いのある新しい街づくりに積極的に取り組まれる地方公共団体に対しまして、出来る限りの応援をして参りたいと考えております。

終わりに当たりまして、このシンポジウムの開催にあたり、お世話をいただきました熊本県御当局はじめ関係の皆様には厚く御礼を申し上げますと共に基調講演をしていただく磯崎先生はじめコーディネーター、パネリストの先生方に心から感謝を申し上げ、御礼と御挨拶にかえさせていただきたいと存じます。本日はどうも有難うございます。

挨拶



熊本県土木部次長 大谷 隆俊

御挨拶を申し上げます。

午前の部の「くまもとアートポリスシンポジウム」に引き続き、皆様方には本シンポジウムに、多数御出席いただきありがとうございます。

また、シンポジウムの開催に当たりましては、先ほど御挨拶をいただきました板倉企画官をはじめ、関係者の方々へお礼申し上げます。

さて、我国の経済発展は、誠に目覚ましいものであり、経済的あるいは物質的には充足感を感じ、心のうるおいとか、文化という面に関心が高くなって来ていることは、最近のマスコミ等でも報道されており、皆様も御承知の事と思います。

こうした中で、まちづくりにつきましても、自然や伝統あるいは歴史的街並みの保存など、その地域の特性を生かした、個性と魅力あるまちづくりが、全国各地で活発に進められています。

最近では、まちづくりも、ただ行政が道路や公園をつくっていくというのではなく、住民の間でのまちづくりの気運が高まり、住民と行政が一体となったまちづくりが多くなって来ているように思います。

本県におきましては、21世紀へ向けて、活力と個性そして潤いのある熊本づくりを進めるため、「熊本明日へのシナリオ」を策定し、各種の施策が展開されています。

その中には、「水と緑の都」といわれますように、緑は豊かではありますが、その緑を

もっと増やそうという事で、「緑の3倍増計画」、あるいは「1村1森運動」などが進められ、また、昨年から、熊本の恵まれた自然環境を守り育てていくため、「熊本県景観条例」が施行されました。

午前中のシンポジウムでの「くまもとアートポリス」構想も熊本のこれからの新しいまちづくりでございます。

先ほど、住民と行政が一体となったまちづくり、と申し上げましたが、熊本に、「熊本まちづくり協議会」というものがございます。この会は、産、学、官が一体となって、個性豊かな魅力あるまちづくりに取り組んでいこうと、本日パネルディスカッションでコーディネーターをお願いしています、熊本大学の堀内先生を会長に、活発に活動されており、熊本の古い街並みを再発見しようと、住民と一緒に街並みウォッチングをしたり、住民と共に魅力あるまちづくりを検討する、まちづくりワークショップ等も実施されています。

今後、地域住民と行政が一体となって取り組み、その地域の特性を生かした、個性あるまちづくりを行っていく必要があると思います。

本日のシンポジウムが、テーマにも掲げていますように、熊本に「行って、見て、住んでみたい街」にするための大きな手掛かりになる事を期待しております。

最後になりましたが、本日御出席の皆様のますますの御活躍と、本シンポジウムが有意義で実り多いものとなります事を祈念いたしまして御挨拶と致します。

基調講演

テーマ——

「新しくまもとのまちづくり」

建築家 磯崎 新



建築家。磯崎 新 アトリエ主宰。

現代日本の代表的建築家の一人。その建築の大きな特徴は、建築を思想の表現形式としているところにあり、その意味での代表作である筑波研究都市の「つくばセンタービル」は、ポストモダン建築の代表作として評価されており、国際的にもロサンゼルス現代美術館、1992バルセロナスポーツホールなどの設計を手掛け、高い評価を得ている。また、「空間へ」、「建築の解体」、「建築の修辞」など多くの著書があり、建築だけでなく関連する広い領域で大きな影響を与えている。

いま御紹介あつかりました磯崎でございます。今日こちらに伺いました最大の理由の一つは、現在熊本県が中心になりまして、いよいよ1992年に向けてスタートをはじめたくまもとアートポリス構想のコミッショナーという役割を仰せつかっていることから今日こちらに伺うことになったわけです。私がこのアートポリス構想についてどういうお手伝いをするか、という細かな問題に関しましては、後ほどまた段々出てくるとしまして、何故かそういう仕事を引受けてしまったというひとつのきっかけをまずお話しして、それから本題に入りたいと思います。

細川知事の一種の個人的な諮問機関になっているのかと思いますけれども、21世紀懇話会というごく少数の人たちが、知事を囲んで様々な意見を言う会がございます。数年前に、たまたま私に声がかかりまして、そのときにはじめてこの懇話会に出席させていただいたのですが、実はちょっと大変恥かしい思いをそのときしました。といいますのは、関係のみなさんが熊本のことをみんなよく知っている人ばかりなのですね。熊本はああしたらいい、こうしたらいい、ということを目なさん申し上げるのですが、僕は熊本というのをほとんど知らなかったという状態でございました。私は、個人的には隣の県の大分県で生まれて向こうで育って、そうしてその後、建築家になって仕事も大分県、福岡県を中心に仕事をかなりしたわけですが、何故か熊本では一度もまだやったことがありませんでした。そのために来る機会がなかったというのが、まずひとつ。いつ来たかなあ、と思って考えてみると、実は子供のときに来たことがあったのです。小学生のころです、ですから戦争中ですね、ですからほとんど記憶に乏しい。むしろ戦争前の熊本の光景というのを、何かかすかに覚えているという、そういうぐらいの知識しかありませんでした。そこで実はそのときに様々な皆さんの意見を聞きながら、熊本ってどういうところだろうか、というようなこととか、熊本に関してのいろんな本だとかというようなものを、それから少しずつ気をとめて読んだり、勉強したりというようなことをやっていたわけです。ちょうどそのころ、私は外国でいくつか仕事を抱えていたわけですが、ベルリンで国際建築展という企画がございまして、これは西ベルリン市が、約7年か8年間に建設する公共建築のほとんどを国際的な建築家及びもちろん地元ベルリン、あるいはドイツの建築家も含めてですが、に依頼をして、そうしてそれを昨年の87年に全世界に公開をして、一種の建築の実物の展覧会をやるということだったわけです。そのうちの1件をたまたま依頼をされまして設計をしました。ですから何度かあのベルリンに行ったり来たりというようなこともやったわけですが、そこでこの企画が、ベルリンという町の中でどういう意味を持っていたか、というようなことにつ

いてはある程度知っていた、そういう関係にありました。たまたま昨年知事がこの展覧会をベルリンに見に行かれて、熊本もまったく別な形でいいから、新しいタイプのこういう建築展に相当するような企画を作ってみたい、というお考えを持たれて、それで私が御相談を受けたわけでございます。それでそのときに、たまたまいろんな向こうの関係も知っていましたし、関係者も何やかやと友達がたくさんいましたものですから、この企画をお手伝いするというようないきさつになってきました。ですから熊本ということをおそらく知らないままです。少しづつお付き合いをしていた中で、いよいよこういう具体的な企画を通じて、今度はかなり深入りしてべったりお付き合いするというようなかたちになってきたわけです。

この計画をそういうことで考えていくうえで、私がどういう考え方をしているか、という点についてまず御説明しながら、それを具体的にどういうふうに進めていこうとしているか、という点についても最後には触れてみたいと思っております。

このベルリンの計画につきましては、午前中のシンポジウムでもちょっと触れたわけでございますが、戦後の全世界的な都市の再建というそういう動きの中で、この都市の再建の全てがもしかすると失敗したのではないか、という反省を持っている、それは日本の我々が見ているこの都市も、もちろんほとんど戦争中焼けましたし、戦後になって出来上がったものですし、焼けなかったとしてもほとんど戦後に出来上がったものが多い状態になっています。それは全世界、特に戦火を被ったヨーロッパの諸都市というのは、全部同じなわけですね。それでヨーロッパ中、もちろん日本もそうですが、破壊された都市をどう再建するかという、そういう共通の課題というものを持って、それが戦争が終わった1945年からだいたい20年間ぐらいの間ですね、いろんなプランが出来て、そしてそれを実現にこぎつけたというのが実際の状況でございます。

それが60年代ですね。ちょうど20年後に、今から逆にいうと20年前でございますけれども、だいたいその戦後の再建という状態が目に見えてまいりました。それはその当時一番先端的といいますか、あるいは共通の基盤で了解をとっていたといっていいいでしょうか、そういう近代都市計画の方法論に基づいて、出来上がったものがほとんどなわけです。そうしましたら、最近になって。最近になってというよりも、それが出来上がったのが60年代の終わりから、あるいは70年代のはじめぐらいから徐々に、どうもこれはおかしいと、間違っていたのではないかという批判が少しずつではじめたというのが、世界的な状態です。そしてベルリンの計画というのはその10年後に、それでは新たにどうやったら新しい都市のあらゆる意味での生活も環境もそれから形態も組立てられるか、

というそういう提案をしようというのが、このIBAのひとつの目的でした。

その具体的な話になる前に、ひとつのIBAのエピソードを今の時点での話でござい
ますけれども申し上げます。昨年の暮にロンドンで、ロンドンの市長が招待をする晩餐
会がありました。この晩餐会にはロンドンの開発をやっている関係者、もちろん行政関
係それから民間などから重要な人たちが招待をされて、ロンドン市長の公邸の大晩餐会
場でその食事がなされたわけですが、そのときに皆さんご存じのダイアナ妃の方が有名
ですけれども、チャールズという皇太子がロンドンにいます、このプリンス・チャール
ズがスピーチをしたわけです。このスピーチがいまや全世界に大波紋を及ぼしていまし
て、そういう意味で歴史的にかなり重要なスピーチになったというように私たちも受け
取ってるのですけれども、これはプラスなのかマイナスなのか、単純な批判なのか、か
なり反動的な意見なのか、これが今後しばらくの間、議論され続けるぐらいの内容を持っ
ています。

この内容のひとつというのは、ロンドンの中心部にセントポール寺院という中心にな
る寺院があるわけです。このセントポール寺院というのは、17世紀の終り頃にクリスファ
レンという、有名なバロックの時代の建築家が構想して、設計をして出来上がったもの
で、いわばロンドン市の象徴というか中心になるべき大伽藍ですね。その建物のすぐ横
にパトノスター地区という、昔このセントポール寺院に関係をしていたお坊さんとかそ
ういう人たちが住んだり、関係のいろんな施設があったりという地区があって、その地
区が戦争中にナチの攻撃で被災をしましてかなり壊れたわけです。その地区が再建をさ
れました。プリンス・チャールズは再建されたこのパトノスター地区についてその意見
を述べたわけですが、そのきっかけというのは、この地区に再建されたのはちょ
うど60年代で、その60年代の建物を取壊して、新たに・・・いま全世界でニューヨーク、
東京、ロンドンというのが、3つの金融の中心になると・・・このためにオフィス事業
が、ロンドンも東京と同じように増え続けておりますので、そのために再開発しよう、
再々開発ですね、そういう動きがあった。これのコンペに対するプリンス・チャールズ
の批判として、これは出てきたわけです。このいきさつは、壊されたロンドンのパトノ
スター地区というのは、50年代にイギリスの特にロンドンを中心にして都市計画を全体
に采配を振っていたとか、コンセプトを作っていたとか、そういう重要な人物
でフォルフォード卿という人がいまして、この人が再建のプランを作ったわけです。で
も卿ですからサーになるだけあってかなり重要人物で、都市計画の中心の役割をした人
です。ここで作った都市計画を実際にそのまま、彼は設計をして実現をしました。実現

したのを見ると、今からみれば壊したいなあと思う程度の物になってしまったわけですが、当時としては、大変これはユニークな案だというふうに評価されていました。近代都市計画の持っている様々な概念というか手法といいますか、こういうようなものが全部ここに組み込まれています。例えば人工地盤という考え方、それから隣棟間隔という考え方、それから人工的に開放的な広場を作るという考え方、こういうような都市計画の一般的な手法というものは全部入っていきまして、僕が学生のころには、これこそが都市再建のモデルになる、これこそが重要なコンセプトだ、というようにして教科書で習った代表的なものです。ところがそれが20年経ったいま、もうダメだと壊せという、そういう状態になってきています。それをプリンス・チャールズの表現によれば、セントポール寺院という非常にきれいな建物があるにも拘らず、そのすぐ横にかなりの大きさの高さの建物を建ててしまった。だいたいけしからん。おれはこの檀家総代であると。セントポール寺院はもちろんイギリス国境界の中心で、そしてイギリスの皇室の一番中心になるわけですから、檀家総代だから言わせてほしいと。この60年代にやった計画というのは、ちょうどルーブル美術館に行ってモナリザを見に行っただけなのに、おれの目の前にアメリカンフットボールの選手がスクラム組んで邪魔してきれいなものが見ようたって見えない、そういうあり様にこの町をこの再建の計画というのはやってしまっている。だから当然取壊していいはずだ。取壊していいのだけれども、というのはそれから先にまた話があるのですが、それを再開発するために実はコンペがありました。そのコンペに私も実は依頼されて応募したわけですが、イギリスの何人かの一番トップの建築家、それにアメリカから1人それから日本から1人と、それだけのメンバーで案を出したわけですが、プリンス・チャールズに言わせると、だいたい全部ダメだ。古い建物の横に計画を改めてしようというのが、だいたいおこがましいと。こういうことから全面否定をされてしまった、といういきさつがあります。それで僕は、そこでいろいろな事情といいますか、いきさつというか、いうふうなものを興味を持って調べたので、だんだんわかってきたというのが、こういう状態なわけです。そうやって見ると、60年代に再建されたものもダメだ、80年代に計画されたものもたいがいダメではないかと。しかしその先、これをどうしたらいいかわからない、という状態になってきたというのが、いまのそのロンドンの例えばひとつの例ですが、状態です。この例でわかりますように、ある町の計画を、例えばヨーロッパというような伝統的な町の中で地区の計画をしようとする、プリンス・チャールズが言うというのは、かなり実は影響力があり過ぎてですね、関係者一同、僕が合うとみんな顔をしかめているわけですから

ども、関心が深い。市民も同時にもちろん関心が深い。どういう建物になって、どういうふうに変わっていくかということに対して、必ず様々な議論がなされているという、そういうのがいまのイギリスなんかの状態です。

話がそのベルリンに戻りましてそのベルリンで、じゃあ、それをどういうふうを受けとめていたのかというと、この戦後の計画というのは、非常に全てが合理主義で出来上がって計画されています。この合理主義で計画されて、例えば、建物には均等に日が当たらなければならない。だから隣棟間隔をとりなさい。それから空間はオープンにしなければ。それから自動車と歩行者というのは上下に分離しなければ、というような様々な教科書になってしまったような手法が、そこで使われている。これまで使われてきた。こういうことで出来上がったきた世界中の再建された都市、過去数10年にわたって延々と作り上げられてきた全ての都市の間違い、ベルリンはそれをそこから組立て直すぞというのが、このIBAの宣言といえますか、意向といえますか、いうところがありました。そしてそこで何をやったか、どういう考え方が出たかといえますと、20世紀になってそういう開放的な団地の計画というのがなされるようになった基本には、緑と太陽と空間をというコルビジエのスローガンももちろん反映しておりますけれども、様々な新しい抽象的な都市空間というのかな、そしてしかもそれは、全部緑の中に置くべきであるという、非常に画一的に割りきられた方法論で実は出来ている。出来ているのだけれども、それがどうも間違っているのではないか。その間違っただ理由は、町が、そういうところで、あまり町らしくない状態を作ってしまったようになってきた。つまり極端に言うと、森や公園の中に建物をポツン、ポツンと建てて住んだ、非常にこうロマンティックでいいイメージなのですが、実はそれが間違っていたのだと。むしろ伝統的にヨーロッパの街がハイデンシティ、つまりもう過密で超密で、場合によったら薄暗い日陰しかないような部分もあったような、そういう伝統的な都市の持っていた活気、それから空間の緊密さ、そういうものが実は、ほんとうは都市らしいというふうに言うべきなのであって、その近代になってそれを全部解体して、バラバラにして郊外に追いやった。このやり方の間違いがあるのだ、というのが批判の最重要点で、もう一度元に戻すのではないか。街区というものを再建しようではないかというのが、IBAの大体のおおまかでいう問題点でした。実はここで、これからあとの問題のずっと基本が、視点が見えてくるわけですが、なぜヨーロッパで、そういういわば街区というものが出来上がってきたか、という点、それから逆にもうひとつ、日本という国に、そういう街区というような概念が歴史的にあったかどうか、というような点、こういうような点に

ついて、もう一度ちょっと検討して、比較してみる必要があると思うのですが、そこには大変大きな違いがあります。その大きな違いというのは、まずひとつは、都市の見方、概念あるいは観念と言ってもいいかもしれません。それがヨーロッパと日本でも、かなり本質的に違っているというように、私は思います。そのうち、ヨーロッパの街というのを考えてみるとわかるのですが、もし皆さんが、ヨーロッパの古い街を訪れられるとわかりますが、街がそっくりそのまま城壁の中にだいたい入っています。ある意味で言うと、城壁で囲われた中がひとつの都市であります。それはだいたい中世の終わりから近世にかけて出来上がってきた概念です。だから大都市になっても、都市というものの回りには城壁があるのだというその考え方だけは変わっていませんでした。それは18世紀、19世紀になるまで変わりませんでした。この都市の城壁というもので取り囲んだひとつの中ですね。ですから逆に言うと囲われた中が都市である。その変わり外は田園であると。田園と都市というものの区別が非常にはっきりしておりました。その境が城壁なのだ。場合によっては都市が独立しておりましたので、この門で通行税、入市税というものをとりました。それらは税金をその門で取上げて出入りをしていたというような、そういう時代がかなり長く続いたわけです。必然的に都市というのは広がります。そうすると前あった城壁を壊して、それでまたもう一度外に城壁を作っていくと。ですからパリとかローマとか、そういう街の歴史的な展開というのを見てみると、その城壁の跡が、何回も広がっていった跡があります。おそらく7回ぐらい城壁を作り替えたと言われていますけれども、そういうように城壁はどんどん広がっていく。とうとう19世紀になって馬鹿馬鹿しくなって、つまり都市の構造として必要なくなって、その外部の城壁を取払った。そこから新しい近代の都市というものの姿が逆に現れてきます。そういうように城壁でとにかく囲われていたということを、ちょっと頭の中においていただきたい。

もし、その時代の日本というものを考えて見ると、日本というのは、やはり城壁がありました。熊本にも城壁があるのですが、この城壁はお城だけですね。そこでは中に住んでいたのは城主、それも住んでいたかどうか分りませんが、むしろ一種の城壁でありお城である。お城であり事務所であるというような形で城壁が出来上がっていて実際の生活というのは、武士も町民もその周辺に広がっていた。それは自然にいつの間にかどこことなく田園の中に浸透してしまっているという、区切りのない状態でいました。要するに、城壁の位置が日本の場合にはお城にしかなく都市を囲っていない、というのが日本の場合のある意味での特徴でした。これは逆に言いますと、都市と農村の関係という

ものを、ヨーロッパと日本では区別して考えるべきであるという、そういう観点がひとつここから生まれてきます。それと同時に、都市に対する概念、宇宙間というものが、宇宙間という用語がありますが、概念が違ってきました。

ヨーロッパの都市というのを考えた場合に、これをおおげさに言いますと、一番最初に宇宙の考えがあって、その次に国家があって都市があって、家があって人間があると。これがちょうどひとつの入れ子の構造になっていたというように、ヨーロッパの都市の場合は見ていいと思います。これを説明するのはなかなか長くなってしまうのですが、おおまかに言うと、人間が中心にというかその細部にいて、その周辺に自分ところの家があり都市があり国家があり宇宙がある、というようにだんだん広がっていくのだけれども、それは常に中に包含された形で広がっていたというのがいる、という構造にヨーロッパの場合はなっています。伝統的にですね。ところが日本の場合というのはそれは違って、極端に言うと自分の家の敷地というのがあって、それがいつの間にか重なりあっていて何とか都市と呼ばれていたという。ですからおおまかに言うと、そういうふうに入れ子にならずに、各人が宇宙と1対1でいきなり対応していたというような、構造に逆に言うとなっていたかもしれません。それは輪郭を持っていなかった都市に住んでいたという関係から、生まれてきているのだろーと思います。

例えば、中国はそういう意味ではヨーロッパ的なのです。奈良に平城京を作ったときに、中国の長安などの都市計画をそっくりそのまま日本に輸入しました。輸入したときに、向こうの中国の都市にはやはり城壁がきちんとありました。ところが日本はないのです。そして平城京では作らなかったのです。せいぜい回りに簡単な掘りを回したという、それ以上作っていません。そういう意味で言うと、例えば都市のゲイトのひとつである羅生門であるとか、いろんな門があったわけですが、そういう門は何となくただ、たまたま大通りに象徴的にあっただけであって、中国のように機能的な城壁で囲まれた中に門があったという、そういうものとはちょっと違う機能の役割を果たすようになってきています。だいたい必要がなかったのであろうというふうに思います。なぜ必要なかったかというのは、要するにやっぱり都市の持っている独立性とか安全性とか、いろいろ防御上の配慮とかからかなりいろいろ説明がつくのですが、形態上そうになっていたということだけ見ておいていただければいいと思います。その中でもうひとつ、ヨーロッパの都市と日本の都市の違いの最大の点というのは、公共空間と私的空間との区別です。日本で公共空間というのは今で言えば、それは広場があるとか、それから駅前に何があるとか、道路があるとか、そういうのを公共だと言われていますけれども、

実はこの公共というのが、あまりはっきりしていないのですね。

ところがヨーロッパで18世紀に、ローマの地図をニーノという人が作りました。その地図の特徴というのは、ここは誰でも入っていい場所というのを白くして、入ってはいけない個人の場所というのを黒く塗って、それでローマ中の建物を全部、地図を作って埋めたわけです。ですから黒い部分と白い部分、つまり公共の部分と私的な部分がちょうど霜ふりの肉みたいに、いろいろ入り交っているという状態がはっきりわかるような地図がありまして、そのときに公共というのは何をさしていたか、と言えば街路ですね、それから街路から入ってくる建物の中庭、それまでが公共です。それから教会の壁の中には、入らないから壁は黒いけれども、教会の内部は公共だということで、そこも白くなっています。そういうような具合に私の部分と公の部分というのが、概念として非常に明快に分れていて、それが都市の構成の、つまり基本的な概念になっているというのが、例えばこの地図でわかります。ただ日本の場合に、じゃあ、それに相当するものを作ったら、いったいどうなるのだろうかという、非常に実は困るわけです。だいたい伝統的に町の中の家の作りというのを見ていると、町屋をちょっと除外して、普通の、例えばあるレベルの武家の屋敷というものをちょっと考えてみてください。普通の一軒屋でもいいですね。だいたいそうすると、ある土地の囲いを持っていて、そこに表の門と裏木戸というのがあって、それでだいたいが庭があって、その中にポツンと家が建っている。それで家というのは隣と接していませんから、隣との区別というのは常に塀で区別している。その塀もあまり高くありません。そういうような区別の仕方で行っていることは、建物というのは、ひとつのロットの中のひとつの点のような役割をしていて、その門から内はどちらかというプライベートである。それから門の外は公共と言っていいかどうかわかりませんが、公共性というものを持っていた、というように区別がつけられます。ところがヨーロッパで家を考えると、日本の場合にはいったん家に入ると、鍵などがあまりありませんから全部筒抜けで、中まで、奥の奥まで入っていきます。ヨーロッパの場合には部屋が独立していて、各人鍵がある。そうすると一番最後に、自分の部屋の鍵がかかった個室というものが成立していたわけですが、日本の場合には、その個室という概念がない。鍵がない。おそらくもしその家に、どこから敵に攻めこまれたときには、ヨーロッパの場合には、最後には自分の部屋の個室の中の鍵のあるところで、逃げ込むことが出来るけれども、日本の場合にはだいたい表のドアのかんぬきが砕かれたら、そこでもう降参する。要するに象徴的に、もうそれ以上中に入ってきて、もうこれは負けるだけだというのがはっきりしている、そうい

う仕組みになっていて、公共に対して私的なものを守る位置というものの領域が、非常にはっきり違っていた。その鍵の位置の違いというのは、かなり大きいと思います。そうしてくるとやっぱり日本の場合に、じゃあ、どこまで公共でどこまで私的かというのが、僕の感じで言うとはっきりしないのです。私的の極限である私室というのがないということが、もうひとつ逆に問題だろうと思います。かんぬきを外して門から入っても、まだ公共かもしれないのです。そこにはいろんな自分以外の家族や、それから関係の人もうろうろしているわけですから、何となく奥の襖の奥に自分の部屋が出来たという、そういう関係になります。そうすると区別をあんまりしないまま、あいまいなまま、どんどん自分のところまで入ってくる。そうするということは逆に言うと、家や都市や国家というような明快な区切り、例えばそれが城壁というような区切り、それから鍵という区切り、そういうものなしでボンと全体に連結し、宇宙に連結している、国家に連結しているという、そういう関係というのが、日本の場合には逆に成立しています。それが都市の組立ての違いの何かわりと大きい部分に作用しているように僕は思います。それは言い替えると、ヨーロッパというのは都市、まさに都市そのものである。それに対して日本というのは、以前として都市は田園であると、村であるというように、逆に替えることができると思います。それは都市住居といわれているタイプのものも、1戸建て、庭付き1戸建てというものは、これは農村の、田園にある1戸建ての住宅の考え方と別に変わりはない。つまり同じタイプのものを町の中に持ってきた。たまたまそれが条件が厳しくて、ぎゅうぎゅうになってきたときに、町家というものが出来ているわけです。しかし庭付き1戸建てというのが、やっぱり理想であるという、典型であるということは、それもやっぱりその変型にすぎないというように言っていきたいと思います。

そういういきさつがあったとすると、やっぱりヨーロッパの先ほどのベルリンの歴史が生んできた都市の構成というものを、今、改めてもう一度復活させようという意図というのは、ヨーロッパの伝統の中にある人たちにとってはよくわかり、これは理解できる発想だろうと思います。だけど逆に日本人にとってみると、そういう高密度で都市を組立ててきた歴史も体験もないところで、改めてこれにフォローしていても、これはちょっと無理かもしれない。むしろ日本というのは、別な視点を組立てるべきではないか、組立ててしかるべきであり、その中から、それから生活の関係というもののなかから歴史的にもそういう都市の構造が出てくるのではないだろうか、というふうに思います。

そこでまずはひとつ、このくまもとアートポリスの構想が出る前に、熊本県ではもう既に、田園文化圏というスローガンが掲げられていました。これはちょっと一見してみ

ると、現代の方向から逆行しているというように見える、スローガンのようにも見えるのですけれども、しかしこれは僕は非常に説明がつけやすいというか、実感として有り得るというか、正當的にそれを評価していいような、そういう発想なのではないでしょうか。むしろ都市でなくて田園というものの中で、田園といっても回りがただ広々と緑があるというわけではありません、田園的なものの中で、新しい都市が生まれてくる。文化が生まれてくるという、そういう進め方です。それは説明が必然的というか、歴史的に当然そうあってしかるべきものなのではないだろうか、というふうに私は受取れます。

それでそういうふうにヨーロッパの建築と都市の関係、あり方というふうなものと、日本の同じような関係というものが、もし本質的に違うということがあるとするならば、あるいはそれは逆にある意味で言うと、我々の都市に対する見方が違う、それから生活の仕方が違う、というものにも当然反映してくるだろう。そうするとそれがこれからあとの、例えば熊本の、県をはじめ各市が組立てていくべき様々なプランのコンセプトの中に、その概念が当然反映してこないといけない、というように私は感じます。

そういうふうを考えながら、熊本というものを見てみた場合、あるいは逆に言うと、私のように実はこの町で育ってなくて、こういうテーマが与えられて初めてこの町を見直してみた場合に、非常に第一印象というか直感として、この町は他の町と違う特徴を持っているなあ、というのがわかります。それは地形の上から取分け言えます。なぜかと言うと、いまの日本のほとんどの都市というものは、近世、つまり16世紀の終わりから17世紀の始めにかけて作り上げられたあの城下町が基本になっています。熊本はその典型です。そこでとられた手法というのは何かと言えば、まず、もちろんお城というのは最初は要害、要塞だということで、山の上にありました。それがだんだん平地に下りてきて、平地の中心にこなければいけないのだけれども、平地に下りて来たときでさえ、様々なその周辺の地形を配慮したうえで位置が決められている。それは川の流れ方、それから海の入り方、そういうところでわりと自然の要害といいますか、そういうものを逆に利用してお城が作られたというのが、日本のあの時代のほとんどの基本的手法だったと思います。それはもう、非常にはっきり熊本で皆さんが実感としてわかるころだと思ひ、僕はそれが非常にこの町ではうまく出来上がっているのだなあ、というのが改めて、改めてというよりも初めてこちらに来て、ゆっくり回りを見せていただくとわかってきた、という気がします。

そうするとそこで何が出てくるかという、自然に、もう人工的なもので完全に中国の都市であるとか、ヨーロッパのある都市みたいに、回りに手掛かりがないから完全に

抽象的に、都市を組立て、物理的に組立てるというのではなくて、蛇行する川であるとか、それから丘の状態であるとか、というふうなものを利用して町が組立てられているという。この利用のされ方、応用のされ方というのは、この町を非常に豊かにしていくひとつのきっかけだし、その部分にどちらかという自然が残っている。その自然というものが逆に言うと、自然の形態があるために町が不整形になっているという、そういう状態が実際にはこの町には起こっているように思います。そうするとそれを、むしろ僕は評価すべきであり、むしろここで本来この町が持つはずだった、持っていた特性を、近代都市計画というのは全世界画一的に、計画を一定の方法の中で全部押付けて組立てていますが、それじゃないものを本来この地形とのからみ合わせの中で、この町というのは作り上げてしかるべきじゃないのかなあ、というような思います。例えば、戦後の再建計画というのが全世界的に都市計画上失敗しているという意見をヨーロッパの例で言いましたけれども、日本ではどうなっているのかと言うと、だれが見ても本当にいい町が出来たというのは、日本中だれも戦後思っていないので、やっぱり悪いということだけは共通している。だけどどこがどう悪いのか、ということについてはあんまりはっきりしていません。だけどひとつわかることは、そういう地形の特殊性であるとか、それから景観の違いとか、それはどういうことかと言うと、例えば、南に山があって北向きの町であるとか、あるいは西に海がある町であるとか、真中に川が通っている町だとか、そういう様々な種類の違う地形にある都市に対して、どうも戦後作られた都市計画は全部同じ手法しか使っていない。例えば、駅がある、駅は通過交通でその起点になる、それから駅前広場があって大通りがあって、商店街がそれに平行してあって、それから基盤目のパターンがそれに平行して組立てられていくという、非常に全国どのヶ所を回っても、おそらくちょっと回ればどこに何があるか、というのはすぐわかるわけです。迷うということがもうないぐらい画一化している。これは戦後の都市計画を推進した日本で、国がもちろん中心になって推進したわけですが、なぜかしらそのときにワンパターンにしてしまった。これこそが唯一だという指導が、何かわりと画一的になされてしまったのではないか。独自の発想を持って独自の計画をするというようなものではなくて、もしそういうことをすると補助金がでないから作業されない、というぐらいの感じの指導をしながら全国を同じにしてしまった。この誤りというのが、おそらくいま我々全員それに耐えさせられているとか、その誤りを全部受取らされているという。そういう事態に立入ったんじゃないだろうか、という気がいたします。

そこで実は今日、今朝の議論の中で、今回のくまもとアートポリスの計画の中で、マ

マスタープランというものがない、マスタープランなしで進行しているというのはおもしろいという、そういう意見が出てきました。マスタープランがないというところがまた問題なのですけれども、僕なりに言い替えれば、いわゆる全部を統轄するこれまでのマスタープランというものは必要ない、だけれどももっと必要なものは、その都度マスタープランに、生み出されてくるひとつひとつの事実を正確に評価して判断してその次を考えるという、そこでの一個一個のワンステップ、ワンステップの決定というのがむしろ重要で、大きい夢を描いてそれを逆算で割算するという、そういうマスタープランはいらない、というように私は今朝の議論を受取ったわけです。これはおそらくそういう画一的な都市を組立てないためには、その場所に行って、そこで発見されたものを手掛かりに町を作る以外しようがないというのが、一番のおそらく基本になるだろうと思います。ですから、どこに行っても駅前大通りがある、というような都市というのは本当は無味乾燥でどうしようもない、むしろまったく別な、駅前に行ったら迷路になっているというような町がもしあったら、案外それがいま大変ユニークなみんなの関心を持つような町になったかもしれないけれども、残念ながらあんまりそういう意見はなかなかとか、そういう案は実際には作れなかったわけです。むしろ今それを作っていくべく、これから考えていくべきではないのだろうか、それがほかと違う、熊本なら熊本の町の独特の個性を持った町を作る、唯一の方法なのではないだろうか、というような気さえするわけです。それを専門的なサイドから考えてみると、もちろん都市計画の場合に様々な行政指導があります。それと計画もあります。ゾーニングがある、それから様々な建築や都市計画法による制限というものがあって、全部それに基づかなければいけない。それはもちろん、そういうものを一挙に取払うということは、もちろん不可能だと思いますけれどもその中で、我々建築の設計をやっていると実際に経験としてあるわけですけれども、何かひとつの思込んだ概念があってそれに合わせて設計をするといつまでたってもいい案が出てこない。いっぺんそれを忘れて、そしてむしろ逆にその場、その場で違った解決をして組立てていくと、かえっておもしろい案が見つかるという、つまり上からくるマスタープランというのはなしで、一個一個積み上げていくことがマスタープランだといって逆に読んだ方がいいのじゃないかなあ、というような気がするのですが、建築の設計をやった場合にわかるのは、おもしろい案が出てくるのは大概割算でやったのではなくて、そういう一個一個違ったものを別個に解決していったときに生まれてきた解決案、アイディアというのが、一番おもしろく出来上がる、最後には響いてくる、というのが我々の実際の経験ですが。それが実際にここで本来なされてほしい、

というようなところがあります。

そこで都市をそういう形で考えていった場合に、じゃあ、何が原則になるのかなあと、何が環境を、出来上がっていく環境を決定する原理になるのかなあと、そういうような疑問というか質問というのが、また出てくるかと思えますけれども、それも僕はあんまりこだわらない方がいいかなあ、というように逆に思います。むしろ日本の今までの建築でもない、都市でもない、むしろ造園というふうに言った方がいいかもしれませんけれども、造園の作り方をいまの都市の環境作りというようになときに、逆に評価してみると、以外におもしろいことが生まれて来るのではないだろうか、という気もするのです。例えば、またヨーロッパとの比較になりますけれども、ベルサイユ宮殿に行かるとわかりますけれども、ベルサイユ宮殿というのは一本の物凄い軸がありまして、この軸の周辺に対称的に幾何学的な配置がなされている、木もそれに合わせて刈込まれている、ですからある意味で、その当時の絶対王政の王の目で見たと、王の視線を軸にした壮大な支配といいますか、空間の支配といいますか、そういうものがまざまざと感じられるような、そういう作りにはなっています。ところがまた同じ時期に、例えば日本でいうと、後水尾上皇が作られた修学院離宮というのを考えてみると、修学院離宮はそこにあった山を一部分、例えば山の中腹にダムを作って溜池を作る、それからその間は田んぼのあぜ道を歩く、それからその下の方には別な囲いを作る、というような具合で、上中下に分けた3段の庭になっていますけれども、幾何学によってあるいは人間の手によって、山の形態や造園の形式を支配しようという意図はもうとう見えません。むしろ一個一個にその違ったまったく異質な庭園のコンセプトを山の中腹やその麓に点在させる、そうするとそこに入っていくときに、我々は別な世界を順々に辿って行くことができる。しかもその途中で回りの田園風景であるとか、あるいは京都でいうと北山の方角、背後に比叡山があるという、そういう関係を全部借景に取込んでいる。ですから景色を最大限に利用して、極端に言うとタダで貰ってきて、そして手を加えるのは最小にして、それでまったく違った世界というものを順々に造園の中で組立っている、こういう手法に修学院の場合はなっています。ですから同じ天皇というか、あるいは王が、構想したものの中でも、ヨーロッパと日本ではまったく発想が違っている。そのような庭園のもっと展開してきたのが、日本の回遊式の庭園ですけれども、例えば熊本では水前寺公園がある。これは典型的な日本の名園のいくつかの中に入ると言われているものですが、これも回遊式ですね。回遊式の庭園の特徴というのは、数歩歩いて立止まると景色がガラリと変わる。それからまたしばらく行って別な場所に

来ると、今までの景色を忘れて別なものがパッと浮かんでくる。ところがベルサイユの場合は、ズームレンズで1ヶ所からじっと見ているようなものであって、どんどんどんどん歩いても歩いても、軸線を歩けばほとんど景色は変わらないのです。変わらないけれども、変わらないということの強さというものはまた逆に響いてきますけれども、日本の場合はそういうような方向に持っていわずに、むしろ一個一個違ったものが順々に建ち現われてくる、その景色の違った光景の数珠つなぎの状態、それを組立てていったのが回遊式庭園なわけです。これはもしかすると、映画の手法と近いのかもしれない。映画の場合に、例えば違ったシーンを順々に重ねていって、最後に全体がまとまった体験として映画が見えてくる、というのが映画のやり方ですけれども、日本の回遊式庭園というのを、もし、人の歩いた位置をフィルムの1コマというように考えてつないでいくと、もしかすると非常に近いものになってたちあられる可能性があります。

実は、僕はなぜこの日本庭園の回遊式というようなものを例にとったかという、それは日本の田園の中で我々が見ていた環境、体験というようなものを、たまたま圧縮してそれを美的にひとつの空間の中に閉込めていったという、そういう役割をしていたのであって、やはりベースとしてはヨーロッパの人工的で幾何学的に対して、日本の田園的でかつ有機的という、そういう構成の違いというものがそこに見えてくるのだろーうと思います。そうした場合に、僕らにはひとつの矛盾があるのです。というのは我々が持っている、現在、都市を制御する手法、それから建築をデザインする手法、それから都市と建築との関係を組立てる概念、こういうものは全部ヨーロッパの都市の中から、生み出されてきたものばかりで出来ています。日本で、じゃあ、日本的なものが、かってあったからそれを使おうとしても、もうこれは今すぐ使えるような状態になっていない。むしろ木造であり、もっと柔かい瓦屋根や草葺の建物で回廊でつながったような建物も、もちろん日本の場合にありますが、これをそっくりそのまま、今この都市のこの状況の中で、日本的なものとして使うというわけにはいかない。そこでむしろ、我々がいま点にしているものは、ヨーロッパの遺跡像の中から生み出されてきた鉄やコンクリートや石というような手法で組立てられていく建築で、しかもその都市の文脈を解読する方法も、ヨーロッパの都市で組立ててきた概念しか使えないというような状態になっている。それを片一方で持ちながらそれを空間として広げていくとき、空間として編成していくときには、やっぱりヨーロッパの持っていたそういう建築や都市のシンタックスというか、構文の方法ではなくて、日本の構文、つまりそういう有機的な回遊性というふうなものを持ったもの、それが一番重要な視点になるのではないだろうかと思っています。

そしてそれが熊本の場合に、たまたまこういうすばらしいお城があり、その下を蛇行する川がある。それから周辺の丘や山の関係というものも、これもおそらく、僕まだ調べておりませんが、もし誰かが風水という中国以来の地形の読み方、それはある意味では、日本に家相術として入ってきているわけですから、この風水の方法です、この熊本の町を解いたら、もしかしたら非常にピッタリ合うように組立てられているのではないかという気が、僕にはするのです。これは僕のまだ直感であり調べておりませんので、何ともいい加減なことは、ちょっとこれ以上は言えません。

そういう地形や何かの特性を逆に生かしていくとすれば、やっぱり日本の伝統的なこういう手法しかないのではないかなあ、というのが僕のひとつの今の感じです。そうするとこれを、じゃあ、これからあとのアートポリスに向かって、町づくりに組立てていこうというときにそういう形態概念、あるいは都市の構成概念をどういうふうにとらえて、どういうふう処理していったらいいだろうか、というのはその次のまた問題になってきます。それはある意味では、点をひとつずつ町の中に、重要な点をはっきりさせていくことだと思うのです。これは碁の布石のようなものだと思います。布石がよければ全体の手がうまくいくというのと同じように、そういう肝腎のポイントをいくつキチンと押さえて、そこにより魅力的な建築を埋め込むことができるかと。

それがおそらく都市をもういっぺん編成するときの考え方になるだろうと思うし、その点をひとつひとつを順々に作っていくのが、建築家の役割だろうというように思います。そしてその1個の点に、もしいい建築ができると、この布石が働いて回りの環境というものがもっとうまく組立てられていく。あるいはいいものが次から次へとその周辺に発生していくという、そういう連鎖作用といいますか、連動する作用というものも、当然僕は期待できるだろうと思います。そうすると我々が考えていくべきことというのは、やはり全体の総括マスタープランというものをむしろ逆に排除しているわけですから、そういう1個1個の点を布石にしながら、あとは回りが変わっていくのを待つという、そういう手法がこの場合、一番いいのではなかろうかなあというのが、僕には何とか思えるのです。そのときに、もしこれが東京であるならば、違う発想を僕はするだろうと思います。東京というのは広がりは無限にあるけれども、その広がりとは物理的に広がっただけであって、システムとしては重奏しています。重なり合っています。もうそれで身動きならないぐらい重なり合いができていいるから、その網の目をどうやって解くかというのが、東京の問題点なのですから。これはちょっと今日は除外しまして、むしろ熊本の場合は、それが要するにもっと田園とさきき申しましたように、広がり

中で重層する必要もないぐらいの回りの空間というものを持っている場所だと思います。そうすると、一個一個の点というのは相互にヨーロッパの街区を形成していくときに、お互いに肩競合わせて建物が並んでいくという感じではなくて、一個一個が田園的なセッティングの中におけるのではないだろうか。それは田園的なセッティングという、ちょっといい言葉かどうか分かりませんが、回りにももちろん緑や水というものを導入できる。その中に建物が独立してある。あるいはもちろんそれが連続したものもあるだろうし、何か空間を取り囲むような建築でも出来るかもしれませんが、ただどいずれにせよ、都市をベッタリ連続した物理的な建物で、ヨーロッパの街区を埋め尽くすという考えではなくて、やっぱり田園的なセッティングの中に置かれていだろうと、というのが僕の感じているところなのです。それをそうするという事は、要素として建築が建築と建築の間に、おおげさにいうと間が取れるわけです。間が抜けると困るのですけれども、間を取りながら建築というものは配置できるというような、そういうシチュエーションがもしここで出来るならば、あるいは点と点というものを確実にその人間の動きや動作というもののつながりの中で、間合いをうまく配置できるならば、そうするとこれは非常に独特のネットワークがその中に形成出来るのではないだろうか、という気がします。

そうすると、いま一番考えていることというのはどういうことかという、おそらく92年に第1回の建築展というのをやることになります。それから細川知事は、それを4年ごとに繰返したいということをおっしゃっています。すると2回目は96年になります。それで3回目は2000年です。ちょうど今世紀いっぱいかかる間に、3回区切りがあるわけですが、おそらく今世紀の終わりになったときに、この町というのは今考えたような、非常に的確な布石をされた建築の集合で、一種のまったく今までの町と違ったようなネットワークが出来たらうと。それはおそらく古代や近世のローマのように、ピッタリと町がいろんな建物で埋まってその中にポツン、ポツンと教会が入っているというような感じとは違って、もうちょっと隙間があるのかもしれませんが。けど似たような形で普通の建築と特殊な建築、それからあるいは特殊な建築が次から次へと人間の目で迎えられるぐらいの距離で、そういうものがこの熊本の町の回りを埋めていく、ということができれば、これはちょっと世界にも希に見るような町になって、おそらく、大げさにいうと、フィレンツェやそれからエジンバラというような建築で町が有名になっっているような、そういう町と対抗出来るぐらいの現代の町というものを組立てられないだろうか、そういう気が実は、これはどんどんイメージとして希望が広がっている、期

待が広がっているわけですが、そういうふうになっています。それをいわば建築家が順々に、これに参加する全部の建築家、おそらく建物というのは誰かが設計するわけですから、その設計する建築家がみんな同じような意思で、意図で、そういうような形の理解をもしここで出来るならば、本当にやっとそこで初めて今までと違った町が出来るという、そういう希望を実は持っているわけです。日本の場合に、プラスの面もあるしマイナス面もあって何とも言えませんけれども、20年ごとにだいたい建物は建替えるという、お伊勢さんの伝統というものがあるのですけれども、町のコンクリートや鉄の建築もだいたい見ていると、20年ぐらいで変わっているのです。それは終戦後43年経っていますけれども。戦後3年ぐらいの間に出来たバラック建築が、だいたい60年代半ばのオリンピックの頃にいっぺん建て替わって、その頃建てたものをいま建替えかけています。20年単位で機能が変わってくる。それから耐用年限も来る。それから使い勝手とか、美的な状態も悪いというようになってくるとバーと壊して建替えるという、そういうふうにだんだんなくなってきているわけですが、これはプラスの面もあるけれども、我々建築家としてはもっとそれをいいものは残して、それで再利用しながらまた次を足していくというような、そういう方向に持っていければ、本当はこれが一番いいなあ、というようにも思います。この20年サイクルに、仮に20年サイクルという、急速なスクラップアンドビルトの状況というものを何か別な形で再編成するその手掛かりにも、またある意味では出来るのかもしれないし、それがずっと延々と将来伸びていくという、可能性というのはもっとあると思います。例えば、ちょうどたまたま私、今バロセロナという町で、今度92年にオリンピックがありますけれども、そのオリンピックのためのメインのスポーツホールというのを設計して、いま工事中です。これはスペインにしては、異例に早く、もちろんオリンピックが来るためですけれども、8年目、いまだ5年経っています。あと2年ぐらいかかるかもしれませんから、7年ぐらいの異例の早さで出来上がっていく。異例です。日本だと3年で出来上がっていたと思いますけれども。この町にはもっと強烈な暖かみのあるものがあって、皆さんご存じのガウディーの教会です。サグラダファミリア、これはちょうど100年ぐらい前に、ガウディーが加わる前にもう計画というのは出来ていたわけですが、彼が入って全部変えて、そして極々一部分ができた。その残りを今まだ工事中で、ちょうどガウディーが作ったと同じ量ぐらいのものをこの数年で作ったのですが、あとまだかなりの量が残っているの、どのくらいかかるかわからないという状態になっています。それからもうひとつ僕の経験で、ニューヨークにブルックリンという場所があるのですけれども、そこに美術

館がありまして、僕はそれの21世紀の計画というのをやっている最中なのです。これは2年前に国際コンペがありまして、私の提案したのが当選をしました。それで今その建設の段取りをやっているという状態なわけですけども。実はこのブルックリン美術館というのは、ちょうど1世紀前、100年前にアメリカのマッキーズ・アンド・ホワイトという設計事務所がコンペに当選して、一部分その計画で出来ました。出来たものを30年ぐらいかかって5分の1くらい出来たのですけれども、その残りをまた現代に合わせてもういっぺん再編成する、というのが内容でして、僕は応募して今仕事をしているわけですけども、この予定はおそらく向こう30年かかるだろう、最低いまのままでいってということになります。冗談におそらくもしこれが全部出来て僕が生きていたとしても、車いすでオープニングにこれりゃいい方だというぐらいの、そういう話をするのですけれども、何しろ平気で、今まで100年かかっているのだから向こう30年というのは軽いというぐらいの気持ちでいて、そういう計画を実際に行っているわけです。それに付き合ってみると、建築家というのは1件の建築を作る場合でも、場合によったらガウディーは中間ランナーだったわけですね。最初の人是谁かやって自分が受取ってやって、そしてまた死んでからあとはまた別な人が今やっているわけで、中間にちょっとやっただけですね。1件の建物をやるのにブルックリンの場合も前にひとつ出来上がったのがあって、幸運で僕が付き合ったられば出来るかもしれないけれども、僕も中間ランナーではあろう、というような気がします。それと同じように、町で建築を作る場合、あるいはひとつの町を作る場合といえどもっとこれは徹底していて、何百年も町は生きるわけで、

その中で一定の期間作業、仕事で付き合って、それまたもちろん残っていかない限り、こういう積上げというのはならないわけですけども、そこで中間的にその町と関わって町を作って、それでそれが改めてもういっぺん将来につながっていくという、そういう計画にもしなれば考え方としては、本当は参加している建築家たちもみんな一番いい状態になるのではないだろうか、しかも町の人々がそれを受けとって、建築というのはそういうものなのだと、スクラップアンドビルトではなくて、まさにその残せるものは文化しかないという、その一時のポリシーというか視点というのは、これはかなりなかなかの卓見であろうというふうに僕は思いますが、そういうふうにしてやっていくことが、初めて生活と文化とをつないで文化を作り上げていく手掛かりになるわけで、それをこれから、つまり我々だけでなく皆さんと一緒に作るという、そういう何かシチュエーション、それができれば本当に世界にも誇れるものになってくるのではなかろうかなあ、

というような感じをしております。それで微力ながらそういうことで、僕もこのアートボリスにお手伝いをするということにしたわけでございます。どうも、今日は下手な話でございましたけれども、お聞きいただきましてありがとうございました。

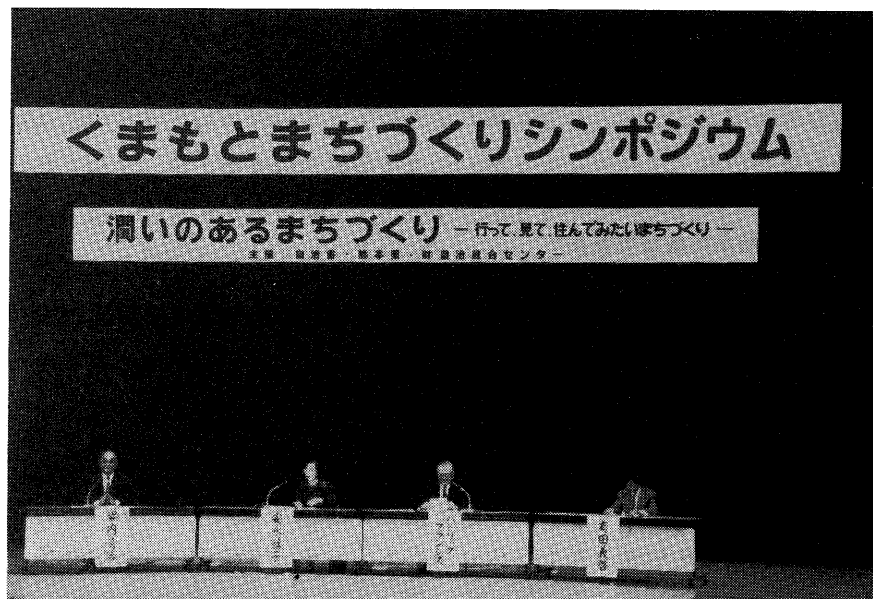
パネルディスカッション

●コーディネーター

堀内清治 (ほりうち・きよはる)
工学博士

熊本大学工学部教授。前熊本大学工学部長。

長年にわたり中近東、地中海地域の遺跡調査に従事し、1982年著書「地中海建築」3巻により日本建築学会賞を受賞。現在、熊本まちづくり協議会会長として熊本のまちづくりを推進し、熊本県文化財審議会委員としても活躍中。





●パネリスト

有田義啓 (ありた・よしひろ)

(有)有田 代表取締役

シャワー通りにファッション関係ショップをオープンし、シャワー通りのまちづくりに参画。現在、ファッション関係店舗3店をシャワー通りにて経営。

パトリック・フランシス

熊本マリスト学園校長

米国で教師生活の後、1957年来日。熊本マリスト学園校長として長年熊本に滞在し、熊本の教育、文化の発展に尽力する。

安永路子 (やすなが・ふきこ)

歌人・書家・熊本県教育委員長

熊本師範学校等の教諭を務めた後歌誌「椎の木」の編集・歌作を開始。多くの歌集及び著作を成し、県文化懇話会賞、現代短歌女流賞ほか数多く受賞するなど歌人・書家として活躍し、また教育界においても県教育委員を務め、1985年より熊本県教育委員長。

堀内 清治 座ったまま失礼させていただきます。今日はたいへん盛沢山なシンポジウム、講演会その他が行なわれましたが、これからはどちらかといいますと地元を中心として、これから先、熊本のまちづくりをどうしていったらいいのかということにつきまして、熊本におられる文化人の方、あるいは実際にまちづくりに大きな業績を上げてこられた方々のご意見を承る、というパネルディスカッションに入らせていただきたいと思います。

私はむしろ聞き役にまわるべきなのでございますが、話のきっかけということで少し日頃考えていることを、若干コメントさせていただきたいと思います。

先ほどの話にも、大分いろいろと出てまいりましたが、日本は近代化というものの模範生だというふうに、よく言われております。近代あるいは近代化というふうなものは、例えば、キャッチフレーズでいうとどういうことになるのだろうか、と思って少し抜出してみますと、例えば、科学主義だとかあるいは合理主義、あるいは機能主義、民主主義などというような様々な主義主張がたくさん、近代的な主義として出てまいりました。これは主として、日本では戦後のことではありますが、そういうことで日本はたいへん熱心に進めてきたと思います。日本の社会を動かしてきたものは、経済効率というものを主な柱として民主主義的な平等を実現するだとか、あるいはそういうことをやっていくために社会的な分業を進めていくだとか、そういうふうにして現在までの社会が出来上がってきたと、極々簡単に言えば、そういうふうに言えるかと思います。ただ、それぞれの主張というのはみんな正しいところを持っていると思います。どれひとつとして、これは困るというものはない。ただ全体として見ますと、何となく総合的な視点というものが欠けていて、全てがその単機能的になってしまっている。専門分野以外のことはよくわからないという専門家が集って、そしてそれぞれ自分たちが十分な機能を発揮すれば、全体として世の中はよくなっていくものだというような、いわばその科学的樂觀主義というのでしょうか。そういうふうなもので進んできたというのが、日本の今までであったのではないかと思います。例えば、まちづくりに関して言いますと、これもいろいろ問題がありますが、私たちが学生の頃から将来の日本の住宅問題というのは、公共住宅の問題だというふうに、よく聞かされてまいりました。それで公共住宅については、日本はずいぶんいろいろと努力をしてきたと思います。ただ例えて申しますと、住宅にとって日当たりが大事だ、というふうになりますと、先ほどの話にもありましたように、隣棟間隔ということが問題になります。そうすると等間隔に南向きの豆腐のような建物を建て並べてというような、そういう画一的な住宅、公営住宅がいたるところに

建ち並ぶという、そういうことになってまいります。それはそれで乏しい予算の中で、出来るだけ住みやすいことを考えて公営住宅を作っていくという、そういうことでは、いわば素晴らしい公営住宅が出来上がった。あれはひとつの傑作だといっていいのではないかと思います。しかし、その中に住んでいる人間はどうなのだろう、私も長い間、公営アパートに住んでおりましたのでよくわかるのですが。相当長い間住んでいると、夕方になって自分の家に帰ってまいるわけではありますが、普通といいますか、自分があたかもある棚の決められた所に、自分で入り込んで行くような、そういう印象を受けました。これは物や道具なら人間が片付けてやらなくてはいけないのだけれども、人間の方は言われなくてもちゃんと自分の引出しに入って寝ると、そういう感じがひしひしとしました。その頃人間阻害なんていうことが言われるようになりましたときに、自分がアパートで住んでいる経験から考えてみて、人間阻害ということを言いたい人たちの気持ち、痛いほどよくわかったように思います。よく出来た近代建築の中では、どうも人間は人間として扱われるのではなくて、パチンコの玉のように扱われている。こちら側を傾けると向こうへゴロゴロと転がっていく。そのひとつずつ転がっていくのが人間であって、その人間が途中で立止まりたいとか、あるいは後ろを振返ってみたいとか、ということあまり許されずに、どんどん流されていってしまうと、そういうふうな形にまちづくりというものが、作られていったような気がするわけであります。

ただ最近になって、少し様子がわりがしてまいりました。これは日本の科学技術が成長いたしまして、いわばもうらん熟というふうに言ってもいいような面が出てまいりました。そのおかげとして日本は、日本の歴史始まって以来の経済的繁栄を楽しむことが出来るようになりました。それと同時に国際化、あるいは情報化といった新しい情勢が、世の中に生まれてまいりました。そういうふうな、たぶんそういう影響を受けて、おそらく今までのエコノミックアニマルと言われてきたような、日本人の生き方に反対する性向というのが出て来たのだらうと思います。我々少し古い世代の人間ですと、例えば、自動車を買うときに、その車の性能を考えて買うということがありますが、どうも近頃の若い人たちは性能の善し悪しよりは、むしろデザインの善し悪しで車を買っているというふうな、そういう傾向が見えます。車といえば、ごく最近では自動車の売行きがたいへんよくなって、自動車のメーカーがみんな嬉しい悲鳴を上げているという話を聞きますが、さて、最近の自動車の売行きというのもやはり、日本の社会に今広がって来ている贅沢趣向というものに支えられている。安い車よりは高い車の方が売れるということになってきます。だんだんと日本人も贅沢を楽しみたい。贅沢を要求するというふうにな

なっている、ということが指摘されております。ごく最近読んだ雑誌では、この日本の自動車のデザイナーが、今非常に困っているというのです。能率的に良くする、あるいはエンジンの性能を上げるということについては、日本の自動車のデザイナーというのはたいへんな腕前を持っております。そういう方向で新しい事を、これをやれと言われればわかるのだけれども、ほんとうに諸外国と比べて乗り心地の良いといえますか、人間の贅沢さを満足させるような車を作れと言われると、何をどうしていいかわからないということで、自動車のデザイナーが非常に困っているというふうな話が出ておまして、これはたいへんおもしろい話だというふうに思いました。

我々が大学を出て世の中に出ました頃、まちづくりというふうな問題に関しては、重要文化財の保存ということが大きな問題になっておりました。重要文化財を保存するのか、あるいは開発をやるのか、というそういう話であったわけです。しかしここしばらくの間に、世の中はずいぶん変わってきたと思いますが、伝統的建造物群として街並み全部を保存してしまおう、あるいはそういう伝統的建造物群なんていうふうに仰々しく重要文化財として指定してもらわなくても、我々が大事だと思う街並みを守っていこうではないか。あるいは文化的資産として建築を保存しようではないかというのが、今年の建築学会のひとつのテーマになっておりました。そういうふうに昔の重要文化財指定保存時代から比べますと、文化的資産として建築を守ろうというのは、これはもうはっきりと時代が変わってしまったということを、強く印象付けてまいりました。

熊本県でアートポリスなどというものが提唱されて、そして本日のようなこういう盛大な催しが催されるということも、これはもう一時代前には考えられなかった状況であるのだと思います。人間がそろそろパチンコ玉であることに飽きて、いまや復帰を求めているそういう時代に入ろうとしているのだ、ということのように思います。そういうことを考えておりますと、今やもう時代はバリバリと音を立てて変わっていつているのだ、ということを感じてみるわけであります。

これは現在の日本の置かれている状況というものの外観でございますが、本題に戻しまして、潤いのあるまちづくり。あるいはここに行って、見て、住んでみたい町というものは、どんなものだろうかということを、これからの話のきっかけとして私が考えておりますことを、若干いくつかの項目だけを上げさせていただきたいと思いますが、まず、行って住んでみたいというためには、安心して住める町ということがあろうかと思えます。安心して住むために町を作る。これはもう人間が町を作り出して以来の念願でございます。今に始まったわけではありません。しかし最近では、安心して住めると

いうことの条件がだんだんと変わってまいりまして、例えば水の問題だとか、空気の問題だとか、あるいは交通の問題だとか。いろんな形で人間を脅かすものに対しても、やはり安心して住めるような町を作っていきたい、という要望がございます。ですからこの問題は、主として地域計画や都市計画に関わるというのが、ひとつの条件として上げられると思います。

2番目としては、その町へ入っていったときに、町の人たちが生き生きとして生きている町ということが、良い町の条件として上げられるだろうと思います。昔、地中海の調査に行ってアルジェの町を散歩しておりましたときに、写真屋の店先に見たことのない男の人の肖像の写真が飾ってありました。何気なくその顔を見たときに驚いたのですが、その目の輝きというのでしょうか。これはそのたいへんな人物だと。これは何かをやる人だろうと思って、その人物が誰であるかを知らずに日本へ帰ってまいりましたが、その頃から日本の新聞でもどんどん写真が出るようになって、その人がモハメッドアリというボクサーであるということが初めてわかったわけです。ああいうふうに生き生きと生きている人は、きっと何かをやる人だ。もし熊本の人みんなあういう目をして生きていて、そういう人が50万人も熊本にいたとすれば、おそらく熊本は世界を制覇するに至るだろう、という気がいたします。

アートポリスの狙いというのは、やはりそういう生き生きとした目を熊本に呼び戻そうというのが、おそらく県知事の本当の狙いなのだろうと思っております。これはですから町が活性的である。そういう事が住んでみたい町ということの大きな条件だろうと思います。

3番目は美しい町ということであろうと思います。美しいということは、街並みが美しい。建物が美しいというばかりでなくて、みんなが着てる着物もそれなりに美しい、あるいは使っている道具もたいへん美しいものだ、あるいは店へ買物に行き包んでくれる包装も、たいへん美しい包装になって良いと、そういうことであろうと思います。熊本はたいへん美しい自然ということで、これは皆さん方も大いに自慢なさっておりますが、考えてみれば、自然というのはどこでも美しいわけでありまして、私は生まれてからいまだかつて、美しくない自然というのを見たことがありません。ですから美しい町というのは、単に自然が美しい、美しい自然を守るというだけではなくて、美しい自然をより美しく見せるために工夫をこらす町と。そういうふうに言い替えていいのではないかと考えております。これは単に感性の問題だけではなくて、みんなが手に下げて歩きたいと思うような美しい包装を作ってくれば、熊本の商品というのはもっと売

れるのではないか。テレビで熊本の産品を東京や大阪で売っている様子が時々出てまいります。そのときに、熊本の産品を包んでいる包装がはたして美しいと言えるだろうか。つまりあれは、みんなに食欲をそそるような包装だろうか。たぶん現代では、みかんの味というのは畑で作られるばかりではないのだ、というふうに思います。したがってこの美しい町というのは、これはデザインの問題だというふうに言い替えることが出来るかと思っています。

4番目としては、やさしい町。やさしさを持つ町ということだろうと思います。例えば、目の不自由な人が歩いているのを見ると、よくみかけますあのいぼいぼのブロックを並べてお茶を濁すというのではなくて、みんな自然にその人の手を引いてあげると、あんなでこぼこのブロックなんか要らないのだというふうな、そういう町にする、していく。あるいは近所に火事があったら、消防署へ電話するだけではなくて、みんなでバケツを持って駆けつけると、そういうふうな町にしたい。あるいは若い人と子供と年寄りとが、お互いの主張とそれから価値観を理解し合って一緒に住めるような町。そういう町がやさしさのある町ということではないでしょうか。又、古い建物と新しい建物とが何の不自然さもなく並んで建っていられるような町、といったらいいのでしょうか。こういうふうなやさしさが形に現れているような町。これが住んでみたい町の、私が考える大きな条件のひとつではないかと思っています。

第四番目は心の問題ということになるだろうかと思います。前置きが少し長くなってまいりましたが、そういう町を作っていくためのハードの問題は、先ほどまでで一応あらかた済んだと思います。本日は御出席いただいておりますパネラーの方々には主として建築家ではない方ですので、そのハードの問題を離れて少し文化、あるいはソフトの問題について、いろいろと縦横に論じていただきたいと思います。と思っています。

まず最初に、パトリック先生はもう30年も日本にお住まいでございまして、アメリカ国籍の日本人と申し上げたほうがいいのかもかもしれません。長年に亘って、そういうどうしても比較文化的に御覧になっていらっしゃるでしょうから、先生の中から御覧になった熊本のまちづくりについての御意見を、まず最初に伺いたいと思います。先生よろしく願いいたします。

パトリック・フランシス 私、熊本に来たのは28年前です。その前は東京に2年間おりましたけれども、ニューヨーク市生まれ、育ちの関係で、正直言えば最初熊本に来たときに、非常に田舎のような感じがしましたがけれども、今まで28年間生活をしまして本

当に住みやすく楽しく生活できるのに、いつも感謝の気持ちを持っております。私が言いたいことは、この熊本県にずっといる人は自分で恵まれているという点については、ちょっと感謝の気持ちが足りないのではないかなあと思います。具体的に言えば、言うまでもなく空気が澄んでいて、回りの自然に非常に恵まれています。もうひとつは、今ちょっと堀内先生が言っておられましたけれども、熊本市内の治安が非常に良いです。安全です。夜でも昼でも町を歩いても危険性がないということは、もう本当に恵まれています。普通は熊本の場合には、当たり前と考えるかもしれませんが、本当に素晴らしいと思います。もうひとつ、恵まれていると言えば、医療施設が恵まれています。ニューヨーク市に居る場合には、例えば、交通事故にあって救急車を呼んでも、1時間以内に来るか来ないかわからないんです。どこの病院に連れていくかもわかりません。そういう方面で考える場合には非常に良いですけども、熊本に居る場合には人間性は非常に良い点がいっぱいありますけれども、何かこの、私が外国から来ているからかもしれないんですが、話によると、熊本県の方は外部から来る人に対しての最初の歓迎が、非常に冷たいように感じます。肥後もっこすということをよく言われておりますけれども、何回話を聞いて、説明を聞いても、さっぱりわかりません。どういう意味かはわからないけれども、何かこの熊本に来て、この地域社会に入ることは非常に難しいような感じがします。年が経つと友達づくりは、素晴らしい友達はたくさんできるけれども、非常に時間がかかります。

もうひとつは熊本の場合には、今からの発展するまちづくりのことを考えた場合に、ちょっと気になることは、何か足を引張ると言いますか、出る釘は打たれると言いますか、若い人を育てないような感じがしないでもないです。最近ちょっと良くなっておりますけれども、日本中の話を聞いても例えば、県外の人と県内の人と話によると、県外の場合には若い人には、やれ、やれと勧めるようなケースが非常に多いですけども、どうも熊本の場合には、何かするな、するなと押えるような感じがしないこともないです。今現在と将来のことを考える場合には、どう考えても若手の連中が元気いっぱい出して、精一杯協力し、努力しないとどうにもならないから、もうちょっと若い人が育つように考えなければならないのではないかなあ、と思います。熊本は今現在のことを考える場合には、非常に矛盾するような感じがしないこともないです。何故かという、非常に進んでいる点もあれば、非常に遅れているのもあります。例えば、最近電線を地中に入れることをよくやっておりますけれども、そう言いながら下水はまだ50パーセントが出来ていないのです。素晴らしい施設を作ってもそこまでの足がないのです。中

心街では街灯あっても、ちょっと中心街から離れたらもうライトはぜんぜんないという所がある。非常にすぐれている点があるし、同時に同じ町の中に非常に遅れている点があります。そういう意味で、今日の議題は、潤いのあるまちづくりというのが議題ですけども、この潤いのまちをつくると言えば、まちがある程度まで出来てから考えるべき点があるのではないかなあ、という感じがしないこともないですけども、まちが今から発展しようと思えば、もう少し我々の日常生活に必要な基本的な設備を、もう少し完成しなければならないのではないかなと思います。今日のまちづくりの話は、非常に私は関心がありますけれども、基本的なことでひとつ忘れていけないと思うのは、町は人間の住むところです。全ての計画は、人間のためになるかならないか、人間が利用出来るか出来ないか。使いやすいかどうかということは、それが一番基本的なことじゃないかなと思います。最近は何でも技術的な工学方面で進めていますので、電子工学の発展のことも含めて考えると、理科方面、工学方面で進めれば非常にいいですけども、途中で人間を忘れるとどうにもならないと思います。その点について、まちはどういうものかという、人間が集ってからまちを作ると 생각합니다。まちを建物を作ってから人間を入れるということはありません。人間を中心に考えるべき点があるのじゃないかと思っています。

もうひとつは、日本の場合には、歴史、伝統、文化は非常に古く、もうすばらしい宝物がたくさんありますけれども、何か新しいものを作ると同時に、昔のもの、大事なものは残すような心が、ちょっと足りないのではないかなと思います。我々外国人とは考え方が違うということかもしれませんけれども、日本と外国は何が違うかという、日本の場合には、まちを作るということは新しいものを作るということであり、現代的なものを中心に考えるのですけれども、我々ももちろんそういうこともやりますけれども、それよりもまちを残すということは、昔のものを大事にするということ、非常に真剣に考えます。例えば、ヨーロッパの場合には、皆さん行かれたことがあると思いますけれども、フィレンツェやローマやギリシャのアテネでは、昔々のものが非常にすばらしく残してあります。アメリカのニューヨーク市の場合にも、下町のグレニッジヴィレッジでは新しい変わった建築は絶対許せないとか。昔の環境が残るように、非常に厳しくやっております。言いたいことは外国の場合には、古いすばらしいものがある場合には、その外形は残して内部を住みやすいように改築しますけれども、外形はぜんぜんタッチしないわけです。残して、使いやすいようにということを考えますけれども、日本の場合にはすぐ壊す、壊すということになるようになっており、非常に残念な感じがします。

もうひとつは、我々がこの町ということを考える場合に、町といえば我々住民の町です。我々の町です。日本の場合には何と言うか、行政の町です。何でもすぐ陳情に行きます。市役所か県庁に。何でも頼もうと。何か町に住んでいる人は、もちろんこの行政の援助と補助がないと大きいことが出来ないことは十分わかりますけれども、町に住んでいる人の力の範囲内で出来るものは、たくさんあると思います。どんなにか私が気になることは、日本と外国を比べて我々が外国に家を作る場合には、家の前の道路に面しているところには大きい庭がだいたいあります。この庭にはぜんぜん塀がないです。芝生と花と植木を植えて、皆さんが見るために、何か町全体の風景に協力するために、それほどたいしたお金も要りませんけれども、しかし全部オープンにします、日本の場合には、本当にたくさんお金をかけて、すばらしい庭、日本の庭を作りますけれども、出来上がってからすぐ塀で囲んで誰にも見せないようにします。部屋に入らないと見せないということで、何かみんなのものというよりも自分のものです。これはもう少しオープンにしてみんなシェアするようになると、非常にありがたいのではないかと思います。例えば、最近は大運動、みどり運動というのをよくやっておりますけれども、みどり運動は全部、市か県でやっております。植木は全部植えます。しかし地元の人が少なくとも水かけといいますか、手入れといいますか、ある程度までやればよいと思いますけれども、最近は何れも、草取りから水かけも市役所に任せるようになっております。例えば、青少年育成関係の環境づくりのことは非常に社会教育といいますか、人間の、この町に住んでいる人間の大事な責任だと思いますけれども、最近は何れも教育委員会か、いま安永先生がいらっしゃいますのでちょっと言いにくいことですが、警察か学校が何かやっているというふうに、地域社会の責任感はこの町に対しては、ちょっと薄くなっているような感じがします。

もうひとつは、例えば文化関係の行事といいますか、団体といいますか、施設といいますか。何か皆さんの協力、はっきり言えば寄附金といいますか。ほとんど日本は関心がないです。最近おかしいと思ったのは、体育関係の施設を利用する場合には、わりあい金額が安いですが。しかし文化面で、普通の施設を使う場合は非常に高いです。例えば、市営プールに行く場合には、50円か100円しか取りません。しかし美術館に行く場合には、900円も取ります。これはちょっとおかしいのではないかなということを感じております。あとでいろいろと話がありますが、最後に言いたいことは、外国の場合には、文化施設などを作る場合には免税制度がありますので、すごい寄附金が集まるようになっております。実際私は細かいことはあまりわかりませんが、話によ

ると、そういうために寄附金を出す場合には、自分はいくらに経済的に損しないらしいです。場合によっては有利な点もあります。そういう関係で外国の方は、非常に認めております。例えば、ニューヨークの場合には、メトロポリタンミュージアムのすばらしい美術館がありますけれども、私が知っている限りでは、国か市の、州の援助はいくらにないと思いますが、ほとんど寄附金ですばらしいもの、もう考えられないくらいめづらしいものが集っております。ニューヨーク市の場合にも音楽のメッカとです。県立劇場も本当にすばらしいですけれども、リンカーンセンターには3つの大きい劇場があります。本当にすばらしいです。それは建築費は全部寄附金です。そういう点で本当に文化の町を作ろうと思えば、大蔵省に相談しないとどうにもならないかもしれませんけれども、もうちょっとみんな気持ちよく、この経済的な面でも援助できるような組織を作らなければならないのではないかと思います。

堀内 清治 どうもありがとうございました。パトリック先生のお話は、熊本にはいろいろと美しい自然があり、治安がよくてたいへん安全な町であるけれども、一面また住んでいる人たちには、特に初対面の人に対して人見知りをするとか、あるいは若い人たちの力を十分発揮させるようなことに欠けているのではないかと、というような御指摘があったと思います。それから熊本にはまだ、人間が本当に人間らしく生きていくために、必要な基本的な施設で不足している部分があるのではないかと。このへんをもう少し充実していくべきであろう。またそういうときに、日本人はすぐ古いものを壊して新しいものを作ってしまう。古いものを残しながら新しいものを作っていくという、そういう努力をもっとやるべきではないか。それから最後に町というのは、我々の町であって行政の町ではないのだと。だからみんなで作れることは自分たちでやろうではないか、という御指摘があったと思います。それから良い町を作っていくためには、いろいろお金がいる。日本ではそういうところへ寄附金が入りにくいことになっている、というふうな御指摘もございました。それでは引き続きまして、有田さんに。有田さんは先ほどの御紹介にもありましたように、シャワー通りでまちづくりに参加しておられますので、そのへんの御経験も踏まえていろいろお話をいただければと思っております。有田さん、よろしくお願いします。

有田 義啓 私の世代よりもまだ若い人の世代の代表ということで、一応今回出させていただいているのですが、シャワー通りに行きまして、まだ名前が付いていなかっ

たのですが、12年前に店を出したわけなのですから、その当時は、あの通り自体あまり良い、もうご存じだと思いますけれども、あまり良いイメージの通りではなかったのです。と言いますのは、昔で言います赤線と言われていたところが回りにたくさんありましたから。でもあまり自分としては、そういうのを感じてはいなかったのですけれども、デメリットとしては感じてはいなかったのですけれども、そういった世代の人たちが少しずつ集って来まして、最初は通りからは近いのですけれども、なかなか来るまでちょっと遠いという意識がものすごく強かったものですから、最初だいぶ苦労しました。それで今から9年ぐらい前だったと思いますけれども、4、5人で近くの喫茶店に集って、町の通りに何か名前を付けたらどうですか、という案が出まして、一人の人が、シャワー通りというのはどうですかと言う。じゃあ、それにしましょう、ということになって、それが通称としてのシャワー通りという名前の始まりだったのです。今となつてはタクシーに乗っても、シャワー通りお願いしますと言えば、タクシーの運転手さんも、どこのタクシー運転手さんもご存じ。それだけ市民権を得てきたわけです。

僕が東京に通い始めて、18のときに東京に出たのですけれども、それから定期的に東京に通い始めるようになりまして、東京に行って帰ってきて客観的に東京を見てみると、最近では企業が持っているようなショールーム的な存在になってきたと思うのです。それでこれからは熊本にもチャンスが出てくるのではないかなあ、という考え方の方が段々段々、年を追うごとに強くなってきました。人の気持ちにインパクトを与えるというのは、最初は東京の方が自分の年代も若かったですし、それから受ける印象度がものすごく強かったものですから、東京の方の頭が80%、熊本での考え方が20%ぐらいだったのが段々段々変わってきました、熊本で考える頭の方が80%ぐらいになってきたと思うのです。先ほど磯崎さんの話にもありましたけれども、ちょっと乱暴なように聞こえたのですけれども、マスタープランはいらないのではないかな。自分もそのような考え方が、性格的かもしれませんが、ありまして、とにかく何か自分たちが少しコツコツ、コツコツやっていたら、それから自然に何か広がっていくエリア的なものが、生まれてきはしないかと。シャワー通りもそのひとつだし、今では上通りもそうですし、これからはいろんなほかのエリアも発展していくと思うのですけれども、最初はそれを考えて、どんどんやってきたわけではないのですけれども、そういう発展の仕方というのもおもしろいのではないかと。いろいろ何かこう案を考えてやっていると、結構何か失敗というか、結果的には失敗したりするケースも、自分でも数多く経験しておりますし、そういう面では先ほどの意見にはものすごく賛成だったのですけれども。それで熊本を見て

いると、僕たちの世代でも海外に出掛けていく人が、ものすごく多いわけですが、海外に出掛けて行って、それで回数をこなした人の話を聞いてみると、最初は海外に憧れてもちろん行くのですけれども、それが段々、段々平均的に冷静に海外も見れるようになって、熊本も冷静に見れるようになって、熊本の良いところをどんどん話すようになった。僕たちも東京に行って友達と話すときにも、熊本に住めて自分たちはいまの、現時点ではいいなあと思うし、これからもそういうふうに思えるように自分たちでも努力をしますし、いろんなところに出て行ってそれを熊本流に直していけば、かなり良い線いくのじゃないかなあという。それと町の中の建物のことですけれども、テナントビルというビルがありますけれども。これも一般的かもしれないけれども、テナントビルに良いビルはないのじゃないか。やっぱり何か商業的だとか企業的だとか、そういう言葉で済ませてしまえば一番便利で、一番良いようには聞こえるのですけれども、それはあくまでも営業主の方の都合で生まれてくるビルではないか。これから先であればもうちょっと違った考え方で、ビルはビルでいいのですけれども、違ったイメージの、例えば、建て方であるとか。いまはだから空気だとか、空気の流れ方だとか。そういう漠然としたものの新鮮さ、何かそういうものが、言葉では自分でもはっきり言えないのですけれども、そういうふうに人の気持ちも流れていくし、人の足が流れていくと思うのです。そういうところにいろんな年代の人達が通えるようになればいいと思います。いろんな年代の人に聞くと自分の行くところがないと言われます。昔よりはもちろんいまの方が、たくさんそういうのがあると思うのですけれど、段々ないものねだりというか、そういうふうになっていきますので。ひとつ手に入れば、実はもうひとつこういった種類の場所はないかとか、そういうのがたくさん出てくると思うのですけれども、それがどんどん発展する原因になっていくと思うのですけれども。それはそれでいいと思うのですけれども、そういうものを何かこう、結構燈台もとぐらしというか、自分ではたくさんあるように思えてしょうがないのです。だからそういったものを僕たちは、そういう行政面にどんどん入っていくということがなかなか不得意であるし、だから自分たちのエリアの中でエネルギーを出して、それを助けてもらうとか。そういうふうにいけば年齢的な差というか、そういうものもなくなってくると思いますし、これからの熊本もどんどん住みやすくなっていくだろうし、楽しくなっていくだろうし。それは言葉ではなくてビジュアル的にも、そういうのがどんどん年を追うごとに見えてくると思うのです。昨日もいろいろ考えようかなあと思ったのですけれども、まあ、話しているうちに何かが出てくるのじゃないかとか、そういった考え方で先ほどメモをずっとしまし

て、それでいまお話をしているわけです。10年ぐらい前と今という、若い世代でももうまったく違うという、ものすごくパワーがあると思います。そのパワーをせっかく今ぐらいのパワーがついてきたのですから、今の時代というのをバネにすれば何とか評価も受けてきていますし、日本の中では、ほかの地方都市とはちょっと違う、地方都市のイメージは出来上がっていくと思います。僕が最近感じた、10年間ぐらいで感じたことは、うまくは話せなかったのですけれども以上です。

堀内 清治 どうもありがとうございました。12年ほど前に、シャワー通りに出店した頃には、あのあたりはあまり良いイメージの通りではなかった。しかし、そのシャワー通りという名前がついて、それ以後そういう名前が普及していくにつれて、その町が発展していったということで、これは単にネーミングの問題ではないと思いますけれども、町の名前をつけるということも、これはまたたいへん重要なことだという、そういう印象を受けました。マスタープランなんていうのはなくてもいいんだと。一步一步、一步一步進むごとに次の視野が広がってきて、そうして仕事というのは広がっていくものだという、そういうことで、先ほどのまちづくりに関しても、マスタープランを持たないまちづくりという、そういう考え方もあるのではないかと、そういう御指摘があったと思います。それから空気の流れに従って人が流れていく。その空気の流れが読めれば、熊本の町は更に活性化していくのではないかと。10年前と違っていまの若者はたいへんパワフルである。これは熊本がほかと違ったユニークな地方都市になっていくということについて、明るい見通しが持てるのだ、というふうな趣旨の御発言だったと思います。それでは最後になりましたが安永先生、ひとつ御意見をお伺いしたいと思います。

安永 路子 安永でございます。いま有田さんからたいへん若々しいお話で、やっていけば何かが見えてくるという、本当に若者でなければ発想出来ないようなお話でございました。私はこの度のアートポリスという、名前を見ましたときにちょっとドッキリいたしましたして、これ以上町が芸術的になったらどうなるかな、住めるかな、という不安があったわけですが、考えてみますとたとえアートポリスであっても、日本のアート、日本の芸術、それは決して先ほどお話がありました、バルセロナのガウディーのようなアートではないということを思います。そうすると熊本もまた日本の一般的なアートじゃなくて、熊本の芸術、アートであろうと、そう思うとちょっと安心するのですけれども、もともと熊本は先ほどお話がありましたように、どうしても変えられない水と

いとか水流があります。白川と坪井川と井芹川と、この3つの川の沖積地が熊本の町を形作っております。そうするとこれは加藤清正公以来変わらないわけですが、それに沿って町が出来ていくのではないか、そこにやっぱり熊本のアートというものも出来ていくのではないか、ということを考えました。ただ私は最近、西域の方にちょっと旅をいたしまして、これは砂漠の町でございます。この砂漠の町では、ウルグイの人たちが約60%住んでおまして、非常に簡素な家に住んでおります。土地も全部自分たちの住んでいるところの泥をレンガに作りまして、それを積み上げています。あそこは年間の降雨量が17ミリだそうで、1センチとちょっとしか降らないから、ほとんど降雨量がないところなのですね。そこで住んでいる人たちですから、まったくこれは雨のことを心配しなくても住める。そういうところで自分たちの泥で作った家で、これは街並みが風化していくのと一緒に風化していく。でまったくその差がない。これが非常に私は安心感があるのではないかなあ、という気がいたしました。お隣の家が壊れる前に自分のところが壊れるなんていうことはないの、一緒にこれは住んでいける。そういうところから何か共同体がしっかり出来ているような気がして、たいへんすばらしい町だなと思ったのです。日本の場合も中世の頃に、狩野派の絵の中に、洛中洛外図というのがございまして、1枚の屏風の中に、京都の町の人たちの生活をいっぺんに書込んだ屏風の絵がございまして、これはまったく遠近法を無視して、遠いところの男の顔にはちゃんと髭が書いてありますし、やっぱり女の人には赤い唇がちゃんと書いてあって、まったく遠い方も手前の方も同じようなタッチで書いてある。これはまったく平等な書き方であって、それが新しく起こってくる京都の町衆の心意気を、出しているような気がするのです。そういうような平等な感覚、これが非常にこれからの街づくりには、大事ではないかと思いました。それで先ほど公の面と私的な面という、磯崎さんのお話がありましたけれども、公私の面となりますと、昔は支配者が公であって、支配される者が私であったかもしれませんが、今は社会的なものが公であって、個人的な生活が私的な生活である。そうすると公的なものが表面に出て、つまり公の社会的なものが表面に出ていて、その裏の方に自分、個人的な生活がある。これは日本人の二面的な性格で、晴れと曇りということになりましょうか。表向きはきちんとして、そして裏の方では好きな暮らしをし、自由に暮らす。先ほどパトリック先生がおっしゃいました、外装は昔のままを残しておいて内装でうんと変えて、自分の生活を楽しむと。これとまったく同じだと思います。有田さんがおっしゃいました、良いものが段々壊されていく。残さないと。そういうことで、私の思います街づくりでは、表面、例えば、小さな町であっ

でも、日本の町はあまりにもその建て方が、でこぼこが多すぎるような気がいたします。足下が街並みに沿ってすうっと並んでいたら、とてもそれだけでも安心してきれいなじゃないか、つまづかないような感じがする。それでいて中に入りますと、それぞれの生き方で自由なインテリアができる。そんなところで存分に自分の自由というものを、個人的なものを満たしていく。そういうふうな街づくりが3つの川の流れに沿って、どちらを向けば良いかということは、自ずからこれは川に向かっていくでしょうし、それが大きな基礎になって、それだけで熊本の町は、大きな特色が出来るのじゃないか。例えば、お城の前に柳がブラリとこう植えられまして、非常にきれいな町が出来ました。あれなんかも柳というのは、日本には非常に多いわけですがけれども、あの柳の下にいて、恋人にこんなことを言います。「柳の下でお待ちあれの、人が問えば、人問えば、楊枝作ると、おじゃれのう。」、という言葉がございます。柳の下で待っていてください。もし人が、何でそんなところに立っているかと言ったら、柳の枝で楊枝を作るのだから、だから私はここで立っているのだと、答えてくださいと。そういう話がございます。柳一つにもそういうロマンが残っていくわけで、こういうようなところに何かそういう、昔からのいろんな恋物語や何かが残っていてそして柳があれば、それがひとつの潤いになってくるようなそんな気がいたします。それで日本人のアートといえば、私はやっぱり簡素だと思うのです。少しひもじくて少し貧乏で、ちょっと足りない。それくらいのところで満足していくことの方が、何か日本人にはふさわしいような気がいたします。そうすると非常にものすごく大きな建物が建って人目を引くよりも、いつもしっとりと落ち着いていて、そこで安心して町が歩けるような、何かとげとげと胸に刺さってこないような、そんなアートもあっていいのじゃないかと、そういうことをいつも考えます。江戸時代の儒学者の中に熊沢蕃山という人がおりまして、この人が既にそのころ水土論というのを出しております。これは水と土の論でございます。水土論、これは水と土がきちんとしていけば、日本は良いのだという話で、非常にこれは当時の卓見だと思えますけれど、やはり熊本は水と土だと思います。そこから緑も生まれて行きますので、熊本の川の流れを大事にして、それに沿って私たちも生きていきたい。そんなことを考えております。歌を作りますから、どうしてもこの水や土がなくなると困りますので、そんなことを考えるわけです。以上でございます。

堀内清治 どうもありがとうございました。アートボリスでこれ以上芸術的になったらどうするのだろうという、そういう御質問はちょっと私もドッキリいたしました。熊

本のアートという、そういう熊本独特のアートというものが育っていくならば、ということをお永先生がおっしゃいましたが、例えば、お城の前の柳の木。これはそういう古い歌があってなお趣が増してくる。ただ水辺に柳の木が生えていれば、それでどこでも同じような考えが浮かぶかという、必ずしもそうではないということだろうと思います。ですから先ほど、美しい自然をより美しく見せるためにという、そういうことをちょっと申しましたが、例えば、古いそういう詩からとか、それから古い美術などというものも、これは我々の自然をより美しく見せるためのひとつの手段だというふうに私は思うわけであります。それでその柳の木が、3年経って帰ってきてみたら切られていた、ということになるではやはり困る。町の中に建っている建物、あるいは町の中にある樹木というものも、これもまたある程度その永続性がなければいけない。先ほど、最近建物が20年ごとに更新されていくという話がございましたが、20年ごとに町の中がすっかり更新されていくということでは、本当の町にならないのではないか。昔、江戸時代の人がこのように言った。その柳の木は今でも生えているよということが、熊本らしいアートということになるのではないかと、いうふうに思いますが。お三方の一応の御発言が終わりまして、他の方々の御意見をお聞きになったうえでちょっと言葉が足りなかったとか、あるいはもうちょっと補足して、ここのところを申し上げたいというふうなことがございましたら、補足をお願いしたいと思いますが。パトリックさん、いかがでございますでしょうか。

パトリック・フランシス いま安永先生は、このアートポリスの名前を聞いてびっくりしているというような話をされておりますけれども、アートポリスの名前を聞いたときに、私は別のことを感じました。最近は何でも英語の言葉か、ギリシャ語の言葉を使って名前をつけるような傾向があります。グリーンピアとかグリーンピックのように、何かわけのわからない言葉になっていますが、私は我々住民みんなが関心を持つために、わけのわからない英語の言葉を使うよりも、日本語のはっきりする言葉の方がみんな関心を持つのではないかと、いうことを特に感じております。何かあこがれというか、ブランド商品みたいになっておりますので、もうちょっと日本語を大事にする方が良いのではないかと、感じております。もうひとつは、日本一づくり運動を今現在やっております。特に熊本県も盛んに行なっておりますけれども、今から何か作るということよりも今日本一か世界一であるものを大切にする心の方が大切じゃないかと思えます。ひとつは水です。特に江津湖の湧水は、本当に資源としては恵まれております。しかし大事

にしていないのではないか、という感じがします。外国、日本でも同じですけども、中央公園といいますか、大きい公園が町の中にありますけれども、熊本はないということとはさびしい感じで、江津湖を本当にもうちょっと整理すれば、本当にすばらしい町全体の中央公園になる見通しがあると思いますので、その点について何かもうちょっと、大切に、大事に発展するように考えなければならないのではないかと思います。そういう関係で、何か今までのことを考えると、何か長期間の計画といいますか、総合的な計画性といいますか、県全体のハーモニー、調和といいますか、そういったものが足りないような感じがします。例えば、この熊本市内は文化の施設や体育の施設を作っても、体育館は上熊本に県の体育館があり、水前寺に市の体育館があり、運動公園は離れているところにあるというように全然バラバラになっております。一緒に使う計画はひとつもないんです。本当にすばらしい施設です。しかし大きな大会をする場合にはひとつじゃ足りないから、その場合まとめて使えるようにするべきだと思います。例えば、この県立劇場は本当にすばらしく、隣のコンサートホールは、日本の3大コンサートホールのひとつに入っているような話をよく聞きますけれども、しかしこの県立劇場と市民会館は全然離れております。それと今我々がいる県立劇場は、本当に施設はすばらしいですけども、回りに食堂もないしホテルもない。すると夜来ると帰るときには、本当にさびしいです。自分で車の運転ができない場合には、交通の便が本当に悪く、総合的にもうちょっと何か考えれば、本当に良いのではないのかと思います。

もうひとつは、今日はちょっと悪口ばかりになって申しわけありませんけれども、熊本の県立美術館は本当にすばらしいものです。しかし、僕の考え方は違うのかもしれないけれども、美術館を作るときには、すばらしい物を集めてみんなに見せたいという気持ちで、美術館を作ります。熊本の場合には先に箱を作り、あとで何を入れるかということはわからないままで、きれいなものが出来上がっております。それは料理も同じだと思います。熊本の料理は、おいしいものを出し評判になってからきれいに作るというんじゃないし、最初にきれいな箱を作ります。きれいな箱を作ってからもう何でもいい、食べられる程度までのものを作れば、特別おいしいものを作らなくてもいいということになります。何か基本的な計画といいますか、立派なもの作る前に先ず中身を作り、中身を大切にすることが重要だと思います。県立劇場は本当にすばらしいものです。外国のすばらしい団体が最近来ております。ロンドンフィル、ベルリンフィルというもう本当に一流の音楽の演奏会がありますけれども、残念ながら入場料が1万円、1万2、3千円ぐらいになると、そんなにすばらしい音楽会をやっても、結論から言えば

半分ぐらいは空席です。入場料が高すぎます。すばらしい劇場を作って、すばらしい外国のもの、日本のものでも同じですけれども、もうちょっと入りやすいように、みんなが聞くことが出来るように考えた方が良いのじゃないか、ということをいつも考えております。

堀内清治 どうもありがとうございました。有田さん、何かございませんか。

有田義啓 今先生の方からハーモニーという言葉が出ましたけれども、昔のものと今の時代からこれから先のもの、それらのハーモニー。例えば、それがどっちかに偏ることもなく、何かそういうバランスみたいなものを感じます。あとは自分で考えるときは、エリアのことをすぐ考えるのですけれども、熊本はまだまだ、自分にとってものすごく広く感じるのですけれども、そこでいろんな方々が夢の持てる物語を作っていけば、今週の休みはあそこに行こうとか。家族で行ける所だったら今度はあそこに行こう。1人でこっそり行きたいところもあるかもしれない。何かそういう自分の行動範囲の中で、1年ぐらいのスケジュール立ててみたらけっこう退屈しないとか。何かそういうふうなエリアづくりを、それが10できるのか20できるのか、それはいろんな方々が夢を持って作っていけば、以外と早くそういうのは出来上がっていくのじゃないか、という気がしました。

堀内清治 どうもありがとうございました。安永先生、いかがでしょうか。

安永落子 別にそんな申し上げることもありませんけれども、今私がいつも季節の度に思いますのは、熊本の町に桜の花が非常に少なくなったということなのです。それで例の御幸坂の桜が、桜は30年ぐらいでダメになっちゃうので植え替えて、今のところまああまあの育ち方をしていますけれども、あういうように桜だったらここだ、というようにすごいところがあってほしいと思います。健軍の通りがありますけれども、もう少しあちらこちらに、非常に濃厚な花の場所があったらいいということを感じます。江津湖がたいへんきれいになりましたけれども、私が砂漠の町に行きましてびっくりしたのは、敦煌はオアシスの町でございます。オアシスといえばヤシの木が5、6本生えて、チョロチョロと水が出ていて、らくだが水を飲めるくらいのオアシスだと思っておりましたら、20万の市民がそこに住んでおりまして、敦煌のど真中に祁連山という、

始終雪を戴いております雪山の雪解けの水がそこに引かれていて、本当にものすごい水量でそこに大きな泉水ができていて、湧水が湧きかえっております。これが砂漠の町かと思って本当にびっくりいたしました。それで砂漠であっても、例えばゴビ砂漠を渡りましてそこでは地下40メートル底には3千本の地下水溝が流れていて、いつでもそこにつるべを降ろせば、古い話だけれども、つるべを降ろせばきれいな水が汲み上げられる。まさに地球は火というよりも水の惑星だという感じがしてまいりました。それならばそういう水の惑星とでもいえるようなすばらしい惑星に住んでいるのだから、もっと存分に花でも植物でもたっぷり植えて、そして桜の花、桜の木1本があれば、親子4人その下で暮らせばいいじゃないかと、そういうふうなひとつの限定的なものですけれども、そんな思想というものがあって初めてやっぱり熊本のアートポリスはできるのじゃないか。根っ子にどういうものが芸術かという思想がなければ、ならないような気がいたします。そういうことを考えております。

堀内清治 どうもだんだんと話が難しくなっていまして、どういうふうにまとめていったらいいのかよくわかりません。いくつかのいろいろ考えなくてはいけない問題が、たくさん提起されていると思います。ひとつの問題としては、水と緑と今の花の問題。あるいはこれは水と緑というのは、県でも市でも今まで努力してやっておりますので、いま改めてここで取上げるという必要は、あるいはないかもしれませんが、花を植える。あるいは柳を植えるにしても、それが1ヶ所だけ、1本だけ植わっているということではなくて、それが1つのエリアとしてそこに何かの物語性がある。そうして町の人たちが共有の財産として、そういうものを楽しむことが出来るという、いわば街づくりの中のストーリー性といいますか、物語といいますか。こういうものを作っていくその上で、水や緑やそれから花を、それと一緒にさせていけばいいのではないかというふうにも考えられます。それからもうひとつは、熊本の街づくりに対して、若いパワーをもう少し、若い力をもう少し街づくりに活用させていく、活用していくためにはどういう手立てが必要なのだろうか。あるいはパトリック先生のお話の中で、どうも日本人、特に熊本ではいろいろ立派なものをお作りになるけれども、みんなそれぞれバラバラであって何か長期的な計画というのがないのではないかと、というようなお話もありました。それぞれ大事なテーマであります。そういう中で、我々住民として何をやっていけばいいのかという、そういう話になろうかと思いますが。熊本の街づくりに対して若いパワーを引き出すということについて、何か御意見がございますでしょうか。どなたでも結構

でございますが。有田さん、ヤングジェネレーションを代表して、こういうことをやりたいとか、そういう御意見がありましたら何か。

有田義啓 若い世代の中にいたらいたで毎日そういうパワーは感じているわけですね。ですから、そういう若いパワーはいろんなところに、たくさんあると思うのです。それを何かジョイントさせる役目の人というか、そういう人たちがたくさんいてくれたらだいぶ助かるのではないか、という気はします。

安永落子 例えば、町の中にいつも静かな、あんまり大きい音だとこれは騒音罪になるでしょうから、新しいシャワー通りなんかには微かなひとつの音楽が流れているような、そういうことをお考えになったことはないですか。

有田義啓 いや、例えばそういうアイディアが出てくれば、それをまた真剣に考えて良いと思うのですよね。とにかく結果的には失敗になるケースもあるかと思いますが、でも、どんどん前に進んでいって良いと思うのです。今言われたことは良いアイディアだと思いますので、それを一度みんなと話し合ってみます。そういうふうに通りに音楽を流しているところだとか、一度僕はそこに行ったことがあるのですけれども、聞こえるか聞こえないかぐらいの音量だったのですけれども、ものすごく気分は良かったです。その通りにたまたまマッチしていましたから。

安永落子 何か町というとみんな黙っているでしょう。パチンコのお店だけがガーガーやっている・・・。

パトリック・フランシス 私がニューオリンズの町のショッピング街に行きましてびっくりしたことは、町は円形で中心からだいたい五つの大きい道路がありました。この各道路ごとに違った音楽を流しておりました。例えば、クラシック音楽や現代音楽を本当に静かな何か宣伝カーみたいな大きい音じゃなしに、本当に静かなおとなしいのを流しています。何かその道路に入ると別の街に入ったような感じがしました。本当におもしろい街でした。

有田義啓 人間、いろんな性格の方だとか、考え方の違う方だとかたくさんいると思

いますので、先ほどもいいましたが、例えばそういう同じ気持ちを持っている小さなグループでも、そういう人たちが自分たちなりの小さなエリアを完成させていく。また自分の気持ちはそうなのだけれども、たまには違う気持ちの人たちとも接触してみたいんですね。そういうのがどんどん出来上がっていった方が、刺激はあると思うのです。ひとつに凝り固まらない方がもちろん良いとは思いますが、そういった違う性格の人たちとの交流なんかもおもしろいと思います。

堀内清治 いくつかのグループを作ってお互いに交流し合ひましょう、というそういう話になるわけでしょうか。

ちょっと質問の仕方が、的を得ていなかったのかもしれませんが、そういう若い人たちが自分たちの力を発揮するために、年寄りたちは邪魔をしているぞとか、あるいはこういうことがなければもっとうまくできるのとか。そういうことはございませんか。

有田義啓 僕らとしては、僕たちよりも年齢層の高い方々のパワーを当てにしたい、というのは事実あるのです。でも自分たちのそういう考え方だとかをどこに持っていっていいか、そういう方法を知らないと思うのです。それだけ場慣れもしていないですし、それだけのいろんなものを利用出来ない、利用出来る方法を知らない。そういった声はものすごく多く聞きます。

堀内清治 逆に年配の方は若いパワーを頼みにしているということになるのだと思うのですが、そういうことがお互いに、有無相通じ合ってやっていると、ほんとうに良いのだろーと思いますかね。

それから安永先生がおっしゃった静かな音楽が流れている場所というようなことは、例えば、上通り、下通り、シャワー通り、あの辺をイメージしたうえで、街の中でももう少し歩くことが楽しくなるようなそういう街づくりが出来ないか、というお話のように伺いましたが、そういうことでございますか。

安永露子 はい、昨日終わりましたが、八代市で第1回の県民文化祭をやりまして、あそこの本町通りとってわりと狭い町ですけども、そこがひとつのアートギャラリーになりまして、地元の人やそれから熊本の方たちなんかも絵を1点ずつそのお店に入れて、それによってお店のディスプレイをやったのです。それが非常に町の中で楽

しくて、お客さんもたいへん多かった。そういうことでいわゆるアートポリスというのは、純粋な芸術を、アートを町の中に存分に取り込むことも、ひとつのアートポリスではないかと思うのです。だからあの町に行ったらバッハが聞けるとか、この町に行ったらロックが聞けるとか。何かそういうふうな総合的な、立体的な楽しさ。そんなのがあってもいいと思うのです。それでちょっと申し上げたのです。

堀内清治 そういう場所として町がもっと楽しい町になっていく工夫が、いろいろと出来そうな気がいたしますが。

先ほど一番最初に安永先生が、熊本は白川と坪井川と井芹川の沖積層に出来た町であって、そこところが古来変わらないのだという、そういうお話がありました。熊本にとって水の問題というのは、いろんな意味で大事な問題だろうと思います。我々が飲水として使う、あるいは工場用水として使うという、そればかりでなくて、生活の楽しみとして水を使うということも、これから益々盛んになっていくのではなかろうかと思うのです。そこの、一番最初の御発言のところがちょっとわかりにくい点もございましたので、もう少しお話しませんか。

安永路子 熊本は森の都と言われているけれども、水の都であってもいいという、そういう気持ちもありますし、街づくりはやっぱりその土地の動かない自然に沿って作られていくというところに、基本的な特色があるのではないかと考えていますので、申し上げたわけなのです。それで特に最近白川の沿岸を壊すだとか、何か非常に恐ろしいことが囁かれますので、ひとつはそれに対する防衛の気持ちもあって、やはり白川、坪井川、井芹川、この三本の川はどうしても熊本には厳然としてあってほしいと思うし、それがひとつの熊本の城下町の地形にもなっていますから、これはやっぱり熊本の一番大きな自然の形を残すものではないかと、そういうことから言ったのです。

それからさっきの、音にこだわりますけれども、東京の銀座の三越にパイプオルガンが入って、いつもパイプオルガンの演奏のときは、お客さんが溢れるように入ったんです。そんなことが今すっかりなくなりまして、かえって昔の方がそういうモダンなことやっていたのではないかなと、そういうことも考えております。

堀内清治 町の中の水というのは、例えば白川の問題。これはそんな難しい問題をここで取上げるつもりはありませんけれども、やはりこれも建設省の方が考えれば、洪水

のときにいかに早く水をはかせるか、という観点でお考えになるのではないかと思います。ですからまた緑を守ろうという立場から考えるとすれば、川岸に生えている樹木が大事だというふうに、お考えになるかもしれません。なかなか統一の取れた見方というのが出来ませんが改めて考えて見ますと、白川というのは、熊本の町の中にある大きなオープンスペースとして、あそこを何かで埋めてしまうわけにはいかない土地ですから、あれだけの広々とした水面があそこにあるというだけでも、熊本市民にとってはたいへん大事な空間だろう、というふうに思います。昔、私はあそこに堰を作って、白川の上にボートが浮かべられないかなんていうことを夢想したことがありますが、これは建設省の方に伺ってみると、もう一笑に伏されてしまいましたけれども、そういうことも技術が発達してくれば、やって出来ないことではないのではなからうかと、いまだに夢を捨てていないわけでございます。それでほかの町にはすばらしい噴水が作られていて、熊本の町にも噴水がないわけではありませんが、最近では本当にすばらしいと思うような噴水が、他の町ではよく写真に出てまいります。それで我々も水に親しむという場合に、何かもう少し、夏になると子供がその噴水の下で、一緒に水と遊ぶことが出来るような。あるいは本当に惚れ惚れとするような噴水を作ってみるとか。そういうふうにして水に対する愛着を深めていくということが、熊本の水の問題についてやっぱり根本的につながっていく問題ではないか、というふうに考えているわけです。これから先も熊本の街づくりのひとつの基本として、水の問題というのは忘れてはいけない問題であるだろうと思っております。

それと街づくりということに関して申しますと、やはりそこに何かがあると、ただある建物があるというだけではなくて、例えば、この間竹田へまいりましたけれども、竹田という町のお城を見てまいりますと、荒城の月というあの歌と竹田城とは、切っても切れない関係にあるような気がいたします。そしてそういう形で竹田の景観というのが、あるストーリーに乗かった形で、ここは大事なところだ。ここはまあそれほどではないところだ。しかしこのところはもう絶対に守らなくちゃいけないところだというふうな、そういう組立てが出来てきて、そういうストーリーにしたがって町の人たちもそれなりに、自分たちの町に対する愛着を呼びおこしますし、それからよそからやってきた人たちも、そういうストーリーにしたがって町を見ていくと、そういうことになるのではないか、という気がしています。熊本の町にもやはりいろいろそういうストーリーを、古いストーリーを掘り起こしていく。あるいは例えば、シャワー通りというのは、これはたぶんついこの間できたストーリーだと思いますけれども、そういうストーリー

を作って、そしてそれをみんなで育てていくというふうな、そういう努力が必要なのではないかと思います。有田さん、何か町のストーリーづくり。それは通りでもいいですし、それから地域でもいいのですけれども。何かそういうことに良いアイディアというものは、ないものでしょうか。

有田 義啓 やっぱりものすごくそういう感受性の強い人がいて、そういう人を自然に誰かがバックアップしてくれるようになると思うのです。今シャワー通りには、30店舗から40店舗ぐらいのお店があると思うのですけれども、やっぱり12年の間にそういった集まり方をしてきましたし、条件なんかもよかったと思うのですけれども、そういうとにかくエリアを作って、そのエリアの中で面を作っていけば何とか、その面と面がつながってそこに線が出来て、その線の内からまた面が出来ていったりだとか、そういったことだと思うのです。まずとにかくものすごく夢のある人が何かを始めれば、必ずみんながバックアップしてくれるという、実感はあります。

安永 路子 パトリック先生、シャワー通りを日本語で言ったらどうなりますか。

パトリック・フランシス いや、最初聞いたときにどういう意味か、ちょっとさっぱりわからない。何か風呂の関係じゃないかと思いました。あとで屋根がないから雨が降るという意味でシャワー通りだということがわかったのです。

先生ちょっと一言いっていいですか。こういう機会でないともったに出来ないから、お願いを含めて言いたいことがあります。最近は国際化とか国際人とか、いろいろな話が出ておりますし、実際に熊本の場合には、外国人も以前よりもたくさん来るようになっております。しかしいつも寂しいと思うのは、熊本にはすばらしい観光施設もあります。例えば熊本城や水前寺公園や泰勝寺とか。外国人がだいたい切符売場のところで英語のパンフレットをお願いしますというと、ないか、いま預かっていないか、ほとんど手に入りません。はっきり言うと、非常に残念だと思います。特に日本のものの場合には熊本城でも水前寺公園でも、言葉で説明するのは本当に苦労します。私は長くおりますので日本の文化、伝統、歴史というものはだいたいわかるようになっておりますけれども。英語の説明があれば、本当に為になると思います。しかし言いたいことは県庁や市役所には、県庁の人は怒るかもしれないけれども、すばらしい英語の資料があります。膨大のお金をかけて、考えられない程きれいな印刷物が出来ております。しかし頼んでも、

あんまり高い場合には簡単に配りません。県庁や市役所の中に保存しているかどうかわかりませんが、このすばらしい資料が手に入らなくなっております。有料でもいいから例えば、熊本城や水前寺公園や、泰勝寺の入口のところに、熊本について英語であるところまで詳しいことを書いてある説明書を買ってもいいから置いてほしい。何かもうちょっとすばらしい昔の伝統文化、歴史の紹介という意味を含めて、考えてほしいという感じがします。泰勝寺はガラシャ夫人の墓か何かがありますが、外国人に対しては特に教会関係でキリスト教関係の方には、非常に関心が深いです。しかし英語の説明はわずか5行か6行ぐらい簡単にパッパッパッと書いてあり、何が何かわかりません。もうちょっと細かいことまで書いてあれば、本当にみんなもっと関心が出るのではないかと思います。県庁の人が怒られたならば深くお詫び申し上げますけれども。

堀内清治 パンフレットもそうですが、例えば、水前寺の公園にまいりますと、古今伝授の間という、たいへんりっぱな古い建物があります。熊本ではあういうりっぱなところで、お茶を飲むことが出来るようになっているわけですね。これはたいへんすばらしいことだと思うんですが、パトリック先生がおっしゃるのには、水前寺公園へ行ってもずいぶん長い間、古今伝授の間に入っていないとは思ってなかった、とおっしゃいました。やはり公園の計画を立てるときに、歩いていくと自然にあそこへ入っていけるような、そういうレイアウトをするということも、パンフレットと並んで大事なことでないかというふうに思っております。そういう細かいことを取上げて言い出すと、きりもないことだろうと思います。もうそろそろ時間も終わりになってまいりましたが、先ほどパトリック先生の方から、町というのは我々の町であって行政の町ではない。だから出来ることはみんなで作るんだ、というようなお話がございました。それでこれはいつも我々の側から行政に物申すとか、あるいは行政の方が我々を指導するとかそういうことではなくて、我々の自発的な意思として熊本の町を良くしていくために、どういうことを心掛けたらいいだろうかということについて、パトリック先生もう少し補足して何かおっしゃっていただいて、それを今日の締めにさせていただきたいと思います。よろしく願いいたします。

パトリック・フランシス 今、街づくりというとか何かものを作るとか、建物を建てるとか。デパートを大きくするとかいうふうになっています。私は専門家ではないから、感情的になったかもしれませんが、町で一番大切な特色は、その町の中にいる人

間です。この本当に住みやすく、明るく、安全で、子供が育ちやすい町を作ることが基本的なことだと思います。それから物質的なこと、建物とか設備とか、道路とか、ということを考えるのが、一番良いのじゃないのかと思います。幸福な町とはどういう町かということについては、いろいろと考えなければならないと思いますけれども、例えば、最近は一とつ非常に重大なポイントだと思うのは、青少年問題です。子供たちの育成といったものが、非常にあっちこっちで議題になっております。この子供たちが本当に安心して、無事に育つことが出来るようにするには、地域社会の環境づくりに非常に重大な責任があると思います。しかし実際は今の子供たちの教育問題について話しをする場合には、学校の先生は誰がやっているとか、学校の方針はどうなっているとか、学校の校則はどうかとか、こういうことももちろん大切ですけれども、しかし子供たちを育てる場合には、学校の役割ということよりも僕の考えでは家庭教育といえますか、地域社会の教育に非常に重大な役割があると思います。基本的な人間づくりには、環境の影響が非常に大きいです。それで私は町を作る場合には、何か人間を中心にして本当に明るく、素直で、純朴な人間に育つことが出来るような町を作ることが必要だと思います。みんな町は自分の町です。最近では日本の場合には、アメリカもそうですけれども、わが家、わが子中心になっております。協力体制ということがちょっと薄くなっているような感じをします。もうちょっとみんなで関心を持つようにして、協力体制を作る。我々の町だから我々が作らないとどうにもならない。そしてどうにもならない場合には、陳情に行ってもいいです。しかし基本的なことは我々の責任です。最後に一言言えば、最近ではさびしいと思ったのは、昔と言ってもそんな何百年前のことではなく、10年、15年前には、各町にほんとにうるさい、やかましいおじいちゃん、おばあちゃんがたくさんおりまして、やかましい、うるさいと言いながら、子供たちに対しては教育面ではほんとうにすばらしいものがありました。子供たちが悪いことをしようと思ったときにも、出来ないような、おじいちゃん、おばあちゃんがやかましいから、悪いことが出来ないような風景があって、ほんとうにすばらしいと思う。しかし最近では何か、おじいちゃん、おばあちゃんは静かになって、ゲートボールが忙しいかどうか分かりませんが、とにかく自分には関係がないというようになっています。街づくりは物質面よりも、人間の関係といえますか、協力体制といえますか、助けあい精神といえますか、これによってりっぱな街ができるのじゃないかと思います。あまり人間は物質面ばかり考えると、冷たい町になると思います。いまステージに生花があります、本当に火の国熊本にふさわしい火が出るような、燃えるような感じがしますけれども、最近の町は何か火の国とい

うよりも、冷蔵庫みたいになっているような感じがしますので、その冷蔵庫にならないようにみんなが関心を持つことが、非常に大切だと思います。

堀内清治 どうもありがとうございました。最後の御発言としてたいへん良いお言葉だったと思います。ようするに街づくりは人づくりなのだ。我々は良い町を取戻すと同時に、社会の教育機能というものをもういっぺん復活させようではないか、という御趣旨のお話だったように思います。本日はたいへん司会が不手際でなかなか難しくて、どういうふうにお話を伺っていいのかわからなくて、たいへんお聞き苦しいパネルディスカッションになったかもしれませんが、どうも長い間御静聴いただきましてありがとうございました。ちょうど時間もまいりましたようですから、これで終わらせていただきたいと思います。

挨拶



(財)自治総合センター事務局長
市橋 光雄

主催者の一員でございます、自治総合センターの市橋でございます。本日は長時間にわたりましてこのシンポジウムに御参加をいただきまして、ありがとうございました。先ほどから伺っております、ほんとうに潤いのある街づくりというのはむずかしい。行ってみて、住んでみたい町というのを作るのが、潤いのある街づくりだそうでございますけれども、それがいったいどういうことかは、人によってなかなか違う。やっぱり公共施設を作ったり、道路や橋を作るのも大切だけれども、そのほかに何かがあると、先ほど堀内先生がおっしゃったように、やはり人間の問題に帰ってくる、というようなことのようにございます。本当に人間が、人同志がふれあいをいたしまして、しかもりっぱな設備の出来ている町、そういうような町に、どういうふうにして作り上げていくか。これはやはり今日のシンポジウムと言いますのは、その問題を解決するためのアプローチと申しましょうか、その1コマであろうと思います。またみなさんが今日のいろいろな先生方のお話を、それぞれお持ち帰りいただいて、おれはどういうふうに考えたらいいのかというふうにして、街づくりに参加していただくことが、将来のりっぱな熊本の街を作る基礎になるのじゃなかろうか、私ども主催者の1人といたしまして、そのようなことでまた熊本の街がりっぱな潤いのある街となりまして、21世紀を迎えられますことを心からお祈りを申し上げまして、たいへん簡単でございますがお礼に替えさせていただきます次第でございます。本日はどうもありがとうございました。

「くまもとアートポリス」事務局

熊 本 県 土 木 部 建 築 課 内

〒862 熊本市水前寺6-18-1

TEL 096-381-8912
